

ジャン・クリストフ

JEAN CHRISTOPHE

第三卷 青年

青空文庫

一 オイレル家

家は沈黙のうちに沈んでいた。父の死去以来すべてが死んでるかと思われた。メルキオルの騒々しい声が消えてしまった今では、朝から晩まで聞こえるものはただ、河の退屈な囁きばかりであった。

クリストフは執拗しつように仕事のうちに没頭していた。幸福になろうとしたことをみずから罰しながら、默然として憤っていた。哀悼の言葉にもやさしい言葉にも返辞をしないで、傲然ごうぜんと構え込

んでいた。日々の業務に専心し、冷やかな注意で稽古けいこを授けた。彼の不幸を知ってる女弟子でしたちは、彼の平然さに気を悪くした。けれども苦しみを多少経験したことのある年上の人たちは、そういう外見上の冷淡さが、少年においてはいかなる苦悶くもんを隠していることがあるかを、よく知っていた。そして彼を憐れあわんだ。しかし彼は彼らの同情をありがたいとも思わなかった。また音楽さえも、彼になんらの感謝をも与えなかった。別に喜びの情をも感じないで、義務のようにして音楽をひいていた。あたかも彼は、もはや何事にも興味をもたないことに、もしくはそう思い込むことに、生存の理由をすべて失うことに、それでもなお生存することに、ある残忍な喜びを見出しているかのようだった。

二人の弟は、喪中の家の沈黙に慍おびえて、急に外へ逃げ出してしまった。ロドルフはテオドル伯父おじの商館には行って、伯父の家に住んだ。エルンストの方は、二、三の職についてみた後、マインツとケルンとの間を往復してゐるライン河の船に乗り込んで、金のほしい時ばかりしか顔を見せなかった。それでクリストフは母と二人きりで、広すぎる家に残ることになった。そして収入の道もわずかだったし、父の死後にわかった若干の負債をも払わなければならなかったので、つらくはあつたが、ついに決心して、もつと質素な安い住居を捜そうとした。

二人は小さな住居を見出した——市場通りのある家の三階で、二、三の室があつた。そのあたりは騒々しく、町のまん中になつ

ていて、河や樹木や、あらゆる親しい場所から、だいぶ隔つていた。しかし感情よりも理性に従わなければならなかった。そしてクリストフは、苦しみたいという悲痛な欲求を満たすのにいい機会を得た。そのうえ、家主いえぬしのオイレル老書記は、祖父の友人で、クリストフ一家の者を知っていた。ルイザは、がらんとした家中にしよんぼりして、自分の愛した人々のことを覚えていてくれる者をたまらなく懐なつかしがっていたので、右の一事ですぐそこに住もうと心をきめた。

二人は引越しの仕度したくをした。永久に去ろうとする悲しいまた懐しい家庭で過す最後の日々にがの苦い憂愁を、彼らはしみじみと味わった。心の悲しみを言いかわすこともほとんどできかねた。それ

を口に出すことが、恥ずかしかつたしまた恐ろしかつた。どちら
も、心弱さを見せてはいけな^いと考^えていた。雨戸を半ば閉めた
侘^{わび}しい室で、ただ二人で食卓につきながら、高い声をするのも憚^{はば}
り、急いで食事をし、顔を見合わすことも避けて、心痛の情を隠
そうとばかりしていた。食事が済むとすぐ別々になつた。クリス
トフはまた仕事に出かけていつた。しかしちよつとでも隙^{ひま}がある
と、家にもどつて来て、ひそかにはいつてゆき、自分の室か屋根
裏かに、爪^{つま}先^{さき}立^たつて上^あつていつた。そして扉^{とびら}を閉め、古い鞆^{かばん}の
上や窓縁の上など、片^{かた}隅^{すみ}にすわつて、そのままじつと何にも考
えないで、少しの足音にも震えるような古い家のそれともない物
音に、心を浸すのであつた。彼の心もその家のように震えていた。

家の内外の空気の流れ、床板の軋りきし、聞きなれたかすかな物音、それらを気懸りきがそうに窺うかがった。どれにも皆聞き覚えがあつた。彼はぼんやり意識を忘れて、頭には過去の面影が立ち乱れていた。サン・マルタン会堂の大時計の音が聞えると、惘然ぼうぜんとしていたのから我れに返つて、また出かける時間であることを思い出すのだった。

階下したには、ルイザの足音が静かに行つたり来たりしていた。幾時間もその足音の聞えないことがあつた。彼女は何の物音もたてなかつた。クリストフは耳をそばだてた。大きな災いの後には長く不安が残るが、やはり彼も多少不安な気持で、階下に降りて行った。扉を少し開いてみると、ルイザはこちらに背を向けていた。

戸棚とだなの前にすわって、まわりに種々な物を取り散らしていた。襪は襪はや、古着や、半端な物や、形見の品などで、片付けると言つては取り出してるのだつた。彼女には片付ける力も失うせていた。ひとつひとつの物が皆何かの思い出の種となつた。それをひっくり返しうち眺め、夢想到にふけていた。品物は手から滑すべり落ちるところが多かつた。彼女はそのまま幾時間もじつとしていて、両腕を垂れ、椅子いすの上にぐったりして、悲しい考えにぼんやり我れを忘れていた。

隣なれなルイザは、今や過去の最も楽しい日に生きてるのだつた——その悲しい過去の。彼女は過去において喜びを得たことはきわめてまれであつた。しかし苦しむことにいつも慣れきつていた

ので、わずかな親切を受けても、それにたいする感謝の念を長く心にもつていたし、生涯しょうがいのうち^{ほの}に時たま輝いた仄かな光は、彼女の心を輝かすのに十分だった。メルキオルのひどい仕打も皆忘れてしまつて、いいこときり覚えてはいなかった。結婚の事柄は、生涯の最も大きな物語となつていた。メルキオルの方は出来心から落ち込んだのであつて、すぐに後悔したとはいえ、彼女の方では心を籠こめてのことだった。自分が向うを愛してると同じに、自分も向うから愛せられてると思つていた。そしてメルキオルにたいして、しみじみとした感謝の念をいだいていた。その後メルキオルの心がどうなつたかは、了解しようともつとめなかつた。彼女はあるがままの現実を見ることができなくて、ただあるがま

まに現実を堪え忍ぶことだけを知っていた。生活のために生活を理解する必要を持たない謙虚な善良な婦人として。自分で説明のつかない事柄は、神にその説明を任していた。メルキオルやその他の人々から受けるあらゆる不正はすべて、妙な信仰の心から、その責任を神に転嫁さして、自分の受ける善ばかりを彼らには帰していた。それゆえその悲惨な生存も、彼女にはなんら苦い思い出を残してはいなかった。それらの欠乏と疲労との年月からは、ただ自分の身が磨りへらされた——虚弱な者よ——とばかり感じていた。そしてもうメルキオルがいない今となっては、二人の息子が家庭から逃げ出してしまった今となっては、も一人の息子も彼女の手を離れ得るらしい今となっては、働く勇気をすべて失っ

てしまっていた。疲れはててぼんやりし、意力も鈍りきっていた。働きづめの人々が、生活の峠を越して、不意の打撃から働く理由をすべて奪われてしまうと、往々神経衰弱の危機に襲われるものであるが、彼女もそういう危機にさしかかっていた。彼女はもはやあらゆる元気を失っていて、編みかけの靴下を仕上げることもできず、かき回した引き出しを片付けることもできず、窓を閉め^しに立上ることもできないほどだった。じつとすわり込んで、ぼんやりし、がっかりしていた——ただ思い出にふけるばかりで。彼女は自分の衰^{すいたい}顔に気づいていた。それを恥じていた。そして息子^{すこ}にそれを隠そうとつとめた。クリストフは利己的に自分の苦しみにはばかり没頭して、何にも気づかなかつた。もちろん彼は、そ

のころ母が口をきくにも、ちよつとしたことをするにも、非常にぐずぐずしているのにたいして、ひそかにじれてはいた。しかし、母のいつもの活発な様子がいかに變つていたにせよ、それを氣にかけてはいなかつた。

がその日、彼は母のところへふいにやつて行つて、母の様子に初めて驚いた。彼女は襪ぼろを床ゆかに取り散らし、足下に積み、両手にいっぱい握り、膝ひざの上に広げて、その中にじつとしていた。首をさし出し、頭を前に傾け、硬こわぼつた顔をしていた。彼がはいつて来る足音を聞いて、ぞつと身を震わした。その白い頬ほおに一抹まつの赤味が上つた。本能的な動作で、もつてる品物を隠そうとした。そして当惑したような微笑を浮かべてつぶやいた。

「こんなに、片付け物を……。」

過去の遺物のうちにつなぎ止められてるその憐れな魂を、彼は痛切に感じた。そして惻隱そくいんの情に打たれた。けれども多少とがめるような荒い口調で、ぼんやりしてる彼女を呼びさまそうとした。

「さあ、お母かあさん、こんな閉め切った室の中で、この埃ほこりの中にじつとしてちやいけません。身体に毒です。元気を出して、すぐ片付けてしまわなけりやいけません。」

「そうだね。」と彼女はおとなく言った。

彼女は引き出しに品物をしまうため立上ろうとした。しかしすぐ、がっかりしたようにもってた物を取り落として、またすわ

り込んでしまった。

「ああ、私にやできない、できない。」と彼女は嘆息した。「いつまでたつても片付けきれないよ。」

彼はびっくりした。彼女の方へ身をかがめて、両手でその額を撫なでてやった。

「ねえ、お母さん、どうしたんです！」と彼は言った。「手伝いましょうか。病気ですか。」

彼女は答えなかった。心の中ですすり泣いていた。彼は彼女の両手を取り、その前にひざまずき、室内の薄暗がりの中で彼女の顔をよく見ようとした。

「お母さん！」と彼は心配して言った。

ルイザは彼の肩に額をもたせ、我れを忘れて涙にむせんだ。

「お前、」と彼女は彼に身を寄せながらくり返し言った、「お前……私を見捨てやしないでしょうね。約束しておくれ。私を見捨てやしないでしょうね。」

彼は愛憐あいれんの情に胸がいっぱいになった。

「ええ、お母さん、見捨てやしません。どうしてそんなことを考えるんです。」

「私はほんとに不幸なのだよ！ 皆私みんなを捨ててしまった、皆……皆……」

彼女は周囲の品物を示した。彼女が言ってるのは、品物のことだか、息子むすこたちのことだか、死んだ人たちのことだか、どれとも

わからなかった。

「お前は私といっしょにいてくれるでしょうね。私を捨てやしないでしょね。……お前にまで行かれてしまったら、私はどうなるでしょう？」

「私は行きやしません。いっしょに暮しましょう。もう泣いちゃいけません。私は誓います。」

彼女は泣きやむことができずに、なお泣きつづけた。彼は自分のハンケチでその眼を拭^ふいてやった。

「どうしたんです、お母さん。苦しいんですか。」

「私にも、どうしたんだか、私にもわからないよ。」

彼女はつとめて落着こうとし、微笑^{ほほえ}もうとした。

「いくら考えたって私は駄目だめなんだよ。ちよつとしたことにまた涙が出て来るからね。……そらねえ、また涙が出て来たよ。……堪忍しておくれ。私は馬鹿になつてしまった。年を取つてしまった。もう元気がない。もう何にも面白くない。もうなんの役にもたたなくなつた。こんな物といつしよに埋めてもらいたいんだよ……。」

彼は彼女を子供のように胸に抱きしめてやった。

「心配してはいけません。気をお休めなさい。もう考えないでください……。」

彼女はしだいに気が和らいできた。

「馬鹿げてるね、私は恥ずかしいよ……。でも、私はどうしたん

だろう、どうしたんだらうねえ。」

この働きの老婆ろうばは、どうして自分の力がにわかには折れくじけてしまったか、それを理解することができなかつた。そしてただ恥ずかしい思いをした。彼はそれに気づかないふりを装つた。

「少しくたびれたんですよ、お母さん。」と彼はつとめて平気な調子で言つた。「なんでもないことでしょう。今によくありません……。」

しかし彼も心配になつた。幼い時から彼は、あらゆる艱難かんなんに黙つて堪えてゆく雄々しい忍従的な彼女の姿を、いつも見慣れていた。そして今のその悄しょう沈ちんしたさまが、彼には心配だつた。

彼は彼女に手伝つて、床ゆかの上に散らかつてる品物を片付けた。

時々彼女は、ある品に心止めてぐずついた。しかし彼はそれを彼女の手から静かに取上げた。彼女はなされるままになっていた。

それ以来彼は、前よりもつとめて母といっしょにいるようにした。仕事を終えると、自分の室に閉じこもらないで、彼女のところへ行つた。彼女がいかほど孤独であるかを、また孤独に堪えるほど十分強くないことを、彼は感じていた。彼女をそのまま一人で置くのは危険だつた。

夕方には、往来に面した窓を開けて、そこで彼は彼女のそばにすわつた。野の景色が次第に見えなくなつていった。人々は家に帰りかけていた。小さな燈火が遠くの家々にともつていた。二人

は幾度となくそれらのさまを見たことがあつた。しかしもう間もなく、それも見られなくなるのだつた。二人は途切れがちの言葉をかかわした。前からわかつてゐる知れきつた夕の些ささい細な出来事を、いつも新しい興味で、たがいに話し合つた。長く黙り込んでゐることもあつた。あるいはまたルイザは、頭に浮かんでくる思い出を、きれぎれの話で、なぜともなく持出すこともあつた。自分を愛してくれる心がそばにあることを感ずると、彼女の舌は少し解けてきた。つとめて話をしようとした。でもそれはむずかしかつた。彼女は家の者からわきに離れてゐる習慣がついていたのである。自分がいっしょに話をするには、息子むすこたちや夫はあまりに伶俐れいりすぎると思つてゐた。皆の話に口を出しかねてゐた。それでクリスト

フの孝心深い親切は、彼女にとつては新しいことで、この上もな
くうれしいことだつた。しかしまたそれに気おくれがした。容易
に言葉が出て来なかつた。考えをはつきり言いかねた。文句を途
中で言いさして、あいまい曖昧のままにした。時とすると、自分で言つ
てる事柄を恥ずかしがることもあつた。息子の顔をながめて話の
途中で口をつぐんだ。しかし彼は彼女の手を握りしめてやった。
彼女は安心を覚えた。彼はその子供らしいまた母親たる魂にたい
して、愛情と憐れんびん憫とをしみじみ感じた。幼い時彼はその魂の中
に身を縮めていたのであるが、今では向うから彼に支持を求めて
いた。そして彼以外にはだれにも興味の無いその些ささい細な無駄話や、
常に平凡で喜びもなかつたがルイザには限り無い価値があるように

思われた生活の、つまらないそれらの思い出話などに、彼はもの悲しい楽しみを覚えた。また時には、彼女の言葉をさえぎろうとすることもあつた。それらの思い出がなおいつそう彼女を悲しませはすまいかと恐れた。そして彼女に寝るように勧めた。彼女は彼の意をさとつて、感謝の眼つきで彼に言った。

「いいえ、この方が私には気持がいいんだよ。もう少しこうしていきましょう。」

二人は夜が更ふけてあたりが寝静まるまで、そのままじつとしていた。それからお寝やすみなさいと挨拶あいさつをかわした、彼女は苦しみの荷の一部を肩から降ろしていくらかほつとしながら、そして彼は自分に新しい荷が加わったことを多少悲しく思いながら。

移転の日が迫ってきた。その前日、二人はいつもより長い間、室に燈火もつけずにじっとしていた。たがいに言葉もかわさなかつた。時々ルイザは溜息ためいきをついた、「ああ、ああ！」クリストフは翌日の引越の種々な細かい事物にばかり注意を向けようとつとめた。彼女は寝ようとしなかつた。彼はやさしく彼女を無理に寝させた。しかし彼自身も、自分の室に上つていつてから、長く寢床にはいらなかつた。窓からのぞき出して、闇やみの中を透しながら、家の下にある河の真暗まつくらな流れを、最後にも一度見ようとした。ミンナの庭に立ち並んだ大木の間、風の吹き過ぎる音が聞えていた。空は真暗だつた。街路には通る人もなかつた。冷たい雨が落ち始めていた。風見かざみがきしつていた。隣りの家で子供が泣

いていた。夜は重苦しい悲しみで地上にのしかかっていた。時計の時間の単調な音や、三十分と十五分との粗雑な音が、屋根の雨音に点綴てんていされてる陰鬱いんうつな沈黙の中に、相次いで落ちていた。

クリストフが心凍えて、ついに寝ようと思った時、下の窓の閉まる音が聞えた。そして彼は寢床の中で、過去に執着するのは貧しい人々にとつては酷むごたらしいことであると考えた。なぜなら、貧しい人々には、富める人々のように過去をもつの権利がないから。彼らは一軒の家をも、おのれの思い出を匿かくまうべき一隅の場所をも、もってはいない。彼らの喜び、彼らの苦しみ、彼らの日々はすべて、風のまにまに吹き散らされている。

翌日、二人は激しい雨を冒して、見すばらしい道具を新しい住居へ運んでいった。老家具商のフィシエルは、荷車と小馬とを貸してくれた。自分でもやって来て手伝ってくれた。しかし二人は道具をすべてもって行くことができなかつた。こんどの住居は前のよりはるかに狭かつたからである。最も古い最も不用な品々は置いてゆくように、クリストフは母に決心させなければならなかつた。それは容易ではなかつた。ごくつまらない物も彼女にとつては大事だつた。跛足のテーブルも、こわれた椅子いすも、何物をも彼女は犠牲にしたくなかつた。フィシエルも祖父と古くから親しくしていたので押しがきくところから、クリストフと口をそろえて、小言を言わなければならなかつた。そして元來人がよく、ま

た彼女の苦しみがよくわかっていたから、それらの大事なこわれ物の若干は、彼女がまた取りに来ることのできる日まで保管しておいてやると、約束しなければならなかった。すると彼女はようやく、胸が張り裂けるような思いをしながら、それを手離すことに承知した。

二人の弟には、前もって引越のことを知らしておいた。しかしエルンストは前日、来られないと言いに来た。ロドルフは午ごろちよつと姿を見せただけだった。道具が馬車に積まれるのをながめ、少しばかり世話をやいて、忙しそうに帰って行った。

一同は泥^ね凜^{かるみ}の街路を進みだした。ねちねちした舗石の上にすべりがちな馬を、クリストフは手綱でとらえていた。ルイザは息^む

子すこと並んで歩きながら、彼を雨にあてまいとした。その次には、湿っぽい部屋へやの中に身を落ちつける侘わびしい仕事があつた。低い空の蒼あおしろ白い反映のために、部屋はいっそう陰鬱になつていた。家主一家の者が種々注意してくれなかつたら、二人は重くのしかかつてくる落胆の情に抵抗することができなかつたらう。馬車は歸つてしまい、道具は室の中にごたごた積み重ねてあり、夜になりかかつてはいるしするので、クリストフとルイザとは、一人は箱の上に、一人は袋の上に、疲れはててがっかりして腰を降ろしていたが、その時階段に、小さな空からせき咳が聞こえた。扉とびらをたたく音がした。オイレル老人がはいって来た。親愛なる借家人たちの邪魔をするのをていねいに詫わびて、それから、よくやって来てく

れたその最初の晩を祝うために、家の者といっしよに親しく晩ばんさ餐さんを共にしてほしいと言ひ添えた。ルイザは悲しみに沈んでいて、断りたいと思つた。クリストフもまた、その内輪の会合にあまり気が進まなかつた。しかし老人はたつて勧めた。でクリストフは、新しい家の最初の晩を悲しい考えにふけてばかり過ごすのは、母にとつてよくないと考へて、彼女に無理に承諾さした。

二人は階下したに降りて行つた。そこには一家の者が皆集まつていた。老人、その娘、婿のフォーゲル、クリストフより少し年下の男女の二人の孫。皆彼らを取り巻いて、よく来てくれたと言ひ、疲れてやしないかと尋ね、部屋へやは氣に入つたか、用はないか、など種々なことを尋ねた。そして皆が一度に口をきくので、クリ

ストフはまごついてしまつて、何が何やらわからなかつた。もうスープが出ていた。彼らは食卓についた。しかし騒々しい話はおつづいた。オイレルの娘のアマリアは、その近所の特別な事柄、町内の地形、自分の家の習慣や特徴、牛乳屋が通る時刻、彼女が起き上る時刻、種々な用達人や支払いの値段、などをすぐルイザに知らせ始めた。すっかり説明しつくしてしまわないうちは、彼女を許さなかつた。ルイザはうとうとしながら、それらの説明に気を向けてるふうを示そうとつとめた。しかし彼女がしいて口に出す言葉は、何にも了解していないことを示すものばかりで、そのためアマリアは苛立いらだつた声をたてて、なおいつそうくどくどとしやべつてきかした。老書記のオイレルは、音楽家生活の困難な

ことをクリストフに説明していた。アマリアの娘のローザは、クリストフの一方に並んですわっていたが、食事の初めからのべつに、息をつく隙ひまもないほどべらべらしゃべっていた。文句の途中で息を切らしながら、すぐにまたしゃべりだした。フォーゲルは陰気な顔をして、食物の不平を言っていた。そしてこの問題が、激しい議論の種となった。アマリアもオイレルも娘も、話をやめてその議論に加わった。シチューの中に塩が多すぎるか足りないかということについて、はてしない争論がもち上った。皆たがい尋ね合ったが、同じ意見は一つもなかった。各自に隣りの者の味覚を軽蔑けいべつして、自分の味覚だけが正当で健全であると思っていた。「最後の審判」の日までもその議論はつづくかと思われた。

しかしついに、天氣の悪さをいっしよに嘆くことに、皆折合いがついた。彼らはルイザとクリストフとの苦しみを親切に氣の毒がってくれ、クリストフが感動したほどやさしい言葉で、二人の勇氣ある行いを誉めてくれた。ただにその借家人たちの不幸ばかりではなく、自分たちの不幸や、友人やすべての知人らの不幸をも、満足げにもち出した。そして善人は常に不幸で利己主義者や不正直な者らにしか喜びはないものだということに、彼らの意見は一致した。その結論としては、生活は悲しいものだということ、生活はなんの役にもたたないということ、苦しむために生きるよりも、もとより神の思召には適わ^{かな}ないが、死んだ方がずっとましであるということ、などであった。そういう考えは、クリストフ

の現在の悲観説に近いものだったので、彼はその家主たちについて、その敬意をいだいて、その些細ささいな欠点には眼をつぶってやった。

彼と母とは、散らかった室にまた上つてゆくと、悲しいがっかりした気持を覚えたが、しかし前ほど孤独な気はしなかった。そしてクリストフは、疲労と町内の騒々しさとに眠られないで、夜のうちに眼を開きながら、壁を震わす重い馬車の響きや、下の階に眠ってる一家の者の寢息などを聞きつつ、一方では、自分と同じように苦しんでいて、自分を理解しているらしく、また自分も向うを理解できるように思われる、それらの善良な——実を言えば多少煩わしい——人々の間にあつて、幸福ではないまでも、前ほど不幸ではないだろうと、しいて思い込もうとした。

しかし彼は、ついにうとうとしたかと思うと、夜明けごろから不快にも眼をさまさせられた。議論を始めた隣りの人たちの声が響いたし、中庭や階段をやたらに水を注いで洗うために、猛烈に動かされているポンプのきしる音が、響いたからであった。

ユスツス・オイレルは、背のかがんだ小さな老人で、落着きのない陰気な眼をし、皺しわ寄つたでこぼこの赤ら顔で、頤あごは齒がぬけ、手入れの届かない髯ひげを絶えず手でしごいていた。ごく善人で、かなり廉直で、きわめて道德家だったので、クリストフの祖父とはよく気が合っていた。祖父に似てるとさえ言われていた。実際、彼は祖父と同時代に属すべき人で、同じ主義のもとに育てられた

人だった。しかし彼には、ジャン・ミシエルのような強い肉体的活力が欠けていた。すなわち、多くの点において彼と同じような考えをいだきながら、根本においてはほとんど彼に似寄っていない。なぜなら、人間を作るところのものは、思想よりもむしろ体質の方が重おもであるから。理知によって人間の間には、いかなる人為的なあるいは実際的な区別がたてられようとも、人類の最も大なる区別は、健康な人とそうでない人である。オイレル老人はその前者には属しなかった。彼は祖父のように道徳を説いていた。しかし彼の道徳は、祖父の道徳とは同じものではなかった。彼の道徳は、祖父のような強健な胃と肺と快活さをそなえていなかった。彼のうちにある、また彼の家族のうちにあるすべては、

もつと貧弱狭小な設計の上に立てられていた。四十年間役人をし、今では隠退していた彼は、閑散の非哀を苦しんでいた。晩年のために内部生活の源泉をたいせつにしなかつた老人らにとつては、この無為閑散ということが非常に重苦しくなるものである。先天的あるいは後天的なあらゆる習慣は、職業柄のあらゆる習慣は、オイレル老人にある小心さと悲しみを与えていた。そしてそれはまた、おのおのの子供のうちにも幾分か存していた。

婿のフォーゲルは、司法局の役人で、五十歳ばかりだった。背が高く、強壯で、頭がすっかり禿はげ、金縁眼鏡で顚こめかみ顚かみをはさみつけ、かなりの容ようぼう貌ぼうだった。彼はみずから病氣だと思つていた。そして実際、みずから思つてるような病氣は明かに一つももつて

はいなかったが、つまらない職務のために精神はとがり、坐居生ざぎよ活のために身体はやや衰退して、病気には違いなかった。もとよりごく勤勉で、価値のない男でもなく、多少の教養をもそなえてはいたが、不条理な近代生活の犠牲者であつて、役所の椅子いすに縛りつけられた多くの役人と同じく、憂鬱病ヒポコンデリーの悪魔に苦しめられていた。ゲーテが、自分では注意してよく避けながらも、それを憐あわれんで、「陰気な非ギリシヤ的な憂鬱病者」と呼んでいた、あの不幸な人間の一人であつた。

アマリアはどちらとも異つていた。強健で、騒々しく、活発で、夫の愚痴をきいても少しも気の毒と思わなかつた。夫を荒々しく励ましていた。しかし常にいっしょに住んでいると、いかなる力

もくじけるものである。一つの家庭において、二人のいずれかが神経衰弱だと、数年後には、二人とも神経衰弱になつてることがしばしばである。アマリアはフォーゲルに強い言葉をかけはしたが、すぐその後では、彼よりもなおひどくみずから嘆くようになった。荒々しい素振りから悲嘆へと急激に移つていつて、少しも夫のためにはならなかつた。些ささい細なことにささいも騒々しく騒ぎたてながら、かえつて彼の病を募らした。そしてついには、わずかな愚痴にもそういう大袈裟な反響げさを返されるのにおびえきつてる不幸なフォーゲルを、すっかり圧倒してしまつたばかりでなく、また自分自身をも圧倒してしまつた。こんどは自分から、自分の丈夫な健康状態や、父や娘や息子の丈夫な健康状態などについて、理

由もないのに嘆くようになった。それが一種の病癖となった。そして何度も口に上せるために、しまいにはそれをほんとうと思ひ込んだ。ちよつとした風邪かぜをも大袈裟あつとに考えた。すべてが不安の種となった。丈夫に暮してると、後で病気になりはすまいかと考へて気をもんだ。そういうふうにして、生活は絶えざる杞憂きゆうのうち^に過ぎていった。けれども、そのためにだれも加減が悪くなる者はなかつた。その絶え間もない嘆きの習慣が、皆の健康を維持するのに役だつてゐるがようだった。だれも皆平素のとおり、食ひ眠り働いていた。一家の生活はそのため^に弛緩しかんしてはいなかつた。アマリアの活動的な性質は、朝から晩まで、家の上から下まで、始終動き回つても満足しなかつた。まわりの者まで皆精を出さな

ければ承知しなかつた。そして家具を動かしたり、敷石を洗つたり、床石をみがいたりして、声や足音が立ち乱れ、たえず忙しく騒々しかつた。

二人の子供は、だれにも安閑としてることを許さないその騒ぎ好きな権力のもとに圧伏されて、それに服従するのが自然だと思つてゐるらしかつた。男の子のレオンハルトは、なんとなくきれいな顔つきで、きちょうめん几帳面な様子をしていた。少女のローザは、金髪で、青い静かなやさしいかなり美しい眼をもつていて、こまやかな顔色の鮮かさあざやと気質きだてのよさそうな様子とのために、かわいらしく見えるはずだったが、ただ、鼻が少しかつて据りすわぐあいが悪く、顔つきに重苦しい感じを与え、彼女を馬鹿ばか者らしく見せて

いた。パールの美術館にあるホルバインの描いた若い娘——マイエル町長の娘——すわって、眼を伏せ、膝ひざに両手を置き、蒼白い髪を解いて両肩に垂れて、無格好な鼻を当惑してゐるような様子でいる、あの娘を、ローザは思い起こさせるのであった。しかし彼女は、自分の鼻をほとんど気にしていなかった。それくらいのこととは、彼女の倦うむことのない饒じょう舌ぜつを少しも妨げなかった。種々なことをしゃべりたてるその鋭い声——すっかり言つてしまふ隙ひまがないかのようにいつも息を切らして、いつも興奮して熱中しきつてる声が、たえず聞こえていた。母や父や祖父から、腹だちまぎれの怒鳴り声を浴びせられても、なお彼女はやめなかった。それにまた彼らが腹だつのも、彼女がいつもしやべつてばかりい

るからというよりむしろ、自分らに口をきく隙を与えないからであつた。それらの善良で誠実で親切な——正直な人間の精髓ともいうべき——りっぱな人々は、ほとんどすべての美德をもつてはいたが、しかし人生の美趣をなすところの一つの美德が、彼らには欠けていた、すなわち寡黙の美德が。

クリストフは隠忍な気分になつていた。彼の我慢のない怒りっぽい気質は、苦悶くもんのために和らげられていた。彼はみやびな魂の残忍な冷酷さを経験したので、優美な点もなくひどく退屈な者ではあるが、しかし人生について厳粛な観念をいだいている善良な人々の価値を、いつそうよく感ずるようになっていた。彼らは喜

びもなく生活しているので、弱点のない生活をしているように彼には思われた。彼はそういう人々をりっぱな人だときめていたし、自分の気に入るに違いないときめていたので、ドイツ人の気質として、彼らが実際自分の気に入ってるのだと思いつつもつとめた。しかしそれはうまくゆかなかつた。注目するのが不愉快なよなものは、自分の判断の適宜な安静と自分の生活の愉悦とを乱されるのを恐れて、いつさい見ることが欲せずまた見もしないという、ゲルマン風な阿諛的^{あゆ}理想主義が、彼には欠けていた。彼は他人を愛する時、なんらの制限もなくすっかり愛しきろうとしたので、かえって最もよく相手の欠点を感じるのであった。それは一種の無意識的な公明さであり、やむにやまれぬ真実の欲求であ

つて、そのために彼は、最も親愛なる人にたいして、ますます洞^ど察^{うさつ}的になりますます氣むずかしくなるのだった。かくて彼は家主一家の人々の欠点にたいして、ひそかな憤^{ふん}懣^{まん}をやがて感ずるにいたった。彼らの方では、少しも自分の欠点を隠そうとはしなかつた。厭^{いや}などころをすっかりさらけ出していた。そして最もよいところは彼らの内部に隠れていた。クリストフも実際そう考えて、そして自分の不正をみずからとがめながら、最初の印象を脱し去ろうと試み、彼らが大事に隠している長所を見出してやろうと試みた。

彼はユスツス・オイレル老人と話をすることにつとめた。老人も話が好きだった。彼は祖父がこの老人を愛して激賞していたこ

とを覚えてるので、老人にたいしてひそかな同情を感じていた。好人物のジャン・ミシエルは、クリストフよりもなおいつそう、友人の上に幻を築き上げる幸福な能力をもっていたのである。クリストフもそのことに気づいていた。彼は祖父にたいするオイレルの思い出を知ろうとつとめたが無駄であった。彼がオイレルから引き出し得るものは、ジャン・ミシエルのかなりおかしな色褪あせた面影と、なんの面白みもない断片的な会話の文句ばかりだった。オイレルの話はいつもきまってこういう言葉で始められた。「あの気の毒なお前のお祖父じいさんに私がいつも言ってたとおりに…。」

オイレルは自分で言ったことより以外には、何にも耳に止めて

いなかつた。

恐らくジャン・ミシエルの方でも、同じような聴き方をしていてであろう。多くの友誼は、他人相手に自分のことを語るための相互阿諛あゆの結合にすぎない。しかし少なくともジャン・ミシエルは、冗弁の楽しみにあれほど無邪氣にふけてはいたが、やたらに注ぎかける同情心をももっていた。彼は何にでも興味をもつた。新時代の驚くべき発明を目撃したり、その思想に關係したりするために、もう十五年とは生き延びられないことを残念がっていた。彼は生活の最も大切な長所をそなえていた、すなわち、長い年月にも少しも衰えないで毎朝また蘇よみがえってくる新鮮な好奇心を。ただその天性を利用するだけの十分な才能をもっていなかつた。しか

しそういう天性を彼はうらやむに相違ないような才人が、世には
いかに多いことだろう！ 多くの人は、二十歳か三十歳で死ぬも
のである。その年齢を過ぎると、もはや自分自身の反映にすぎな
くなる。彼らの残りの生しょうがい涯は、自己真似まねをすることのうちに
過ぎてゆき、昔生存していたころに言い為なし考えあるいは愛した
ところのことを、日ごとにますます機械的な渋滞的なやり方でく
り返してゆくことのうちに、流れ去ってゆくのである。

オイレル老人が生存したのはずっと以前のことであつたし、ま
たきわめてわずかしが生存しなかつたので、貧弱なものしか残つ
てはいなかつた。彼は昔の職業と家庭生活とに關すること以外に
は、何にも知らなかつたし、また知ろうともしなかつた。あらゆる

ることについて、青年時代から変らない既成観念をいだいていた。彼は芸術に通じてると自称していた。しかしある定評のある名前を知ってるだけで満足し、それについていつも誇張したきまり文句をくり返していた。その他は皆つまらない無きに等しいものばかりだった。近代の芸術家のことを言われると、耳を貸しもしないで他のことを話した。彼は音楽が大好きであるとみずから言い、クリストフに演奏を頼んだ。しかしクリストフが、一、二度その願いをいれてひき始めると、老人は娘を相手に声高く話し出した。あたかも音楽は、音楽以外のものにたいする彼の興味を募らしているがようだった。クリストフは嚇^{かつ}として、曲の半ばで立ち上った。だれもそれを気にならなかった。ただある古い曲調——三、四の

——あるものはきわめて麗わしく、あるものはきわめて醜劣であつたが、いずれも皆等しく定評のある曲調、それだけがとくに、比較的沈黙を受け、絶対に喝采かつさいを受けた。初めの音律からもう老人は、恍惚こうこつとなり、眼に涙を浮かべた。それは現在味わつてる愉悦よりもむしろ、昔味わつた愉悦のためであつた。それらの曲調のあるもの、たとえばベートーヴェンのアデライドのごときは、クリストフにとつても親愛なものではあつたが、彼はついにそれらを忌みきらうようになった。老人はよくそれらの最初の小節を低吟して、「これこそ音楽だ」と断言し、「旋律メロデーのない近代の安音楽」との軽蔑けいべつ的な比較をもち出した。——まさしく彼は音楽を少しも知つてはいなかつた。

婿の方はもう少し教養があつて、芸術界の氣運にも通じていた。

しかしそれだけにかえつて悪かつた。なぜなら、自分の判断にいつも誹謗^{ひぼう}的精神を加えていたから。それでも趣味や知力が欠けるのではなかつた。ただ近代のものを賞賛する決心がつかなかつたのである。もしモーツアルトやベートーヴェンが彼と同時代の人であつたら、やはり彼らをも非難したろうし、もしワグナーやリヒアルト・シュトラウスが彼より一世紀も前に死んでいたら、彼らの価値を認めたとであろう。彼の憂鬱^{ゆううつ}な性質は、現在自分の生存中に生きてる偉人があるということを受けいれ得なかつた。そう考えることは不愉快だつた。彼は自分の失敗の生涯のために非常に氣むずかしくなつていたので、生涯はだれにとつて

も失敗なものであるし、失敗であらざるを得ないものであつて、その反対を信ずる者は、もしくは反対だと主張する者は、馬鹿か道化か、二つのうちの一つだということを、執拗しつように思い込んでいた。

それで彼は、名高い新人らのことを、苦にが々がしい皮肉な調子でしか話さなかつた。そして彼は愚鈍ではなかつたので、新人らの弱い滑稽こっけいな一面を、一目で見てとることができた。新しい名前を聞いたたびに、彼は軽悔の色を浮べた。その人について何にも知らない前からその人を非難しようとしていた——なぜなら知らない人であるから。クリストフに対していくらか同情をもっていたのも、この人間ぎらいな少年が彼と同様に人生はいけないものだ

と考へてると思つたからであるし、そのうえこの少年に天才がな
いと思つてたからである。くよくよしてゐる不平満々たる小人の魂
を最もよく相近づけるものは、おたがいの無力を認むることであ
る。それからまた、健全な人々に健康の趣味を最もよく与えるも
のは、自分が幸福でないから他人の幸福を否定しようとする凡^{ほんよ}
庸人^うや病人の愚かな悲觀主義に接することである。クリストフ
はそれを經驗した。それらの陰気な悲觀思想は元來彼には親しい
ものだった。しかし彼が驚いたのは、それをフォーゲルの口から
聞くことであり、また自分がもはやそれに染んでいないことだつ
た。それらの思想は彼に反対なものとなつていた。彼はそれらの
思想に氣色を損じた。

彼はアマリアの挙措にはなおいっそう反感をいだいた。その善良な婦人は要するに、クリストフの理論を義務に適用してゐるばかりだった。彼女は何事についても義務という言葉を口にした。彼女は絶え間なく働いていて、他人にも同じように働いてもらいたがつていた。そういう勤勉の目的は、他人および彼女自身をいっそう幸福ならしむるといふことではなかつた。否むしろ反対だった。その主要な目的は、皆の迷惑となることであり、生活を神聖化するために生活をできるだけ不愉快になすことである、とも言えるほどだった。多くの婦人にあつては他のあらゆる道徳的社会的義務ともなり得る、家庭的の聖い務めを、その神聖なる掟を、一瞬間たりとも彼女を止めさせ得るものは何もなかつた。同じ日

に、同じ時間に、床板をみがき、敷石を洗い、扉とびらのボタンを光らせ、力いっぱい敷物をたたき、椅子いすやテーブルや戸棚とだなを動かすことを、もしなさなかつたら、取り返しのつかないことになったと彼女は思うかもしれなかつた。彼女はそういう働きを誇りとしていた。あたかもそれが名誉にでも関することのようだった。けれどもいったい、多くの婦人が自分の名誉ということを考えたり護まもつたりするのは、これと同じような形式でやってるのではあるまいか。彼女らの名誉というものは、いつも光らしておかなければならない家具みたいなもので、よくみがき込んだ冷たい堅い――そしてすべりやすい床板なのである。

自分の職責を尽してしまつても、フォーゲル夫人はさらに愛想

よくなりはしなかった。彼女は神から課せられた義務でもあるように、家庭内のつまらない事柄に熱中していた。自分と同様に働かず、休息をして、仕事の間に生活を多少楽しむ婦人を、彼女は軽蔑けいべつしていた。そして、仕事をしながら時々腰をおろして夢想するルイザを、その室の中にまで追っかけてきた。ルイザは溜ため息めいきをもらしたが、しかしきまり悪そうな笑顔をして服従した。

幸いにもクリストフはそのことを少しも知らなかった。アマリアはクリストフが出かけるのを待って、彼らの部屋へちんにゆう入いり込んでくるのだった。今まで彼女は、直接に彼を攻撃しはしなかった。そうされたら彼は我慢できなかつたろう。彼は彼女にたいして内に敵意を潜めてるような状態にある自分を感じた。彼が最も許し

がたく思ったことは、彼女の騒々しいことだった。彼はそれに困りきった。自分の室——中庭に面した天井の低い小さな室——に閉じこもり、空気の流通が悪いにもかかわらず窓を密閉して、家の中の騒動を聞くまいとしたが、どうしてもそれから耳をふさぐことができなかつた。知らず知らずに、苛立いらだつた注意をもつて、下のわずかな物音にも聞き耳をたてていた。そして、ちよつと静かになつた後、恐ろしい人声が壁や床を貫いてふたたび高まつてくる時、彼は激怒に駆られた。怒鳴りつけ、足を踏みならし、壁越しに彼女をさんざんののしつた。しかし皆騒ぎ回つてるので、それに気づきもしなかつた。彼は作曲してゐるのだと思われていた。が彼はフオーゲル夫人を罵倒ばとうしぬいていた。尊意も敬意も消し飛

んだ。そういう時彼には、最もふしだらな女でもただ黙つてさえてくれるならば、いかに正直で美德があろうとあまりに騒ぎたてる女よりも、はるかにましだと思われるのであつた。

喧騒けんそう

にたいするそういう憎悪は、彼をレオンハルトに近づかせた。この少年だけがただ一人、家じゅうの混雑の中にあつて、いつもじつと落着いていて、場合によつて声を高めるようなことがなかつた。言葉を選んで、少しも急がず、控え目な正しい口のきき方をしていた。性急なアマリアには、彼が言い終えるのを待つだけの忍耐がなかつた。皆の者が、彼の悠ゆうちよう長さに怒鳴り声をたてた。それでも彼は平氣だつた。どんなことがあるうと、彼

の平静さと敬意のこもった謙讓さとは変化しなかった。クリストフはレオンハルトが宗教生活にはいるつもりだと聞いていた。そのため彼の好奇心はひどく動かされていた。

クリストフは当時、宗教にたいしては、かなり門外漢の状態にあつた。彼は自分でもどういふ心持にあるか知らなかつた。それを真面目まじめに考えるだけの隙ひまがなかつた。彼は十分の教養がなく、かつ困難な生活にあまり頭を奪われていたので、自分の心を分析してみることができず、思想を整理することができなかつた。そして激しい性質だったので、自分の心に一致しようがしまいがそんなことはいっこう平気で、極端から極端へと移りゆき、全信的仰から絶対的否定へと移り変つた。幸福な時には、ほとんど神の

ことは考えなかった、しかしかなり神を信ずる気持になっていた。不幸な時には、神のことを考えた、しかしほとんど神を信じていなかった。神が不幸や不正を許すとは、あり得べからざることのように考えられた。それに元来彼は、そういうむずかしい事柄をあまり念頭においていなかった。根本においては、彼はひどく宗教的だったから、神のことを多く考えなかった。彼は神のうちに生きていた。神を信ずる必要がなかった。神を信ずるのは、弱者や衰えた者など、貧血的な生活者にとってはよいことである。植物が太陽にあこがれるように、彼らは神にあこがれる。瀕死ひんしの者は生命にとりすがる。しかし、自分のうちに太陽と生命とを有する者は、なんで自分以外のところにそれらを求めに行く要があ

ろう？

クリストフはもしただ一人で生きていたら、おそらくそれらの問題に頭を向けることがなかったであろう。しかし社会的生活の義理として、彼はそれらの幼稚な閑問題に考慮を向けざるを得なかった。社会においては、それらの問題は不均衡なほど大きな地位を占めていて、人は歩々にそれにぶつつかり、いずれか心を定めなければならぬのである。力と愛とにあふれてる健全な豊ほうじ饒ような魂にとつても、神が存在するか否かを懸念けねんすることより、もつと緊急な沢たくさん山の仕事があたかもないかのようである。……神を信ずることだけが唯一の問題であるならばまだ分る。とはいえ、ある大きさのある形のある色のそしてある種類の、何か一つ

の神を信じなければいけない。このことについても、クリストフは考えてはいなかった。彼の思想の中では、クリストもほとんどなんらの地位をも占めていなかった。それは、彼がクリストを少しも愛していないからではなかった。クリストのことを考えたらそれを愛したに違いなかった。しかし彼はクリストのことを考えたことがなかった。時にはそれをみずからとがめ、心苦しく思った。どうしてクリストにもつと興味を見出せないのか、自分でも分らなかつた。それでも彼は教義を実行していた。家の者は皆教義を実行していた。祖父はよく聖バイブル書を読んでいた。クリストフ自身も几帳面きちょうめんにミサに出かけていた。彼はオルガン手だったからいくらかミサに手伝ってもいた。そして模範的な良心をもって

その役目に勉強していた。しかし彼は教会堂から出ると、その間何を考えていたかはつきり言い得なかつたであろう。彼は自分の思想を定めるために経典を読み始めた。そしてその中に面白みを見出し、愉快をさえも見出した。しかしそれは、だれも神聖な書物とは言いそうもないような、本質的には他の書物と少しも異るところのないある面白い珍しい書物の中から、くみとつて来るのに似ていた。ほんとうを言えば、彼はキリストにたいして同感をもっていたとするも、ベートーヴェンにたいしてはさらに多く同感をもっていた。サン・フロリアン会堂の大オルガンについて、日曜の祭式の伴奏をやっている時、彼はミサによりもむしろ大オルガンの方に多く気をとられていたし、聖歌隊がメンデルスゾー

ンを奏してる時よりもバッハを奏してる時の方が、はるかに宗教的気分になっていた。ある種の式典は彼に激しい信仰心を起こさせた。しかしその時、彼が愛していたのは神であつたらうか、あるいは、不注意な一牧師がある日彼に言ったように、ただ音楽ばかりであつたらうか？ この牧師の冗談は彼を困惑せしめたが、牧師自身はそれを夢にも知らなかつたのである。他の者だつたら、そんな冗談には気も止めず、そのために生活態度を変えようとはしなかつたらう——（自分が何を考へてるか知らないで平然としてるような者が、世にはいかに多いことだらう！）——しかしクリストフは、厄介にも真摯しんしを欲していたく悩んでいた。そのため彼はあらゆることにたいして慎重になつていた。一度慎重になれ

ば、常にそうならざるを得なかつた。彼は苦しんだ。自分が二心をもつて動いてるように思われた。いつたい信じているのか、もしくは信じていないのか？……この問題を一人で解決するには、彼は実際的にもまた精神的にも——（知識と隙とを要するので）——その方法をもたなかつた。それでも問題は解決せなければならなかつた。さもなくば彼は局外者となるかもしくは偽善者となるかの外はなかつた。しかも彼は両者のいずれにもなることではきなかつた。

彼は周囲の人々をおずおず観察してみた。だれも皆各自に確信あるらしい様子をしていた。クリストフは彼らのその理由を知りたくてたまらなかつた。しかし駄目^{だめ}だった。だれも彼に明確な答

えを与えてくれなかつた。いつも顧みて他のことをばかり論じた。ある者は彼を傲^{ごうまん}慢だとし、そういうことは論ずべきものではなく、彼よりも賢いすぐれた多くの人々が議論なしに信仰しているし、彼はただそういう人々と同じようにすればよいと言つた。または、そういう問いをかけられることは、あたかも自分自身が侮辱されることでもあるかのように、気色を損じた様子をする者もあつた。けれどもこういう人たちは、自分の事柄にたいして最も確信をいだいてる者では恐らくなかつたろう。またある者らは、肩をそびやかして微笑^{ほほえ}みながら言つた、「なあに、信仰は別に害になるもんじやない。」そして彼らの微笑は言つた、「そしていかにも便利だよ!……」そういう者どもをクリストフは心から軽^け

いべつ
蔑した。

彼は自分の不安を牧師に打ち明けようとしたことがあつた。しかしそのためにかえつて勇氣がくじけてしまった。彼は真面目に牧師と議論することができなかつた。向うはいかにも愛想がよかつたけれども、クリストフと彼との間には実際的に平等さがないことを、ていねいに感じさしてくれた。彼の優越は論ずるまでもなく分りきつたことで、一種の無作法さをもつてしななければ彼が押しつけた範圍から議論は出ることができないと、前もつて定まつているかようだった。敵の竹刀しなひを交かわすだけの稽古けいこ試合だった。クリストフが思い切つて範圍を踏み越え、一ひと廉かどの男にとつては答えるのも面白くないような質問をかけると、彼はただ庇護ひご

するような微笑を見せ、ラテン語の句をもち出し、神様が解き明かしてくださるように祈りに祈れと、父親めいたとがめ方をした。——クリストフは、そのていねいな優越の調子に屈辱と不快とを感じながら、話をやめてしまった。当不当にかかわらず、いかなることがあろうと、ふたたび牧師なんかの助けを借るまいと思つた。理知と聖職者の肩書とによつて自分より向うがすぐれてることとは、彼もよく是認していた。しかし一度議論する場合には、もはや優越も低劣も肩書も年齢も名前もないはずである。ただ真理だけが肝心であつて、真理の前には万人が平等である。

それで彼は、信仰してる同年配の少年を見出してうれしかった。彼自身も信じたいとばかり思つていた。そしてレオンハルトから

そのりっぱな理由を与えてもらいたいと希こいねがつた。彼の方から話をしかけた。レオンハルトはいつもの静かな調子で答えて、別に熱心さを示さなかつた。彼は何事にも熱心さを見せなかつたのである。家の中では絶えずアマリアか老人かに邪魔されてまとまつた話ができないので、クリストフは夕方食後に散歩をしようと申し出した。レオンハルトは礼儀深いので断りかねた。しかし気は進まなかつた。なぜなら、彼の怠惰な性質は、歩行や、会話や、すべて努力を要するようなことを、恐れていたからである。

クリストフは話を始めるのに困つた。なんでもない事柄についてへまな二、三句を発した後、彼は少し乱暴なほど突然に、心にかかつていた問題に飛込んでいった。ほんとうに牧師になる気が、

牧師になるのはうれしいのか、とレオンハルトに尋ねた。レオンハルトはまごついて、彼に不安そうな眼つきを向けた。しかし彼になんらの敵意もないことを見てとると、安心した。

「そうです。」と彼は答えた。「そうでなくてどうしてなれましよう！」

「ああ、」とクリストフは言った、「君はほんとに幸福だね！」

レオンハルトはクリストフの声のうちに、羨望せんぼうの気味がこもっているのを感じた。そして心地よくおだてられた。彼はすぐに態度を変え、胸きょうきん襟を開き、その顔は輝いた。

「そうです、」と彼は言った、「僕は幸福です。」

彼は晴れやかになっていた。

「どうしてそんなふうになつたんだい？」とクリストフは尋ねた。レオンハルトは答える前に、サン・マルタン修道院の歩廊の静かな腰掛に、腰をおろそうと言ひ出した。そこからは、アカシアの植わつた小さな広場の一隅ぐうが見え、なお向うには夕靄ゆうもやに浸つた野が見えていた。ライン河は丘ふもとの麓ふもとを流れて、荒れ果てた古い墓地が、墓石は皆雑草の波おほに覆おほわれて、閉しめ切つた鉄門の後ろに彼らのそばに眠つていた。

レオンハルトは語りだした。人生をのがれることは、永久の避難所たるべき隠れ家を見出すことは、いかに楽しいことであるかを、満足の色に眼を輝かしながら説いた。クリストフはまだ最近の心の傷が生々しくて、この休息と忘却との欲望を激しく感じて

いた。しかしそれには愛惜の念も交っていた。彼は溜息ためいきをついて尋ねた。

「それでも、まったく人生を見捨ててしまうことを、君はなんとも思わないのかい？」

「おう、何が惜しいことがあるもんですか。」と相手は静かに言った。「人生は悲しい醜いものではありませんか。」

「美しいものもまたあるよ。」とクリストフは麗わしい夕暮をながめながら言った。

「美しいものもいくらかありはしますが、それは非常に少ないんです。」

「非常に少ないって、僕にはそれで沢山たくさんなんだが。」

「ああそれは分別くさい考えにすぎません。一面から見れば、少しの善と多くの悪とがあります。また他面から見れば、地上には善も悪もないんです。そしてこの世の後には、無限の幸福があります。なんで躊躇ちゆうちよすることがありましょう。」

クリストフはそういう数理的な考えをあまり好まなかった。そんな打算的な生しょうがい涯がいはきわめて貧弱に思われた。けれども、そこにこそ知恵が存するのだと思ひ込もうとつとめた。

「そんなふうでは、」と彼は少し皮肉を交えて尋ねた、「一時の楽しみに誘惑される恐れはないだろうね。」

「あるもんですか！ それは一時のことにすぎないが、そのあとには永遠があるということが、わかってますからね。」

「じゃあ君は、その永遠というものを確信してるのかい？」

「もちろんです。」

クリストフはいろいろ尋ねた。彼は欲求と希望とに震えていた。もしレオンハルトが神を信すべき不可抗の証拠を示してくれるとするならば！　いかに熱心に彼は、神の道に従うために、あらゆる他の世界をみずから捨て去ることだろう。

レオンハルトは使徒の役目をするのを得意に感じていたし、そのうえ、クリストフの疑惑は形式にたいするものにすぎなくて、理論にはすぐに屈するだけの鑑識をそなえたものであると信じていたから、まず最初に、経典や福音書の権威や奇跡や伝統などの力を借りて説いた。しかし、クリストフがしばらくその言葉に耳

を傾けた後、それは問いをもつて問いに答えることであつて、自分が求めてるのは、ちようど自分の疑惑の対象となつてるところのものを示してもらいたいのではなく、疑惑を解く方法を示してもらいたいのであると言つて、彼の言葉をさえぎると、彼は顔色を曇らし始めた。クリストフは思ったよりいつそう不健全であり、理性によつてしか説服されまいと自負してゐることを、レオンハルトは認めざるを得なかつた。けれども彼はなお、クリストフが唯我独尊主義者の真似まねをしている——（彼は本心から唯我独尊主義者たり得る者があるとは想像だもしなかつた）——のだと考えた。で彼は落胆もせず、最近に得た学問を鼻にかけて、学校で習い覚えた知識に頼つた。そして命令よりもいつそうおごりかな調

子で、神と不滅なる魂との存在の形而上学的証拠を、ごたごたと並べたてた。クリストフは気を張りつめ、額に皺を寄せて一生懸命になり、黙って考えつめていた。彼はレオンハルトに言葉をくり返させては、その意味を理解し、それを心にかみしめ、その理路をたどろうと、はなはだしく骨折った。次に彼はにわかにかんし癩やくを起こして、人を馬鹿ばかにしてると言いきり、そんなことは頭の遊戯であつて、言葉をこしらえだし次にその言葉を実物だと考へて面白がつてる話し上手じょうずな奴やつどもの冗談だと、言い放った。レオンハルトは気を悪くして、そういうことを述べる人たちのりっぱな信仰を保証した。クリストフは肩をそびやかして、もし奴らが道化者でないとすれば三文文学者だと、ののしりながら言つ

た。そして他の証拠を要求した。

レオンハルトはクリストフが回復の道ないほど不健全であることを認めて、あきれ返ってしまふと、もう彼にたいする興味を失った。不信仰者と議論をして時間をつぶすな——少なくとも彼らが信じまいとつとめてる時には、と言われた言葉を思い出した。

そんな議論は、相手の利益にもならないうえに、自分の心を乱す恐れがある。不幸な者どもは、これを神の意志のままに打捨てておく方がいい。もし神に思召しがあつたら、彼らを啓発して下さるだろう。もし神に思召しがなかつたら、だれがあえて神の意志にそむくことをなし得よう？ それでレオンハルトは、議論を長くつづけようとは固執しなかつた。そしてただ、当分のうちは

仕方がない、いくら論じても、道を見まいと決心してる者にはそれを示すことはできない、祈らなければいけない、御恵みにすがらなければいけない、と静かに言うだけで満足した。神の恵みなしには何事もできはしない。御恵みを望まなければいけない。信ずるためには欲しなければいけない。

欲する？ とクリストフは苦々しく考えた。それならば神は存在するだろう、なぜなら神が存在することを自分が欲するのだから。それならばもう死は存しないだろう、なぜなら死を否定するのが自分にうれしいから。……嗚呼^あ！……真理を見る心要のない人々、自分の欲するとおりの形に真理を見ることができ、自分の気に入る幻をこしらえることができ、その中に甘く眠ることがで

きる人々、彼らにとつては人生はいかに気楽であることだろう！
しかしクリストフは、決してそういう寢床には眠れないに違
なかつた……。

レオンハルトはなおつづけて話した。好きな話題に話をもどし
て、観照的生活の魅力を説いた。そしてこの危険のない境地にな
ると、もう彼の言葉は尽きなかつた。彼が意外にも憎悪の調子で
述べたてる世の喧騒けんそう（彼はほとんどクリストフと同じくらい喧
騒をにくんでいた）から遠く離れ、暴戾ぼうれいから遠ざかり、嘲ちやうし
笑よゆうから遠ざかり、毎日人の苦しむ種々の惨めな事柄みじから遠ざか
り、世俗を超脱して、信仰のあたたかい確実な寢床から、もはや
自分に関係のない遠い世間の不幸を、平和にうちながめるといふ、

神に委ねた生活の楽しみを、彼はその単調な声を喜びに震わしつ
つ語った。クリストフはその言葉に耳を傾けながら、そういう信
仰の利己的なのを看破した。レオンハルトはそれに気づきかけて、
急いで言い訳をした。観照的生活は怠惰な生活ではないと。否実
際、人は行為よりも祈きとうによってさらに多く行動するものである。
祈きとうがなかつたら、世の中はどうなるであろう？ 人は他人のた
めに罪を贖あがない、他人の罪過を身に荷にない、おのれの価値を他人に与
え、世のために神の前を取りなしてやるのである。

クリストフは黙って耳を傾けてるうちに、反感が募ってきた。
彼はレオンハルトのうちに、その脱却の偽善を感じた。元来彼は、
信仰するすべての人に偽善があると見なすほど不正ではなかった。

かく人生を捨て去ることは、ある少数の人々にあつては、生活の不可能、悲痛な絶望、死にたいする訴え、などであるということ
を、——さらに少数の人々にあつては、熱烈な恍惚こうごつの感……

(それもどれだけつづくか分らないが) ……であるということ
彼はよく知っていた。しかし大多数の人々にあつては、他人の幸福や真理などよりもむしろ自分一身の静安に多く気をとられてる
魂の、冷やかな理屈であることがあまりに多いではないか。もし
誠実な心にしてそれに気づいたならば、そういうふう理想を冒ほ
うとく
洩うすることをどんなにか苦しむに違いない! ……

レオンハルトは今やきき々として、自分の聖なる棲木とまりぎの上から
見おろした世界の美と調和とを述べたてていた。下界においては、

すべてが陰鬱いんうつで不正で苦痛だったが、上界から見おろすと、すべてが明るく輝かしく整然としてるようになった。世界はまったく調子の整った時計の箱に似ていた……。

クリストフはもう散漫な耳でしか聴きいていなかった。彼は考えた、「この男は信じてるのか、もしくは、信じてると自分で思ってるのか？」けれども彼自身の信仰は、信仰にたいする熱烈な欲求は、そのために少しも揺がなかった。レオンハルトのような一愚人の凡庸ぼんような魂と貧弱な理屈とから、害せられるようなものはなかった……。

夜は町の上に落ちかかっていた。二人がすわってる腰掛は闇やみに包まれていた。星は輝き、白い霧が河から立上り、蟋蟀こおろぎが墓地

の木陰に鳴いていた。鐘が鳴りだした。最初に最も鋭い鐘の音がただ一つ、訴える小鳥の声のように天に向つて響いた。次に三度音程下の第二の鐘の音が、その訴えに響きを合した。最後に五度音程下の最も荘重な鐘の音が、前の二つに答えるかのように響いた。三つの響きが交り合つた。塔の下にいと、大きな蜂はちの巢の響きのように思われた。空気も人の心もうち震えた。クリストフは息を凝らしながら、音楽家の音楽も、無数の生物のうなつてるこの音楽の太平洋に比すれば、いかに貧弱なものであるかと考えた。人知によつて 馴じゆんよう 養よう され類別され冷やかに定列された世界の傍かたわらにもち出すと、それは粗野な動物界であり、自由な音響の世界である。クリストフはその岸も際限もない広こうぼう 茫たる鳴り響く海

原のうちに迷い込んだ。

そして力強いその眩つぶやきが黙した時、その余響が空中に消え去つた時、彼は我れに返つた。彼は驚いてあたりを見回した。……も
う何にも分らなかつた。周囲も心のうちも、すべてが變つていた。
もはや神もなかつた……。

信仰と同じく、信仰の喪失もまた、神恵の一撃、突然の光明、
であることが多い。理性はなんの役にもたたない。ちよつとした
ことで足りる、一言で、一つの沈黙で、鐘の一声で。人は漫歩し、
夢想し、何物をも期待していない。とにわかになすべてが崩壊する。
人は廢墟はいきよにとり卷かれたおのれを見る。一人ほつちである。も
はや信じていない。

クリストフは駭然^{がいぜん}として、なぜであるか、どうしてこんなことが起こったのか、了解することができなかつた。春になって河の氷解するのにも似ていた……。

レオンハルトの声は、蟋蟀^{こおろぎ}の声よりもさらに単調に、響きつづけていた。クリストフはもはやそれに耳を貸さなかつた。すっかり夜になっていた。レオンハルトは言いやめた。クリストフがじつとしてるのに驚き、おそくなつたのを心配して、帰ろうと言いだした。クリストフは答えなかつた。レオンハルトはその腕をとらえた。クリストフは身を震わし、昏迷^{こんめい}した眼でレオンハルトをながめた。

「クリストフさん、帰らなけりやいけません。」とレオンハルト

は言った。

「悪魔にでも行つちまえ！」とクリストフは激しく叫んだ。

「え、クリストフさん、僕が何かしましたか？」とレオンハルトはびっくりしてこわごわ尋ねた。

クリストフは正気に返った。

「そうだ、君の言うのはもつともだよ。」と彼はずっと穏かな調子で言った。「僕は自分でわからずに言ったんだ。神に行くがい、神に行くがいい！」

彼は一人そこに残った。心は荒廃の極に達していた。

「嗚呼、嗚呼！」と彼は両手を握りしめ、真ま暗くらな空の方を熱心にふり仰いで叫んだ。「もう信じないのは、どうしたことなのか。

もう信ずることができないのは、どうしたことなのか。自分のうちに何か起こったのか？」

彼の信仰の破滅と、さつきレオンハルトとかわした会話との間には、あまりに大なる懸隔があった。彼の精神的決意のうちに近ごろ起こっていた動揺の原因は、アマリアの煩わしさや家主一家の者のおかしな様子などではなかったのと同じく、彼の信仰破滅の原因は、レオンハルトとの会話でないことは明らかだった。そういうのは口実にすぎなかった。惑乱は外部から来たのではなく、惑乱は彼のうちにあつた。見知らぬ怪物が心のうちに動き回つてゐるのを、彼は感じていた。そして自分の思想を内省して、自分の悪を真正面に見るだけの勇気がなかった。……悪？ それ

は一つの悪だろうか？ 倦怠けんたい、陶醉、快くもんい苦悶が、彼のうちにしみ込んでいた。もはや自分が自分のものではなかった。昨日まで信じていた堅忍主義のうちに堅く閉じこもろうとしても、駄目だめであった。すべてが一挙に動揺した。彼はにわかを感じた、燃ゆるような野蛮な際限ない広い世界を……神よりも広大である世界を！……

そういうのは一瞬間のことにすぎなかった。しかし彼のこれまでの生活の均衡は、そのために以後はすっかり破られてしまった。

全家族のうちで、クリストフがなんらの注意をも払わなかった者は、ただ一人きりだった。それは娘のローザだった。彼女は少

しも美しくなかつた。そしてクリストフは、自分ではなかなかな美しいどころではなかつたが、他人の容貌ようぼうについては非常にやましかつた。彼は青年の落ちつき払つた残忍さをもつていて、女がもし醜い時には——少なくとも、人に愛情を起こさせるべき年齢を過ぎていず、真面目まじめな穏かなほとんど宗教的な感情をもつまでに達していない時には、そういう醜い女は、彼にとつては存在しないも同じだつた。そのうえローザは、伶俐れいりでないでもなかつたが、これといつて特別の才能をそなえてはいなかつた。そしてまた、クリストフを逃げ回らせるほどの饒舌じょうぜつな習慣で毒されていた。それでクリストフは、彼女のうちになんにも知るに足るべきものはないと判断して、あえて知ろうともしなかつた。たか

だか彼女の方へちよつと眼を向けるくらいのことだった。

けれども彼女は、多くの若い娘たちよりもましであつた。クリストフがあれほど愛したミンナよりも確かにまさつていた。媚態びたいもなく虚栄心もない善良な少女で、クリストフがやって来たころまでは、自分が醜いということに氣づきもせず、それを氣にしてもいなかつた。なぜなら、周囲の人たちも彼女の不器量を氣にしていなかつたから。祖父や母が、しかる時にそれを言いたてることがあつても、彼女はただ笑うばかりだった。彼女はそれを信じていなかつたし、あるいはそれを大したことだとも思つていなかつた。そして祖父や母の方も同じだった。彼女と同じくらいに醜い女やもつと醜い多くの女も、自分を愛してくれる男を見出して

いたではないか！ ドイツ人は、肉体上の欠点にたいしては幸福な寛容さをもっている。彼らはそれを見ないでいられる。あらゆる顔だちと人間美の最も有名な模範的顔だちとの間に、意外な關係を発見するところの勝手な想像力によつて、欠点を美化するこゝとさえもできる。オイレル老人をして、自分の孫娘はリュドヴィジのジュノーに似た鼻をもつてると断言させるには、彼に多く説きたてるの要はなかつたろう。ただ幸いにも、彼はきわめて小言こごとや家でお世辞を言わなかつたまでである。そしてローザも、自分の鼻の格好には無頓着むとんじやくで、素敵な家庭的義務を典例に従つて履行することばかりを、自ら誇りとしていた。人から教え込まれるすべてのことを、福音書の言葉のように受けいれていた。家から出

かけることはほとんどなかった。比較の対象をあまりもたなかったし、家の者たちを率直に感嘆し、彼らの言うことを信じきっていた。腹藏のない信賴的な満足しやすい性質だったから、家の中の憂鬱ゆううつな気分ゆううつに調子を合わせようとつとめ、耳にする悲觀的な言葉を従順にくり返していた。彼女は最も献身的な心をもつていて、常に他人のことを考えて、他人を喜ばせようとつとめ、他人の心配を分ち取り、その欲望を推察し、ただ愛したがって、報酬を求むる念はなかった。家の者たちは、皆善人ではあり彼女を愛してはいたが、自然に彼女のそういう性質につけ込んでいた。人は常に、自分に身をささげてる者の愛情を濫用しがちなものである。家の者たちは彼女の世話を信じきっていたから、そ

れを彼女に少しもありがたいと思わなかった。彼女から何をしてもらっても、さらにそれ以上を期待した。彼女は無器用だった。疎忽そこつであり、性急であり、唐突なお転婆てんばな動作をし、むやみに愛情に駆られ、いつも家の中の災難となつた。コップをこわし、水差をひっくり返し、扉とびらを激しく閉しめ、あらゆることで家じゅうの怒りを招いた。たえずひどい目にあつて、片隅かたすみへ行つては泣いた。しかしその涙はすぐにやんだ。彼女はまたにこにこした様子になり、おしゃべりを始め、だれにたいしても恨みの影さえいっていないかつた。

クリストフの到来は、彼女の生活じゅうの大事件であつた。彼の噂うわさはしばしば聞いていた。クリストフは町の世間話の中に一地

位を占めていた。そういうことは、地方の小さな評判の一形式であつた。彼の名前は、オイレル家の話の中にもしばしば出てきた。ことにジャン・ミシエル老人がまだ生きてたうちはそうだった。老人は自分の孫を自慢にして、知人の家を回り歩いてはほめたてていた。ローザはまた一、二度、その若い音楽家を音楽会で見たことがあつた。彼が自分の家に来て住むことを知ると、彼女は手をたたいた。その不謹慎な態度をきびしくしかられて、まったく当惑した。別に悪いことだとは思っていなかった。彼女のような平板な生活をしていると、新しい借家人が来ることは望外の気晴しだった。いよいよクリストフがやって来るといふ数日の間、彼女は待ち焦れて苛いらら苛いららしていた。家が彼の気に入らなくはない

だろうかと心配して、できるだけ彼の部屋をきれいにしようと骨折った。移転の朝になると、歓迎のしるしとして、暖炉の上に小さな花束をもつて来さえた。けれども自分の身については、見栄をよくしようとは少しも気を配らなかつた。クリストフは最初
にちらりと見ただけで、醜い無様な娘だと判断してしまった。彼
女の方では彼にそのような判断は下さなかつた。だがむしろその
ような判断を下すべき理由は十分あつたに違いない。なぜならク
リストフは、疲れはて、忙しく働き、服装みなりにも注意しないでいて、
平素よりいつそう醜くなつていたから。しかしだれのことをも少
しも悪く思えないローザは、自分の祖父や父や母を完全にきれい
だと見なししていたローザは、予期どおりの姿でクリストフを見て

しまつて、心から彼に感嘆した。食卓で彼の隣にすわると、非常に気恥ずかしかつた。そして不幸にも、その気恥ずかしさは饒じょう舌ぜつとなつて現われた。そのためにクリストフの同情は一挙にぶちこわされた。彼女はそれに気づかないで、その第一夜は、輝かしい思い出となつて頭に残つた。新しく来た借家人たちがその部屋やへ上つた後、彼女は自分の室にただ一人で、彼らの歩き回る足音を頭の上に聞いた。その足音は彼女のうちに愉快的響きを伝えた。家じゆうが蘇よみがえつたように思われた。

翌日、彼女は初めて、不安げに注意しながら自分の姿を鏡に映してみた。そして自分の不幸の大いさをまだはつきり知りはしなかつたが、それでも不幸を予感し始めた。自分の顔だちを一々判

断しようとしてめたが、どうもうまく分らなかつた。悲しい懸念にとらえられた。深い溜息をついて、装いを少し変えてみた。それでもますます醜くなるばかりだつた。そのうえ生憎あいにくな考えをいだいて、種々な世話でクリストフをうるさがらした。新しい知人たちにたえず会い、用をしてやろうという、単純な希望に駆られて、始終階段を上り降りし、そのたびごとに不用な品物をもつて来、しつこく手伝いをしたがり、そして常に笑いしやべり叫んでいた。ただ母親の苛立いらだつた声に呼び立てられる時だけ、彼女はその熱心と話を中止した。クリストフは厭いやな顔つきをしていた。もしつとめて我慢しなかつたら、幾度となく癩かんしゃく癩やくを起こすところだつた。彼は二日間辛抱した。三日目には扉とびらに錠をおろした。

ローザは扉をたたき、呼び声をたて、それと悟り、当惑して降りてゆき、そしてもう二度と始めなかった。彼は彼女に会った時、急ぎの仕事にとりかかっている隙ひまがないのだと説明した。彼女はつつましく詫わびを述べた。彼女は自分の無邪気なやり口の不成功をみずからごまかすことができなかった。それは目的とはまったく背馳はいちして、かえってクリストフを遠ざけていた。クリストフはもはやその不機嫌ふきげんさを隠そうとしなかった。彼女が口をきいてる時に耳を貸そうともせず、我慢しきれない様子を隠しもしなかった。彼女は自分の饒じょう舌ぜつが彼を苛いら立ただせてるのを感じた。そしてつとめて晩は少しの間黙もくつてることができた。しかし彼女の力には及ばなかった。またもやにわかになさえずりだした。クリ

ストフはその話の途中で、彼女を置きざりにして出て行った。彼女はそれを彼に恨まなかった。自分自身を恨めしく思った。自分は馬鹿で面白くない滑稽こっけいな者だと判断した。あらゆる欠点が非常に大きく思われて、それを押し伏せたかった。しかし最初の試みに失敗してから勇気がくじけ、どうしても成功すまいと考え、それだけの力がないと考えた。それでもふたたびつとめてみた。

しかし彼女は、自分でどうにもできない欠点をもっていた。容ようぼう貌ぼうの醜みにくさにたいして施すべ術じゆつがあるうか？ 彼女はもはやそれを疑い得なかった。ある日鏡で自分の顔を見てると、自分の不運の確かさが突然分ってきた。それは雷に打たれたようなものだった。もとより彼女は悪い点をもなお誇張して考え、自分の鼻を實際よ

りは十倍も大きく見た。鼻が顔全体を占めてるかと思った。もう人前に顔出しもしかねた。死にたいほどだった。しかし青春は非常な希望の力をもってるもので、そういう落胆の発作は長くつづきはしない。彼女はその後で、思い違いをしたのだと想像した。その想像をほんとうだと信じようとつとめ、そして時には、自分の鼻はまったく人並でかなり格好もよいと、思うまでになった。

すると彼女は本能から、ある子供らしい策略を、あまり額を現わさず顔の不均衡をさまで見せつけないような髪の結い方を、しかもきわめて無器用に思いついた。それには少しもきょうたい嬌態を装う考えは交っていないかった。浮気心は少しも頭に浮かんでいなかったし、もし浮かんだにしろそれは知らず知らずにであった。彼女

の求めるところはわずかなものだった。少しの友情きりだった。そしてその少しのものをも、クリストフは彼女に与えたく思っていないらしいかった。二人が顔を合わせる時、今日はとか今晚はとかいう親しい言葉を、彼が親切にかけてやりさえしたら、ローザはどんなにか幸福に思つたらう。しかしクリストフの眠つきは、平素からいかにもきびしく冷やかだった。彼女はそれにぞつとした。彼は彼女に何にも不愉快なとさえ言わなかつた。彼女はそういう残忍な沈黙よりも、叱責しつせきの方をまだ好んだであらう。

夕方、クリストフはピアノについて演奏した。なるべく物音に煩わされないように、家の一番上の狭い屋根裏の室にこもっていた。ローザは下から、それを聴きいて感動した。彼女は少しも教養

のない粗悪な趣味をもつてはいたが、音楽を好んでいた。彼女は母がそばにいる間は、室の片隅にとどまって、仕事の上にかがみ込み、それに夢中になつてゐるらしかった。しかし彼女の魂は、上から響いてくる音律に引きつけられていた。幸いにも、アマリアが近所に用があつて出かけると、ローザはすぐに飛び上り、仕事を投げすて、心を踊らせながら、屋根室の入口まで上つていった。息を凝らして、扉とびらに耳をあてがった。そのままじつとしていたが、ついにアマリアがもどつてきた。彼女は音をたてまいと用心しながら、爪つまぎ先立つて降りていった。しかしきわめて無器用だったし、いつも急いでいたので、階段から転げ落ちそうになることがたびたびだった。それからある時は、身体を前方につき出し、頬ほお

を錠前にくつつけて、耳を傾けていると、平均を取り失つて、額を扉にぶつつけた。彼女は非常にあわてて息を切らした。ピアノの音はぴたりと止つた。彼女は逃げ出すだけの力もなかった。ようやく立上ると、扉が開いた。クリストフは彼女の姿を見、怒気を含んだ一瞥^{べつ}を投げて、それから、なんとも言わずに荒々しくそばを離れ、怒つて降りてゆき、外に飛び出した。食事の時になつてもどつて来たが、許しを願つてる彼女の悲しい眼つきにはなんらの注意も払わず、あたかも彼女がそこにいないかのようなふうをした。そして数週間、彼はまったく演奏をやめた。ローザは人知れずしきりに涙を流した。だれもそれに気づかなかつた。だれも彼女に注意を向けていなかった。彼女は熱心に神に祈つた。：

…なんのために？ それは彼女にもよくわからなかった。ただ自分の悲しみをうち明けたかった。彼女はクリストフにきらわれると信じていた。それでもやはり、彼女は希望をつないでいた。クリストフが多少の同情を示す様子を見せてやり、彼女の言葉に耳を傾けるふうをしてやり、いつもより少し親しく握手してやったら、それで十分だったのであるが……。

しかるに、家の者らの不謹慎な数語を聞くと、彼女はあられない方面へ想像を走らしてしまった。

家じゅうの者は皆クリストフに同情を寄せていた。真面目まじめで孤独で、自分の義務にたいしてりっぱな考えをいだいている、十六

歳のえらい少年は、皆に一種の尊敬の念を起こさした。彼の発作的な不機嫌ふきげんや、執拗しつような沈黙や、陰気な様子や、乱暴な振舞などは、このような家にあつては少しも人を驚かすものではなかつた。また彼が、夕方幾時間もぼんやりして、屋根室の窓ぎわにもたれ、中庭をのぞき込み、夜になるまでじつとしていても、芸術家というものは皆のらくら者だと考えてるフォーゲル夫人でさえ、思う存分に攻勢的なやり方では、それを彼にとがめ得なかつた。なぜなら、彼がその他の時間は稽古けいこを授けるのに身を疲らしてゐることを、彼女はよく知っていたから。そしてだれも口には言わないがだれも皆知っている、あるひそかな考えから、彼女は彼を——皆もそうだったが——いたわっていた。

ローザは、クリストフと話してる時に、親たちが眼を見合した
り意味ありげな囁きささやをかわしたりするのに気がついた。初め彼女
はそれに気を留めなかった。それから気にかかって心ひかれた。
彼らの言ってることが知りたくてたまらなかった。しかしあえて
尋ねることもしかねた。

ある夕方彼女は、洗せんたく濯物をかわかすため木の間に張ってある
綱を解くために、庭の腰掛に上っていたが、クリストフの肩につ
かまって地面に飛び降りようとした。ちょうどその時、彼女の眼
は祖父と父との眼に出会った。彼らは家の壁に背中をつけて、パ
イプを吹かしながら腰掛けていた。彼らはたがいに眼配せをし合
った。そしてユスツス・オイレルはフォーゲルに言った。

「似合いの夫婦になるだろう。」

ところが、娘が聞いてるのを認めたフォーゲルに肱ひじでつつ突かれたので、彼はかなり遠くまで聞えるように大声で「へむ！へむ！」と言って、ごく巧みに——（と少なくとも彼は考えたが）——前の言葉をごまかしてしまった。クリストフは背を向けていたから、何にも気づかなかつた。しかしローザは心が転倒して、飛び降りかかつてるのを忘れ、足をくじいた。もしクリストフが、相変らずの無器用さを小声でののしりながらも、つかまえてやらなかつたら、彼女はころんでたかも知れなかつた。彼女はひどく足を痛めたが、少しもそんな様子は見せず、ほとんどそれを気にもせず、今聞いたことばかりを考えていた。彼女は自分の室へ逃

げていった。一步を運ぶのも苦しかったが、人に気づかれまいとして気を張りつめた。彼女はうれしい胸騒ぎに満たされていた。寢床のそばの椅子いすに身を落として、蒲団ふとんの中に顔を隠した。顔は燃えるようだった。眼には涙を浮かべながら笑っていた。恥ずかしかった。穴にでもはいりたかった。考えをまとめることができなかつた。顛顛こめかみがびんぴんして、踝くるぶしが激しく痛み、失神し発熱してるような状態だった。ぼんやり外の物音を聞き、往来で遊んでる子供の叫び声を聞いていた。そして祖父の言葉がまだ耳に響いていた。彼女は低く笑い、真赤まっかになり、顔を羽蒲団に埋め、祈り、感謝し、欲求し、気づかい——恋していた。

彼女は母に呼ばれた。立上ろうとした。一步踏み出すと、堪え

がたい苦痛を感じて、卒倒しそうだった。眩暈めまいがしていた。死ぬのではないかと思つた。死んでしまいたかつた。と同時に、全身の力をあげて生きたく、前途に見えてる幸福のために生きたくかつた。ついに母がやって来た。やがて家じゆうの者が心痛しだした。彼女は例のとおりしかられ、包帯ぼうぜんをされ、寝かされ、肉体の苦痛と内心の喜びとに浮うかされて、惘然ぼうぜんとなつた。樂たのしき夜……そのなつかしい一夜の些細ささいな思い出まで皆、彼女には聖きよめられたものとなつた。彼女はクリストフのことを考えてはいなかつた。何を考かんえてるかみずから知らなかつた。幸福であつた。

クリストフはその出来事に多少責任があると思つたので、翌日、容態を尋ねに来た。そして初めてやさしい様子を彼女に示した。

彼女はしみじみとそれを感謝し、怪我^{けが}をありがたがった。生涯そんな喜びが得らるるなら、生涯苦しんでもいいと希った。——彼女は身動きもしないで数日間寝ていなければならなかった。その間祖父の言葉をくり返し、それを考え回して過した。なぜなら疑問が出て来たから。

「……になるだろう、」と祖父は言ったのかしら？

「……になれるだろうが、」と言ったのかしら？

あるいはまたそんなことは何にも言わなかったのかもしれない。

——いや、祖父は確かに言った。

彼女はそれに確信があつた。……では彼らは、彼女が醜いことを、クリストフが彼女に我慢しかねてることを、知らなかったの

か？……しかし希望をかけるのはうれしいことだった。おそらく自分が思い違ひしたんだろう、自分で思ってるほど醜くはないんだろうと、彼女は信ずるにいたった。彼女は椅子いすの上に身を起こして、正面にかかっている鏡を見てみた。もうどう考えていいかわからなかった。要するに、祖父と父とは彼女よりもすぐれた批評者だった。自分のことは自分で批判できないものだ。……ああ、もしそうだったら……もしかして……自分でも気がつかずに……もしきれいだっただとしたら！……またおそらく、クリストフの素気ない感情を誇張して考えてるのかもしれない。だがもちろん、その冷淡な少年は、事変の翌日、同情の様子を彼女に示したあとは、もはや彼女のことを気にならなかった。容態を見に行く

ことも忘れた。しかしローザは彼を許してやった。彼は種々なことに忙しいのだ。どうしてこちらのことを考えられよう。芸術家を他の人々と同じように批判してはいけないのだ。

けれども、彼女はいかにあきらめても、彼がそばを通りかかると、心を踊らしながら同情の言葉を待たずにはいられなかった。

ただ一言、ただ一瞥^{べつ}……その他のことは想像でこしらえ出せるのだった。恋の初めは、ごくわずかな養分をしか必要としない。たがい顔合せ、たがいにすれちがうだけで、十分である。そういうころには、ほとんど一人で恋愛を創^{つく}り出すに足りるほどの空想力が、魂から流れだす。些^{ささい}細なことで魂は恍惚^{こうこう}の境にはいつてゆく。後にそういう恍惚さを魂がほとんど見出さなくなるのは、

次第に満足してゆき、ついに欲求の対象を所有してゆくに従つて、ますます要求深くなる時のことである。——だれもまったく気づかなかつたが、ローザはいろんなものでみずからこしらえ上げた

物ローマンス語の中にばかり生きていた。クリストフは人知れず彼女を愛している、けれどあえてそれをうち明け得ないでいる、それは気恥ずかしいからであり、あるいはまた、この感傷的な馬鹿娘の想像に気に入るような、ある小説的な架空的な馬鹿げた理由からである。そういうことについて、彼女はまったく荒唐無稽むげいなつきでない話を作りだしていた。馬鹿な作り話だとは自分でも知っていたが、しかしそう認めたくなかつた。幾日もの間、仕事の上にかがみ込みながら、みずから自分をだまかしては喜んでいた。その

ためにしやべることを忘れてしまった。彼女の言葉の波は彼女のうちに潜んでしまつて、あたかも河が突然地面の下に流れ込んだようなものだった。しかしその補いはついていた。無言の話の、会話の、なんという耽溺^{たんでき}だつたらう！ 時としては、書物を読む時その文字の意味を理解するために、一音一音口の中で言つてみなければ承知しない人のように、彼女の唇^{くちびる}の動くのが見えることもあつた。

そういう夢から覚^さめると、彼女はうれしくもありまた悲しくもあつた。実際の事情は、今自分が心の中で語つたとおりではないことを、彼女はよく知つていた。しかし幸福の反映がまだ彼女のうちに残つていた。そして彼女はまたいつそう頼^{たの}もしい心地^{こころち}で生

活しだした。クリストフを得られないと絶望してはいなかった。

彼女はそれとはつきりした心ではなかつたが、クリストフを得ようと企てた。この無器用な小娘は、強い愛情が与えてくれる確実な本能をもつて、一挙に、友の心をとらえ得る道を見出すことができた。彼女は直接彼に向うことをしなかつた。怪我がなかつて、ふたたび家の中を駆け回れるようになる、彼女はルイザに近づいた。ごくわずかな口実でもよかつた。ちよつとした用をやたらに見つけてはルイザを助けてやった。出かける時には、かならず何か使いを頼ませた。代りに市場へ行つてやり、用達人らと談判してやり、中庭のポンプで水をくんできてやり、家庭内の仕事の一部まで引受けて、敷石を洗い床板をみがいてやった。

ルイザが断つてもきかなかつた。ルイザは自分一人で仕事をさしてもらえないのを当惑したが、しかし非常に疲れきっていて、助けに来てくれるのに反対するだけの力がなかつた。クリストフは終日不在だつた。ルイザは一人ぼっちの寂しさを感じていた。そしてこの親切な騒々しい娘といっしょにいるのは、彼女のためによかつた。ローザは彼女の許もとに腰をすえてしまった。自分の仕事までもつてきた。そして二人は話しだした。娘は下らない策をめぐらして、話をクリストフの上に向けようとつとめた。彼の噂うわさをきくと、ただ彼の名前をきくだけでも、彼女はうれしくなつた。両手は震え、眼をあげるのを避けた。ルイザはかわいいクリストフのことを話すのがうれしくて、彼が子供のおりのつまらない大

しておかしくもない話を、いろいろ語ってきかした。しかしローザからつまらない話だと思われる心配はなかった。子供らしい馬鹿げたことやかわいらしいことをしてゐるクリストフの子供の姿を眼の前に描きだすことは、ローザにとっては得も言えぬ喜びであり感激であつた。あらゆる女の心のうちにある母性的の愛情は、も一つの他の愛情と、彼女のうちで楽しく交り合つた。彼女は心からうれしげに笑い、また眼をうるましていた。ルイザは彼女が示してくれる興味に心ひかれた。娘の心の中に起こつてゐる事柄をそれとなく推察したが、それを様子には少しも現わさなかつた。けれどそれを楽しみに思つてゐた。なぜなら、家じゆうで彼女ただ一人が、この娘の心の価値を知つてゐたから。時とすると、彼

女は話をやめて、娘の顔をながめた。ローザはその無言にびつくりして、仕事から眼をあげた。ルイザは微笑ほほえみかけていた。ローザは突然情熱に駆られて彼女の腕の中に身を投げ、彼女の胸に顔を隠した。それからまた二人は、前のように仕事を始め話を始めた。

夕方、クリストフが帰つてくると、ルイザはローザの世話をありがたく思っており、また自分が立てているちよつとしたある計画に従つて、いつもその隣の娘をほめたててやめなかつた。クリストフはローザの親切に心を動かされた。彼女が母によく尽してくれたことを見てとつた。母の顔はいつもより晴やかになつていった。彼は心をこめてローザに礼を言った。ローザは言葉を言いよ

どんで、胸騒ぎを隠すために逃げ出した。そういう彼女の方がしやべりたてる彼女よりも、はるかに伶俐りこう口ではるかに同情が寄せられるように、クリストフには思われた。彼は以前よりも偏見の少ない眼で彼女をながめた。そして思いもかけない美点を彼女のうちに見出した驚きを、少しも隠さなかつた。ローザはそれに気づいた。彼女は彼の同情が増してきたのを認め、その同情は愛の方へ進んでいることと考へた。彼女はますます夢想到にふけていった。一身を挙あげて願うことにはついにかならずかなうものだと、青春期の美しい推測で信じかけていた。——そのうえ、彼女の願いはなんの不当な点があつたらうか？ 彼女の親切や身をささげたいとのやさしい要求にたいして、クリストフは他人よりもい

っそう敏感なるべきはずではなかったらうか？

しかしクリストフは彼女のことを想おもつてはいなかった。彼は彼女を尊重してはいたが、しかし彼女は彼の頭の中になんらの地位をも占めていなかった。彼はそのころ、他の多くのことで頭を満たしていた。クリストフはもはや単なるクリストフではなかった。彼はもはや自分自身がわからなかった。恐るべき働きが彼のうちになされつつあって、彼の存在の根柢までもくつがえしかけていた。

クリストフは極度の倦けん怠たいと不安とを感じていた。訳もないのに気がくじけ、頭が重く、耳や目やすべての感覚が、酔ったよう

になつてがながん響いた。何物にも精神を集注することができなかつた。精神はそれからそれへと飛び回つて、疲憊ひはいしつくさんとする焦燥のうちに漂つていた。たえず形象が眼にちらついて、眩め暈まいがしていた。彼は初めそれを、過度の疲労と春の日の憔悴しょうすいとのせいにした。しかし春が過ぎても、不快は募るばかりだつた。

それは、優雅な手ではかり事物に触れることをする詩人らが、青春期の不安、若い天使の悶もだえ、年少の肉と心との中における愛欲の眼覚めざめ、と名づける所のものであつた。しかしそれはあたたかも、各局部で亀裂きれつし死滅よみがえした蘇る全存在のこの恐るべき危機を、あたたかも、信仰も思想も行為も全生命もすべてが、苦悶くもんと喜悅との痙攣けいれんの中で将まさに絶滅せられ鍛え直されんとしてるかと思われ

るこの大革命を、兎戯に等しいものだと思なし得るかのような名づけ方である。

彼の身体も魂も発酵しきっていた。彼は好奇心と嫌悪けんおの情との交り合った気持でそれをながめるだけで、それとたたかうだけの力はなかった。彼は自分のうちに何が起こつてるか少しも了解しなかった。彼の全存在はばらばらになつていた。圧倒してくるものう懶さのうちに日々を過した。働くことは一つの苦痛となつた。夜は、重苦しい切れ切れの眠りをし、恐ろしい夢をみ、欲望に駆られた。獸的な魂が彼のうちにあばれていた。熱く燃えたち、汗に浸つて、彼はおのれを嫌忌の情でながめた。狂氣じみたみだ淫らな考えを振り落そうとつとめた。狂人になつたのではないかしらとみずから尋

ねてみた。

昼間もそういう獸的な考えからのがれることができなかった。

魂のどん底に沈み込むような気がした。すぐりつくべき何物もな

かった。渾沌こんとんを防ぎとどむべきなんらの防壁もなかった。あら

ゆる武器は、彼の四方をおごそかにとり巻いていた城壁は、神も

芸術も傲慢ごうまんも道德も、皆次々に崩壊してゆき、彼から剥離はくりして

いった。裸体で、縛いましめられ、寝かさされ、身動きもできないでいる

自分を、蛆虫うじむしのたかつてる死骸しがいのような自分を、彼は見出した。

彼はむらむらと反発心を覚えた。自分の意志はどうなったのか？

彼はいたずらにそれを呼びかけるだけだった。夢みてると知り

ながら眼覚めようと欲する、睡眠中の努力にも似ていた。ただ鉛

の塊かたまりのように夢から夢へと転がりゆくの外はなかつた。ついには、争わない方がまだしも楽であることを知った。無感覚な宿命観をもつて、彼は争うのをあきらめた。

規則的な生命の波が中断されたかのようにだつた。あるいは、その波は地下の裂け目に流れ込み、あるいは猛然とほとばしり出て来た。日々の連鎖が断たれてしまった。時間の平坦へいたんな野の中央に、ぽかりと多くの穴が口を開いて、その中に自分の全存在が埋没していった。クリストフはその光景を、自分に無関係なことのようにながめた。すべての物が、またすべての人が——そして彼自身も——彼には見知らぬものようになっていた。彼はやはり仕事に出かけ務めを果たしたが、それも自働人形的だつた。生命の

機関がたえず今にも止るかと思われた。車輪の動きが狂っていた。母や家主一家の者といっしよに食卓についてる時にも、楽員らと聴衆との間で管弦楽団の席についてる時にも、突然彼の脳の中に空虚がうがたれた。彼は惘然^{ぼうぜん}として、あたりの渋め顔をながめた。そして訳がわからなかった。彼はみずから尋ねた。

「どんな関係があるのか、この人たちと……？」

彼はあえて言い得なかった、「私との間に？」とは。

彼はもはや自分が存在してるかどうかも知らなかったのである。口をきくと、自分の声は別の身体から出てるように思われた。身体を動かすと、その自分の身振りを見るのは、遠くから、高くから——塔の頂からであった。彼は昏迷^{こんめい}した様子で額に手を当て

た。とんでもないことをしでかしそうだった。

最も人目の多い時に、いつそう自制しなければならぬ時に、ことにそんなことが起こった。たとえば、官邸へ行つてゐる晩だの、公衆の前で演奏してゐる時だのに。何か澁面をしたり、途方もないことを言つたり、大公爵の鼻を引つ張つたり、あるいは貴婦人の尻しりを蹴けつたり、そんなことを突然したくてたまらなくなつた。あの晩なんかは、管弦楽を指揮しながら、公衆の前で裸体になりたいい妄もうねん念とたたかいつづけたこともあつた。その考えをしりぞけようとつとめる片側から、その考えにまた襲われた。それに負けないためには全力を尽さなければならなかつた。その馬鹿げた争いいを済ますと、汗にまみれ、頭かが空つぽになつていた。まったく

狂気になっていた。ある一事をしてはいけなさと考えただけで、もうその一事が、固定観念のような激しい執拗しつようさでのしかかつてきた。

かくて、狂わんばかりの力と空虚の中への墜落との連続のうちに、彼の生活は過ぎていった。砂漠中さばくの狂風だった。その風はどこから来たのか。その狂妄はなんであつたか。彼の四肢しと頭脳とをねじ曲げるそれらの欲望は、いかなる深淵しんえんから出て来たのか。狂暴な手で引き絞られた弓にも彼は似ていたが、しかもその手はこわれるまで弓を引き絞り——人に知られぬいかなる標的へ向つてか？——次にはそれを一片の枯木のように投げ捨てようとしていた。何者の餌食えじきと彼はなつていたのか。それらのことを彼は考

究する勇氣がなかつた。彼は打ち負かされ恥ずかしめられたのを感したが、自分の敗亡を正視するのを避けた。彼は疲れておりまた卑怯ひきようであつた。昔彼が輕蔑けいべつしていた人々、自分に快くない眞実を見ることを欲しない人々、彼らを彼は今になつて理解した。空費してる時間、投げ出してる仕事、駄目だめになつてる未来、そういうことをこの虚無の間にふと思ひ起こすと、恐ろしくて慄然りっぜんとした。しかし少しも反抗しなかつた。彼の卑怯ひきような態度は、虚無の自棄的な肯定のうちに弁解を見出していた。水の流れに浮ぶ漂流物のように虚無のうちに身を任せることに、彼は苦にがい快樂を味わつていた。たたかつてなんの役にたとう？ 美も善も神も生命も、いかなる種類の存在も、何もなかつた。歩いていると往

来の中で、にわかには地面がなくなつた。土地も空気も光も彼自身も、もはやなかつた。何物もなかつた。頭に引きずられて前のめりになつた。転倒する間ぎわになつてようやく自分を引留めることができた。突然雷に打たれて倒れかけてると思つていた。もう死んでしまつたとも考えていた……。

クリストフは皮膚が更りあらたまつつあつた。クリストフは魂たまが更りつつあつた。そして、幼年時代の消耗し凋しほみはた魂たまが剥落はくらくするのを見ながらも、より若くより力強い新しい魂が生じてくるのを、彼は夢にも知らなかつた。生涯中には人の身体が変化することく、人の魂も変化する。その変形は、かならずしも月日につれて徐々になされるとはかぎらない。すべてが一挙に更新する危機の時間

がある。古い殻は剥落する。そういう苦悩のおりには、人は万事
終つたと信ずる。しかもすべてはこれから始まろうとしているの
である。一つの生命が亡びてゆく。がも一つの生命はすでに生れ
ている。

ある夜、彼は蠟燭ろうそくをともし、テーブルに肱ひじをつき、一人で室
の中にいた、窓に背中を向けていた。仕事をしてはいなかった。
もう数週間前から彼は仕事ができなかった。頭の中にはあらゆる
ものが渦巻うずまいていた。宗教、道徳、芸術、全生命、すべてを彼は
一時に吟味していた。かくあらゆるものに思想を分散させるのに、
なんらの秩序もなくなんらの様式もなかった。祖父の異様な蔵書

やフォーゲルの蔵書の中から、神学や科学や哲学などの、しかも多くは半端はんぱになつてゐる書物を、手当り次第に引出してきては読みふけた。すべてを知ろうとして実は何一つ理解しなかつた。そして一冊も読み終らず、読書最中に、枝葉しやうの事柄や果しない空想に迷い込んで、深い倦怠と悲哀とを心に残された。

その夜も彼は、頹たい廢はい的な茫然ぼうぜんさのうちに浸つていた。家じゆうは寢静まつていた。窓が開あいていた。そよとの風も中庭から吹き込まなかつた。密雲が空を閉ざしていた。クリストフは燭しよく台だいの底に蝋燭の燃えつきるのを、呆然ぼうぜんとしてながめていた。

彼は寝ることができなかつた。何にも考えてはいなかつた。その虚無の境地が一刻ごとに深くなつてゆくのを感じた。自分を吸い

込んでゆく深淵を見まいとつとめた。それでもやはりその縁に身をかがめてのぞき込んだ。空虚の中に、渾沌こんとんたるものが動き、闇やみが揺めいていた。ある苦悶が彼に沁しみ通り、背中はおののき、皮膚は総毛だった。彼は倒れないようにテーブルにしがみついた。言葉につくせぬものを、一つの奇跡を、一つの神を、彼は待ち焦れていた……。

にわかには、中庭の中に、彼の背後に、みなぎりたつ水が、重い大きなまつすぐな雨が、水門の開けたかのように降りだした。じつとたたえていた空気がうち震えた。かわいた堅い地面が鐘のように鳴った。獣のようにほてった熱い大地の巨大な香りかおが、花や果実や愛欲の肉体などの匂においが、熱狂と愉悦と痙攣けいれんの中に立ち

のぼった。クリストフは幻覚に襲われ、一身を挙げて緊張して
 たが、ぞうふ臟腑までぞつと震え上つた。……ヴェールは裂けた。げんわ眩
 惑くすべき光景だった。電光の閃ひらめきに、彼は見てとつた、闇夜
 の底に、彼は見てとつた——おのれこそその神であつた。その神
 は彼自身のうちにあつた。神は室の天井を破り、家の壁を破つて
 いた。存在の制限を破壊していた。空を、宇宙を、虚無を、満た
 していた。世界は神のうちに、きゆうたん急湍のように躍おどりたつていた。
 その崩壊の恐怖と歓喜とのうちに、クリストフもまた、自然の法
 則をわらくず藁屑のように粉碎する旋風に運ばれて、落ちていった。彼
 は息を失っていた。神の中へのその墜落に酔っていた。……深淵
 にして神！
しんたん深潭にして神！ 存在の火炉！ 生命の
ひようふう風

！ 生の激越のための——目的も制せいやくも理由もなき——生の狂乱！

危機が消え去った時、彼はもう長らく知らなかったほどの深い眠りに陥った。翌日、眼が覚さめると眩めまい暈がしていた。飲酒のあとのように疲ひは憊いしていた。しかし心の底には、前夜彼を圧倒した陰惨強力な光明の反映が残っていた。彼はその光明をふたたび輝かせようとした。駄だ目めであった。彼が追求すればするほど、光明は彼からますます逃げていった。それ以来彼は全精力をたえず張りつめて、あの一瞬の幻影を蘇よみがえらせようと努力した。無益な試みであつた。大歓喜は意志の命令には少しも応じなかつた。

けれども、その神秘的な眩^{げんめい}迷の発作はそれきりではなかつた。

また幾度も起こつた。ただ最初ほどの強烈さはもうもたなかつた。そしていつも、クリストフが最も予期しない瞬間に、しかもきわめて短い急激な瞬間——眼をあげあるいは腕を差出すくらいの間——に起こつたので、これだと考える隙^{ひま}もないうちに幻影は過ぎ去つてしまつた。そして彼はあとで、夢をみたのではないかともみずから訝^{いぶか}つた。闇夜を光被する燃えたつ流星のあとに、通つても見分けがたいほどの、光つた塵^{じん}埃^{あい}が、ほのかな細かい光りが、やつて来たようなものであつた。しかしそれはますます頻^{ひんぱん}繁に現われてきた。ついにはクリストフを、不断の淡い夢のような光輪で取り巻いて、そこに彼の精神を溶かし込んでしまつた。その

半ば幻覺の状態から彼の心を転じさせるようなものは、すべて彼を苛いらだ立たせた。仕事の不可能、それをも彼はもう考えなかった。

あらゆる人との交わりにたいして、彼は嫌悪けんおの念をいだいた。そして最も親密な人々との交わりにたいして、母との交わりにさえたいして、さらにはなはだしかった。なぜならそういう人々は、彼の魂に関与する権利をことに多く持つてると自認していたから。

彼は家居を避け、終日外で過す習慣がつき、夜になってしか帰つて来なかつた。彼は野の静寂を求めて、そこで狂乱者のように飽くまでも自分の固定觀念の纏綿てんめんに身を任した。——しかし、物を洗い清める外気の中では、大地に接触しては、その纏綿は弛し緩かんし、それらの觀念は妖鬼ようき的性質を失つた。彼の精神激昂げきこうは少

しも減退せずむしろ募っていったが、しかしそれはもはや精神の危険な眩^{げんめい}迷でなく、力に狂った身と魂の、全存在の、健全な陶醉であつた。

彼はかつて見たこともないかのように新たに世界を見出した。それは新たな幼年時代だつた。ある魔法の言葉で「開けよ、セサ―ミ」の合言葉を言われたかのようにだつた。自然は歡喜に燃えだつていた。太陽は沸きたつていた。液体の空が、透明の河が、流れていた。大地は逸楽のあまりあえぎ煙つていた。草も木も昆^{こんち}虫^{ゆう}も、多数の生物は、空中に渦卷^{うずま}きのぼる生命の大火炎のひらめく言葉であつた。すべてが喜びに叫んでいた。

そしてこの喜びが、彼のものであつた。この力が、彼のもので

あつた。彼は他の事物とおのれとを少しも区別しなかつた。その時までは、激しい喜ばしい好奇心をもつて自然をながめていた幸福な幼年時代でさえ、生物は、自分となんらの関係もなく理解することもできない、あるいは恐ろしいあるいはおかしなとぎされた小世界のように、彼には思われていた。彼らが感じており生きておることさえ、彼には確かにわかつていたろうか。それは実に不思議な機関からくりであつた。クリストフは時として、幼年の無意識的な残忍さをもつて、不幸な昆虫の四肢しをもぎ取ることさえあつた、しかもそれが苦しがることは少しも考えずに——そのおかしな躑もがきを見る楽しみのために。一匹の不幸な蠅はえをいじめていると、平素はあんなに穏かだつた叔父おじのゴツトフリートもさすがに怒つ

て、彼の手からそれを奪い取ったこともあった。その時彼は初め笑おうとした。それから叔父の興奮に感動して涙にむせんだ。その犠牲者も自分と同様に実生存しているのであって、自分は罪を犯したのであるということ、彼は了解し始めた。しかし、その後彼は動物をいじめなかつたとはいえ、動物になんら同情を寄せてるのではなかつた。そのそばを通つても、彼らの小さな機体の中に行われてることを感じようとはしなかつた。むしろそれを考えることを恐れた。それはなんだか悪夢に似寄っていた。——しかるに今や、すべてが明らかになつた。それら生物のほの暗い意識界は、こんどは光明の巢となつた。

生物の群がつてる草の中に、昆虫の羽音の鳴り響く木陰に、ク

リストフは寝ころんで、じつとうちながめた、蟻ありの性急な活動を、
 歩きながら踊つてるように見える足長蜘蛛ぐもを、横つ飛びに跳ね回は
いなごる蝗を、重々しいしかもせかせかした甲かぶとむし虫を、白い斑紋はんもんの
 ある弾力性の皮膚をそなえている毛のないまつ裸の桃色の蚯蚓みみずを。
 あるいはまた、両手を頭の下にあてがい、眼を閉じて、彼は耳を
 傾けた、眼に見えない管弦楽に。香かんばしい樅もみの木のまわりで、一条
 の日の光の中で、物狂わしく回転してる昆虫のロンド、蚊のファ
 ンファール、地蜂じばちのオルガンの音、木の梢こずえに鐘のようにふるえて
 る野蜂の集団の音、または、揺ぐ木立の崇高な囁ささやき、微風に吹か
 るる枝のやさしい戦そよぎ、波動する草の細やかな葉ずれ、あたかも、
 湖水の清澄な面おもてしわに皺を刻むそよ風のような、また、通りすぎ空中

に消えてゆく恋しい足音のような……。

すべてそれらの音やそれらの鳴き声を、彼は自分の中に聞いた。それら生物の最小から最大にいたるまで、同じ一つの生命の川が貫流していた。川は彼をも浸していた。彼は彼らと同じ血からなり、彼らの悦楽の親しい反響を聞いた。多くの小川で大きくなつた河のように、彼らの力は彼の力に交り合つた。彼は彼らの中におぼれた。窓を破つて窒息してる彼の心に吹き込んできた空気の圧力に、彼の胸は破裂せんばかりになつた。変化はあまりに急激だった。至るところに虚無ばかりを見てきた後に、自分の生存をのみ懸念していて、その生存が雨のように分散するのを感じていたのに、今やおのれを忘れて宇宙のうちに甦よみがえらんとあこがれると、

至るところに無限無辺の生を見出したのであった。彼は墳墓から出て来たような思いがした。生の河はなみなみとたたえて流れていた。彼はその中を愉快に泳いでいった。そしてその流れに運ばれながら、彼はまったく自由の身だと信じた。彼は知らなかった、前より少しも自由ではないということを、何人も自由ではないということ、宇宙を支配する法則自身でさえも自由ではないということ、死のみが——おそらく——人を解放してくれるということを。

しかし、殻から出た蛹さなぎは、新らしい外皮の中に喜んで手足を伸ひべて、自分の新しい牢獄ろうごくの境界をまだ認めるの隙ひまがなかった。

月日の新しい周期が始った。幼い時、初めて事物を一つ一つ発見していった時のような、神秘的喜ばしい、黄金と熱気との日々であった。黎明れいめいから黄昏たそがれのころまで、彼はたえざる幻の中に生きていた。すべての務めはうち捨てられた。長い年月の間、たとい病氣の時でさえ、一回の稽古けいこをも一回の管弦樂試演をも欠かしたことの無い、この生真面目きまじめな少年は、今やよからぬ口実を捜し出しては、仕事をなまけた。彼は嘘うそをつくことも恐れなかった。嘘についても後悔の念を覚えなかつた。これまで喜んで意志を服せしめていた堅忍主義の生活は、道德も義務も、今はほんとうのものでないように彼には思えた。その偏狭な専制は自然にぶつつかってこわれてしまった。健全強壯自由な人間性、それが唯一の

徳である。その他はすべて悪魔にでも行くがいい！ 世間から道徳の名をもって飾られ、人生をその中に押し込めようと世人がしている、用心深い策略の煩瑣はんさな規則を見ると、憫びん笑しょうに値するようなものばかりであった。笑うべき土竜もぐらの巣だ！ 生命が一過すれば、すべては清掃されるのだ……。

クリストフは精力に満ちあふれながら、時々、破壊し、焼きつくし、粉碎し、息苦しい自分の力を盲目狂暴な行為で飽満させたという、欲望に駆られた。たいていそういう発作は、突然の精神弛緩しかんに終ることが多かった。彼は涙を流し、地上に身を投出し、大地に抱きついた。それにかじりつき、しがみつき、それを食いたかった。彼は熱気と欲求とに震えていた。

ある夕方、彼は林の縁を散歩していた。眼は光に酔わされ、頭はふらふらしていて、すべてが変容される狂熱状態にあつた。ビロードのような夕の光が、さらに魅惑を添えていた。紅色と金色との光線が、栗くりの木立の下に漂つていた。燐りん光こうのような輝きが、牧場から発してゐるようだった。空は眼のように悦よろこばしくやさしかった。横の牧場に、一人の娘が刈草を動かしていた。シャツと短い裳しょうい衣いだけで、頸くびと腕あちとを露あらわにして、草をかき集めては積んでいた。短い鼻、広い頬ほお、丸い額、そして髪にハンカチをかぶつていた。その日焼けのした陶器のような皮膚は、夕日に赤く染まつて、一日の名残りの光を吸い込んで思われた。

その娘がクリストフを魅惑した。彼は樺びなの木によりかかつて、

彼女が林の縁の方へやって来るのをながめていた。彼女は彼を気にかけていなかった。ちよつと彼女は無頓着むとんじやくな眼つきを上げた。日に焼けた顔の中のきつい青い眼を彼は見た。彼女は彼のすぐそばを通りかかった。そして草を拾うためにかがんだ時、半ば開いたシャツの襟えりから、頸筋と背筋との金色のむく毛が彼の眼にとまった。彼のうちにみなぎっていた暗い欲望が一時に破裂した。彼は後ろから彼女に飛びつき、その頸と胴とをつかみ、頭を仰向かせ、半ば開いた彼女の口に自分の口を押しつけた。彼はかわききったかさかさの唇くちびるに接吻せつぶんし、怒って噛かみつこうとしてる彼女の歯にぶつつかった。彼の両手はきつい腕や汗にぬれたシャツの上をなで回った。彼女はもがいた。彼はますますきつく抱きしめ、

締め殺してしまいたかった。彼女は身をもぎ離し、叫び、唾を吐き、手で唇を拭き、ののしりたてた。彼は手を離していた。そして畑を横切つて逃げだした。彼女は石を投げつけ、破廉恥な呼び方をやたらに浴せかけた。彼は真赤になつて、彼女の言葉や考えよりもむしろ自分自身の考えに多く恥じ入つた。そういう行いをした突然の無意識が非常に恐ろしくなつた。何をしたのか？ 何をしようとしたのか？ それについて了解し得るかぎりのごとは皆、嫌悪けんおの情を起こさせるものばかりだつた。そしてその嫌悪の情からまた挑ちようはつ発された。彼は自分自身と争つた。どちらに真のクリストフがあるかわからなかつた。盲目的な力が襲いかかつてきた。いくらそれをのがれようとしても駄目だめだつた。自分自身

から逃げることであった。その力は彼をどうするか分らない。明日……一時間後……耕作地を駆けぬけて道路に達するまでのそれだけの時間に、彼は何をするかわからない。彼は道へまでも行きつけるだろうか。引返して娘のところへ駆けつけるために、立止りはしないだろうか。そしてもしその時は？……彼は娘の喉のどもと元をとらえていたあの眩げんめい迷の瞬間を思い出した。いかなる行いも可能であった。罪悪でさえも……そうだ、罪悪でさえも。……彼は胸騒ぎのために息がはずんでいた。道路まで行きつくと、息をするために立止った。娘は向うで、叫び声をきいてやって来たも一人の娘と話をしていた。そして二人は腰こぶしに拳をあてて、大笑いしながら彼の方をながめていた。

彼は家に帰った。数日間、身動きもしないで、室に閉じこもった。やむを得ない場合の外は、町へも出かけなかった。町の入口を通る機会を、野へ踏み出す機会を、びくびくして避けていた。暴風雨の前の静けさの最中に起る一陣の風のように、彼の上に吹きおろしてきたあの狂乱の息吹きを、そこでまた見出しはすまいかと恐れた。町の廓壁は自分かくへきをそれから守ってくれるだろうと、彼は思っていた。しかし、閉め切った雨戸の間に留らないほどの隙間すきまが、視線を通し得るくらいの隙間があれば、敵は忍び込んでくることができるといふことを、彼は考えていなかった。

二 ザビーネ

中庭の向こう側、家の片翼の一階に、二十歳の若い女が住んでいた。ザビーネ・フレーリツヒという名前で、数か月前から寡婦になり、一人の小さな娘をもっていたが、やはりオイレル老人の借家人だった。街路に面した店をもっていて、なおその上に、中庭に面した二つの室を有し、四角な狭い庭までついていた。その庭は、蔦つたのからんだ針金作りのちよつとした垣根かきねで、オイレル一家の庭と区別されていた。彼女の姿は滅多に庭に見えなかったが、

子供は朝から晩まで、土いじりをしてそこで一人遊んでいた。庭には草木が思うままはびこっていたので、手入れの届いた径みちと整然たる自然とを好んでいたユスツス老人は、それが非常に不満だった。そのことについて、借家人に少し注意を与えたこともあった。しかしおそらくそのために、彼女はもう庭に出て来なくなつたのであろう。そして庭は少しもよくなりはしなかつた。

フレーリツヒ夫人は小さな小間物店を出していた。町の目抜き
の繁華な街路に位していたので、かなり客足がつくはずだった。
しかし彼女はこの商売にも、庭にたいすると同様にあまり気を入
れていなかった。フォーゲル夫人の説に従えば、自尊心のある婦
人にとっては——ことに、怠惰を許されないまでも怠惰でいてや

つてゆけるくらいに財産がない時には——自分で世帯の仕事をするのが至当であるそうだが、フレーリツヒ夫人はそうしないで、十五歳の小娘を一人雇っていた。この小娘が朝のうち幾時間かやって来て、若いお上さんが寢床の中にぐずついたり、呑気のんきにお化粧をしたりする間、室を片付けたり店番をしたりしていた。

クリストフは時々、彼女が長い肌着はだぎをつけ素足のままで室の中をうろうろしたり、長い間鏡の前にすわっていたりするのを、窓ガラス越しに見かけることがあった。彼女は窓掛をおろすのを忘れるほど無頓着むとんじやくだった。そして気がついて、無精のあまりわざわざ窓掛をおろしに行こうともしなかった。クリストフは彼女よりずっと初心うぶだったから、向うをきまり悪がらせまいと思つて

窓から離れた。しかし誘惑は強かった。少し顔を赤めながらも、彼女の両腕を横目で見やった。その腕は心持瘦せていて、解いて髪の毛のまわりにものうに懶げに上げられ、頸の後ろで手先を組み合していたが、しまいにしびれてきてまたがつくりおろされるまで、そのままぼんやりしていた。クリストフはその快い光景をただ通りがかりにうつかり見たばかりであつて、そのために音楽上のめいそう瞑想が少しも邪魔されはしなかつたのだと、思い込んでいた。しかし彼はそれに興味を覚えてるのだった。そしてザビーネが化粧に費やしたのと同じだけの時間を、彼女をながめて空費するようになってた。彼女は決してめかしや矯飾家ではなかつた。平素はむしろ構わない方だった。アマリアやローザほどにも、自分の服装にみなり細かな注意を

払ってはいなかった。お化粧台の前にいつまでもじっとしていたのも、単なる怠惰からであつた。留針を一本さすにも、そのあとで大儀そうなしか顰め顔をちよつと鏡に映しながら、その大した努力の骨休めをしなければならなかつた。日暮れになりかけても、まだすつかり身仕舞を済ましていながつた。

ザビーネの仕度したくがととのわないうちに、小婢こおんなが帰つてしまうこともたびたびだつた。すると客は、店の入口の鈴ベルを鳴らした。一、二度鈴を鳴らさせ呼ばせておいてから、彼女はようやく椅子いすから立上る決心をするのだつた。そして笑顔をしながら、ゆつくり出て来た——ゆつくり、客の求むる品物を捜した——そして少し捜しても見付からない時には、あるいは（實際あつたことだが）

それを取出すのにあまり骨の折れる時には、たとえば室の隅すみから他の隅へ梯子はしごをもつて行かなければならないような時には、平気で品切れだと言った。それに、店を少しも片付けようともせず、また実際きれてる品物を取寄せようともしなかつたので、客の方で根負けがしたり、他の店へ行ったりした。しかしだれも彼女を憎む者はなかつた。やさしい声で口をきき何事にも平気でいるこの愛敬者を相手には、腹のたてようがなかつた。どんなことを言われても彼女は無頓着むとんじやくだった。そしてだれもよくそのことを感じたので、不平を言い始める者も、それをつづけるだけの勇氣がなかつた。彼女のあでやかな微笑に笑顔で答えて帰っていった。しかしもう二度と買いに来なかつた。彼女はそれを少しも苦し

なかつた。そしていつも微笑ほほえんでいた。

彼女はフロレンスの若い女のような顔つきをしていた。くつきりした高い眉毛まゆげ、睫毛まつげの幕の下に半ば開いている灰色の眼。少し脹はれた下眼瞼まぶた、その下に寄つてる軽い皺しわ。かわいい小さな鼻は、軽やかな曲線を描いて先の方で高まつていた。も一つの小さな曲線が、鼻と上唇うわくちびるとを隔て、その上唇は開きかかつてる口の上にまき上つて、にこやかな懶ものうさに唇をとがらした様子になつていた。下唇は少し厚かつた。顔の下部は円形まるがたで、フィリツポ・リツピの描いた処女のような、仇気あどけない真面目まじめさをそなえていた。顔色は少し曇つていた。髪はうすい栗色くりで、ごたごたに束ねてあり、後ろの方はもじやもじやしていた。身体はきやしやで、骨組

が細く、動作が手ぬるかった。服装には大して気をつけていなか
つた——胸の開いた上着、不足がちなボタン、すり切れた汚ない
靴くつ、おさんどんじみた様子——けれど、その若々しい優美さ、物
やさしさ、本能的な愛敬、などで人の心をひいていた。店の表に
出て涼んでいると、通りかかりの若者らはそれに見とれた。そし
て彼女は、彼らを少しも気にかけてはいなかったが、見られてる
ことに気付かずにはいなかった。すると彼女の眼は、心寄せて見
られてるのを感じるあらゆる女の眼がするようには、感謝と喜びと
の色を浮かべた。そしてこう言ってるようだった。

「ありがとうよ！……もつと、もつと、見てちょうだい！……」
しかし、人に好かれることがうれしかったにせよ、彼女は本来

の無精から、少しも好かれようとつとめたことはなかった。

オイレルにフォーゲルの一家にとつては、彼女はいつも悪口の種であつた。彼女のことは万事彼らの気色を害した。彼女の怠惰、家の中の乱雑、みなり服装のだらしなさ、彼らの注意にたいする馬鹿ていねいな冷淡さ、たえざる笑顔、夫の死に接しても乱されない晴やかさ、娘の病身、店の不景氣、または、いかなることがあつても、その慣れきつた習慣を、いつもののらくらさを、少しも変えないでやってゆく日々の生活の、細大ともどもの退屈さ加減——彼女の万事が、彼らの気色を害した。そして最もいけないのは、彼女がそんなふうでいて人に好かれることだつた。フォーゲル夫人はそれを彼女に許してやることができなかつた。すべて正直な

人たちはそうだが、オイレル一家の者が存在の理由としてるところのもの、そしておのれの生活を早くもこの世からの煉獄れんごくとなしてるところのもの、すなわち強力な伝統、真正な主義、無味乾燥な義務、面白みのない労働、燥急、喧騒けんそう、口論、悲嘆、健全な悲観主義、そういうものの上に、実際の行為によつて皮肉な拒否を投げかけんがために、ザビーネはことさらにそうしてるのだとでもいうような調子だった。神聖な一日じゅう、何にもせず、勝手なことに多くの時間をつぶし、人が懲役人のように身を粉にして苦勞してるのに、横柄にも落着き払つてそれを馬鹿にするとは——おまけに、世間の者までが彼女を至当だとするとは——それはあんまりのことだった。正直に暮そうとする勇氣をくじくも

のだった！……が幸いにも、神はよくしたものだ！ この世にまだ分別をそなえた者が数人あつた。フォーゲル夫人はそれらの人々といつしよにみずから慰めていた。若い寡婦について、よろいど 鎧戸の間からのぞき得た一日のことを皆で言い合つた。それらの悪口は、晩に食卓へ皆集つた時、一家の者の喜びとなつた。クリストフは心を他処よそにして聞いていた。フォーゲル一家の者たちが隣人の行いを非難するのを、彼はあまりに聞き慣れていたので、もうそれになんらの注意も払わなかつた。そのうえ彼はまだザビーネ夫人については、その露あわな頸筋くびと両腕とをしか知らなかつた。それらのものはかなり気に入るものではあつたが、それだけでは、彼女の一身に決定的な断案を下すわけにはゆかなかつた。けれど

も彼は、彼女にたいして十分の寛容を心にかけていた。そして施^つ毛^む曲^{じま}りの氣質から、彼女がフォーゲル夫人の氣に入っていないことがことにありがたかった。

ごく暑い時には、夕食後、午後じゆう日の當っていた息苦しい中庭に残つてゐることはできなかつた。家じゆうで少し息のつける場所といつては、ただ往來のそばだけだつた。オイレルとその婿とは、ルイザといつしよに、時々入口へ行つてその段に腰をおろした。フォーゲル夫人とローザとは、ちよつと姿を見せるきりだつた。家庭の仕事に引止められていた。フォーゲル夫人は、ぶらぶらする隙^{ひま}がないことを示すのを誇りとしていた。手いっぱいに

仕事をしないで家の入口で欠伸ばかりしてるようなそんな人たちを見ると、気が苛ら苛らしてくるなどというようなことを、聞えよがしに高い声で言っていた。彼らを働かせることができない——（彼女はそれを口惜しがっていた）——ので、その姿を見まいと決心して、家にはいつて癩癩まぎれに働いた。ローザは彼女を真似なければならぬと思っていた。オイレルとフォーゲルとは、どこにいても風が強すぎるような気がし、身体が冷えるのを恐れて、室へ上って行った。彼等は早くから寝た。そしてどんなことがあっても、少しも平素の習慣を変えたらなかった。九時過ぎには、もはやライザとクリストフとしか表には残っていない。ライザは終日室の中で過していたから、晩になるとクリ

ストフは、彼女に少し外の空気を吸わせるために、できるだけ誘い出すようにしていた。彼女は一人ではなかなか外に出なかつた。往來の喧騒けんそうをきらつていた。子供らが鋭い叫びをたてて追駆け合つていた。近所の犬がそれに答えて吠ほえたてていた。ピアノの音が聞え、少し遠くにはクラリネットの音が、隣の街路にはコルネットの音が聞えていた。種々の声が呼びかわしていた。人々がそれぞれ家の前を連れだつて行き来していた。ルイザはそういう混雑の中に一人放り出されたら、もうどうにもしようがないと思つたろう。しかし息子のそばむすこにいと、かえつてそれが面白く思われるほどだった。物音は次第に静まつていった。子供や犬などがまつ先に寝にいった。人々の群が小さくなつていった。空気は

いつそう清らかになった。静寂が落ちてきた。ルイザは細い声で、アマリアやローザから聞いた世間話をした。彼女はそんな話を大して面白がってるのではなかった。しかし彼女は息子を相手むすこに何を話していいかわからなかった。しかも息子に近寄って何か言ってみたかったのである。クリストフはその気持を感じて、彼女の話面白く思ってるらしいふうを装った。しかし耳は傾けていなかった。彼はぼんやりした気分きぶんに浸り込んでいって、その日の出来事を思い起こしていた。

ある晩、二人がそうしていると——母が話をしてる間に、彼は隣の小間物屋の入口あが開くあのを見た。女の姿が黙って出て来て、往來に腰をおろした。その椅子いすはルイザから数歩の所にあつた。

女は最も濃い暗がりの中にすわっていた。クリストフはその顔を見ることができなかつた。しかしだれであるかはわかつた。彼の**ぼうぜん**茫然たる気持は消え失せた。空気がいつそうやさしくなつたように思われた。ルイザはザビーネがいるのに気もつかないで、その静かなおしやべりを低い声でつづけていた。クリストフは前よりもよく耳を傾けた。そしてそれに自分の意見も交えたくなくなり、口をききたくなり、またおそらく言葉を向うの女に聞かせたくなつた。彼女の瘦やせた姿は、じつと身動きもせず、少しがっかりしたような様子で、足を軽く組み、両手を膝ひざの上に平たく重ねていた。前方をまつすぐに向いて、何にも耳にしていなかつた。ルイザはうとうとしていた。そして家にはいった。クリストフは

も少し残っていたと言った。

もう十時になりかけていた。通りはひっそりしていた。しまいまで残っていた近所の人たちも、順々に家へはいつていった。店の戸の閉る音しまが聞えた。燈火のさしていたガラス戸がまたたいて見えなくなっていた。まだ一つ二つ残っていたが、それもすぐに暗くなつた。しいんとした。……彼らは二人きりだった。たがい顔を見合わしもせず、息を凝らして、おたがいにそばにいるのも知らないような様子だった。遠い野から、草の刈られた牧場の香かおりが漂つてき、隣の露バルコニー台から、一鉢はちの丁字の花の匂においがしてきた。空気はよどんでいた。天の川が流れていた。一本の煙筒の真上に、北斗星が傾いていた。青白い空に星が菊のように花

を開いていた。教区の会堂で十一時が鳴ると、その響きに合わして、他の会堂で澄んだ響きや錆びた響きさびがくり返され、また家中で、掛時計の重い音や鳴時計の嘎しゃがれた声がくり返された。

二人は夢想から覚さめて、同時に立上った。そして家にはいりかける時、二人ともそれぞれ、無言のまま頭で会釈をした。クリストフは室にもどった。蠟燭ろうそくをともし、テーブルの前にすわり、両手で頭をかかえ、何にも考えもせず長い間じっとしていた。それから溜た息めいきをついて、寢床にはいった。

翌日、彼は起き上ると、機械的に窓へ近寄つて、ザビーネの室の方をながめた。しかし窓掛は降りていた。午前中降りていた。その後はいつも降りていた。

翌晩クリストフは、また家の前へ出ようと母に言い出した。それが習慣になった。ルイザは喜んだ。彼が夕食を済ますとすぐに、窓を閉め雨戸を閉めて室に閉じこもってしまふのを見ると、彼女は心配になるのであった。——小さな無言の人影もまた、いつもの場所にすわりに来ることを欠かさなかつた。彼らはルイザの氣づかぬまに素早く頭で会釈をかわした。クリストフは母と話をした。ザビーネは往来で遊んでる自分の娘にほほえ微笑みかけていた。九時ごろに彼女は娘を寝かしに行き、それからまた音もなくもどつてきた。彼女が少し手間どると、クリストフは彼女がもうもどつて来ないのではないかと氣をもみ始めた。家の中の物音や、眠ろ

うとしない小娘の笑声などを、彼は窺^{うかが}った。ザビーネが店の入口に現われない前から、その衣^{きぬ}ずれの音を聞き分けた。彼女が出て来ると、彼は眼をそらして、いつそう元気な声で母に話しかけた。時とすると、ザビーネからながめられてる気がした。彼の方でもまたそつと流し目に見やった。しかしかつて二人の眼は出会わなかった。

子供が仲介の役を勤めた。彼女は他の子供らとともに往來を走り回った。足の間に顔をつき込んで眠ってるおとなしい犬を、皆でからかつては面白がっていた。犬は赤い眼を少し開いて、しまいには気を悪くしたらしい唸^{うな}り声を発した。すると子供らは、怖^{こわ}さと面白さに声をたてながら四方へ逃げ散った。娘は金切声を

出して、あたかも追っかけられてるように後ろを見い見い、やさしく笑っていたルイザの膝へひざ駆け寄つてすがりついた。ルイザは娘を引止めて種々尋ねだした。それからザビーネとの間に話が始つた。クリストフは少しも口を出さなかつた。彼はザビーネに話しかけなかつた。ザビーネも彼に話しかけなかつた。暗黙の習慣から、二人はたがい知らないふうをした。しかし彼は自分を通りこしてかわされてる話の一語をも聞きもらさなかつた。ルイザには彼のその無言が反感を含んでるもののように思われた。ザビーネの方はそうは判断しなかつた。しかし彼女は彼に気がひけて、多少返辞にまごついた。すると家の中へはいる口実を見つけるのであつた。

一週間の間、ルイザは風邪かぜをひいて室にこもった。クリストフとザビーネとは二人きりだった。最初の晩は、二人とも恐こわがつていた。ザビーネはてれ隠しに、娘を膝に抱き上げて、やたらに接せ吻つぶんしつづけた。クリストフは困って、向うの様子を知らないふうをつづけたものかどうか迷った。変なぐあいになってきた。二人はまだ言葉をかわしたことはなかったが、ルイザのおかげですっかり知り合いになっていた。彼は一、二の文句を喉のどから出そうとした。しかしその声は途中でつかえてしまった。すると娘が、こんどもまた二人を当惑から救ってくれた。娘は隠れん坊をしなから、クリストフの椅子いすのまわりを回った。クリストフはその途中をとらえて、抱いてやった。彼は元来あまり子供好きでなかつ

だが、その娘を抱きしめると、不思議な快さを感じた。娘は遊びに気をとられて、身をもがいた。クリストフは少しからかってやった。手に噛かみつかれた。それで地面に降ろしてやった。ザビーネは笑っていた。二人は子供を見ながら、なんでもない言葉をかわした。それからクリストフは、話の糸口を結ぼうと——（そうしなければならぬと思つて）——つとめた。しかし言葉の種が豊富でなかった。それにザビーネは、その仕事を少しもやさしくしてくれなかった。彼女は彼が言うことをただくり返すだけで満足した。

「いい晩ですね。」

「ええ、ほんとにいい晩ですわ。」

「中庭では息もつけません。」

「ええ、中庭は息苦しゅうございますね。」

話は困難になってきた。ザビーネは娘を連れもどす時刻なのをよい機会にして、娘といっしょに家にはいった。そしてもう出て来なかった。

クリストフは、彼女がその後毎晩同じようにして、ルイザが来ない間は二人きりになるのを避けはすまいかと気づかった。しかしそれは反対だった。翌日は、ザビーネが話を始めようとした。彼女は気が向いてるからというよりもむしろつとめてそうした。話の種を見つけるのにたいそう骨折つてることが、言い出した問いに自分でも困つてることが、よく感じられた。問いと答えとが、

苛^{いらだ}立たしい沈黙の間にぽつりぽつりと落ちた。クリストフはオットーと二人きりの初めのころのことを思い出した。しかしザビーネに対しては、話題の範囲はさらに狭かった。それに彼女はオットーほどの気長さをもたなかった。つとめてもあまりうまくゆかないことを見ると、もうつづけて気を入れなかった。あまりに骨を折らなければならなかったので、もう面白くなくなつた。彼女は口をつぐんだ。そして彼もそれに倣^{なら}つた。

間もなく、すべてはきわめて穏かになつた。夜はまた静かになり、二人の心はまた考えにふけた。ザビーネは夢想しながら、椅子^{いす}の上にゆるやかに身を揺すつていた。クリストフはそのそばで夢想していた。二人はたがいにも何にも言わなかった。三十分も

たつと、ある苜車いちぐるまの上から生暖かい風が吹き送ってくる酔わすよ
うな匂いに、クリストフはうつとりとなつて、小声に独語ひとりごとを
言った。ザビーネはそれに二、三言答えた。それから二人はまた
黙つた。そのなんとも言えない沈黙とその無関心な数言との魅力
を味わつた。二人は同じ夢想にふけり、ただ一つの考えでいつば
いになっていた。彼らはそれがどういふ考えであるか少しも知ら
ず、みずからそれをはつきりさせなかつた。十一時が鳴ると、微ほ
笑ほえみながら別れた。

次の日には、二人はもう話を交えようとも試みなかつた。親し
い沈黙を事とした。時々二、三の片言を口にする、二人とも同
じことを考えてるのがわかつた。

ザビーネは笑いだした。

「むりに話さない方がどんなにかよござんすね！」と彼女は言った。「話さなければならぬと思うと、厭いやになってしまいますわ！」

「ええ、世間の者が皆、」とクリストフはしんみりした調子で言った、「あなたと同じ意見だったら！」

二人とも笑った。彼らはフォーゲル夫人のことを考えていた。

「かわいそうな人ね、」とザビーネは言った、「ほんとに飽き飽きしますわ。」

「自分ではちつとも倦きないんですからね。」とクリストフは悲しい様子で言った。

ザビーネはその様子と言葉とを面白がった。

「あなたには面白いんでしょう。」と彼は言った。「あなたは楽ですよ、隠れておられるから。」

「そうですね。」とザビーネは言った。「私は室にはいつて鍵かぎをかっておきますのよ。」

彼女はほとんど沈黙にも等しいかすかなやさしい笑いをもらっていた。クリストフは夜の静寂の中に、恍惚こうごつとして耳を傾けていた。彼はさわやかな空気を心地よく吸い込んだ。

「ああ、黙ってるのはほんとにいいことだ！」と彼は身体を伸ばしながら言った。

「そしてしゃべるのはほんとに無駄むだなことですよ！」と彼女は言

った。

「そうです、」とクリストフは言った、「おたがいによくわかり合えるんだから。」

二人はまた沈黙に陥った。暗いのでたがいに顔を見ることはできなかつた。二人とも微笑ほほえんでいた。

けれども、いつしよにしていると同じことを感じていたとはいえ——もしくはそうみずから想像していたとはいえ——二人はたがいに相手のことを少しも知ってはいなかつた。ザビーネはそれを別に気にかけてはいなかつた。クリストフはそれほど無関心ではなかつた。ある晩、彼は彼女に尋ねた。

「あなたは音楽が好きですか。」

「いいえ。」と彼女は事もなげに答えた。「退屈しますの。私にはちつともわかりません。」

その淡泊さが彼の心を喜ばした。音楽が大好きだと言いながら音楽を聞くと退屈の色を示す人々の虚偽に、彼は飽き飽きしていた。音楽を好まないでかつ好まないと言ふことは、ほとんど一つの美德のようにさえ彼には思えた。彼はまたザビーネに、書物を読むかどうか尋ねた。

——読まなかった。第一書物をもつていなかった。

彼は自分の書物を貸してやろうと言った。

「真面目な御本でしょう？」と彼女は不安そうに尋ねた。

——厭なら、真面目な書物でないのを。詩集を。

——でも詩集なら真面目な書物である。

——では小説を。

彼女は口をとがらした。

——小説には興味がなかったのか？

——否。興味はあった。しかしそれはいつも長すぎた。かつて終りまで読み通す根気がなかった。初めの方を忘れるし、章を飛ばして読むし、もう少しもわからなくなった。すると書物を投げ出してしまふのだった。

——なるほど興味を感じてるりっぱな証拠だった！

——なあに、嘘うその話はそれくらいたぐさんの読み方で沢山たぐさんだった。書

物より他のことに興味を取っておいたのだった。

——おそらく芝居へか？

——否々。

——芝居へは行かなかつたのか？

——行かなかつた。芝居は暑すぎた。あまり人が多すぎた。家
にいる方がよかつた。光が眼に毒だし、役者がいかにも醜い！

その点については彼も同意見だつた。しかし芝居にはまだ他の
ものがあつた、すなわち脚本が。

「ええ。」と彼女は気のりしないような調子で言つた。「でも私
には隙ひまがありませんもの。」

「朝から晩まで何をするかがあるんですか。」

彼女は微笑ほほえんでいた。

「沢山たくさんすることがありますのよ。」

「なるほど、」と彼は言った、「店がありましたね。」

「あら、店なんか、」と彼女は平気で言った、「たいして忙しくはありません。」

「ではお嬢さんのために隙がないんですか。」

「いいえ、娘なんか！ たいへんおとなしくって、一人で遊んでいます。」

「では？」

彼はそういう不謹慎な追及を詫わびた。しかし彼女は面白がっていた。

——沢山たくさんのことが、それは沢山のことがあった。

——何が？

——一々言うことができないほどだった。あらゆる仕事があった。起き上り、身じまいをし、昼食のことを考え、昼食をこしらえ、昼食を食べ、夜食のことを考え、少し室を片付け……そんなことばかりでも、もう昼は暮れてしまった……。それにまた、何にもしない時間も少しはなければならなかった……。

「退屈ではありませんか？」

「いいえ、少しも。」

「何にもなさらない時でも？」

「何にもしない時がいちばん退屈しませんわ。かえって何かする時の方が退屈しますわ。」

二人は笑いながら顔を見合つた。

「あなたはほんとに幸福ですね！」とクリストフは言った。「私は何にもしないということはまだ知りません。」

「よく御存じだと私は思っていますのに。」

「四、五日前からようやくわかりかけたんです。」

「では今によくおわかりになりますわ。」

彼女と話をする、彼は心が和らぎ休らうのを感じた。ただ彼女と会うだけでも十分だった。不安だの、焦燥だの、心をしめつける苛ら苛らした懊惱おうのうから、解放された。彼女と話してる時には、なんらの惑いもなかった。彼女のことを想おもつてる時には、なんらの惑いもなかった。彼はみずからそうだと認めた。し

かし彼女のそばにゆくとすぐに、快いしみじみとした安樂を覚え、ほとんどうつらうつらとしてきた。夜は、今までになくよく眠れた。

仕事の帰りがけに、彼はよく店の中をちらりとのぞき込んだ。

ザビーネを見かけないことはめつたになかった。二人は微笑みで

ほほえ

会釈をした。時とすると、彼女は入口にいたので、数話をかわすこともあった。あるいはまた、彼は戸を少し開いて、娘を呼び、ボンボンの小箱をその手に握らしてやった。

ある日、彼は思い切つて中にはいった。チョツキのボタンがいと云つた。彼女はそれを捜し始めた。しかし見つからなかった。

あらゆるボタンがごっちゃになっていて、一々見分けることができないほど。彼女はその乱雑さを見られるのを少し当惑した。彼はそれを面白がって、なおよく見るために珍しそうにのぞき込んだ。

「厭ですよ！」と彼女は言いながら、両手で引き出しを隠そうとしました。「のぞいちゃいけません。ごちゃごちゃですもの……。」

彼女は捜し始めた。しかしクリストフは彼女をじらした。彼女は癩かんしゃく癩かんしゃくを起して、引き出しをしめてしまった。

「見つからないわ。」と彼女は言った。「次の街路まちのリージさんのところへいらっしやいな。きつとありますわ。あすこならなんでもありますよ。」

彼はその商売ぶりを笑った。

「あなたはそんなふうには、客をみんな向うへやっつけてしまふんですか。」

「ええ、これが初めてのことじゃありませんわ。」と彼女は快活に答えた。

しかし彼女は多少きまりが悪かった。

「片付けるのはほんとに厭ですもの。」と彼女は言った。「一日と片付けるのを延ばして……でも明日はあしたきつとしますわ。」

「手伝ってあげましょうか。」とクリストフは言った。

彼女は断った。承知したくはあったが、人から悪口を言われそうなので承知しかねた。それにまた、面目なかった。

二人は話しつづけた。

「そしてボタンは？」と彼女はやがてクリストフに言った。「リ
ージさんのところへいらっしやらないんですか。」

「行くもんですか。」とクリストフは言った。「あなたが片付け
るのを待っています。」

「あら、」とザビーネは今言ったことをもう忘れて言った、「そ
んなにいつまでも待っちゃいけません！」

その心からの叫びが、二人を快活になした。

クリストフは彼女がしめた引き出しに近づいた。

「僕に捜さしてください。」

彼女はそれを止めようとして、駆け寄った。

「いえ、いえ、どうぞ。確かにありませんのよ……。」

「ありますとも、きつと。」

すぐに彼は、得意然としてほしいボタンを引き出した。なお他にも要^いるボタンがあった。彼はつづけて捜そうとした。しかし彼女はその手から箱をひたたくつて、自負心から自分で捜し始めた。

日は傾いていた。彼女は窓に近寄った。クリストフは数歩離れて腰をおろした。娘がその膝^{ひざ}に上ってきた。彼は娘のおしやべりを聞いてるふうをし、気のない返辞をしながら、ザビーネをながめていた。彼女も見られてるのを知っていた。彼女は箱の上にかがみ込んでいた。その頸筋^{くび}と頬^{ほお}が少し彼の眼にはいった。——そして彼女をながめているうちに、彼女が赤くなってるのに気づい

た。彼も赤くなつた。

子供はしきりにしやべつていた。だれもそれに答えなかつた。ザビーネはもう身動きもしなかつた。クリストフは彼女が何をしてるかを見なかつた。彼には、彼女が何にもしていないことが、手にもつてる箱をもながめていないことが、よくわかつていた。沈黙が長くつづいた。小娘は心配になつて、クリストフの膝からすべりおりた。

「なぜ何にも言わないの？」

ザビーネはにわかになりにふりむいて、娘を両腕に抱きしめた。箱は下に落ちた。娘は喜びの声をあげて、家具の下にころがつてゆくボタンを、四つばいになつて追っかけた。ザビーネは窓のそばに

もどつて、窓ガラスに顔を押しあてた。外の景色に見とれてるふうをした。

「さよなら。」とクリストフは途方にくれて言った。

彼女は頭も動かさなかつた。そしてごく低く言った。

「さよなら。」

日曜の午後は、家の中ががらんとしていた。皆が教会堂へ行つて、晩課を聞いていた。ザビーネは少しも行かなかつた。ある時、美しい鐘の音がしきりに呼びたてるのに、彼女は小さな庭の戸の前にすわっていたが、それを見つけたクリストフは、冗談に彼女を責めてやった。彼女は同じ冗談の調子で、ミサだけが義務的な

ものであると答えた。晩課はそうではなかった。それであまり熱心になりすぎるのは無駄なことだし、不謹慎なことではさえない。そして神は自分を恨むどころかかえってありがたいが、ついでにいられるだろうと、彼女は好んで考えていた。

「あなたは自分にかたどって神をこしらえてるんです。」とクリストフは言った。

「神様になったら、私はさぞ退屈するでしょう。」と彼女は思い込んだ調子で言った。

「あなたが神になったら、あまり世間のことにはかかわらないでしようね。」

「私が神様をお願いしたいことは、私を構ってくださいさらないよう

にということだけですわ。」

「そんならいくら願ったって悪いことになりようはないでしょう。」とクリストフは言った。

「しッ！」とザビーネは叫んだ、「不信心なことを言っていますわ。」

「神があなたに似ていると言つても、それが不信心なことだとは私は思いません。神はきっと喜ばれるに違いありません。」

「もうよしてくださいよ！」とザビーネは言った。半ば笑い半ば気にしていた。神様が怒りはすまいかと気づかい始めていた。彼女は急いで話題を変えた。

「それに、」と彼女は言った、「気楽に庭をながめることができ

るのも、一週間のうちに今だけですわ。」

「そうです。」とクリストフは言った。「あの人たちがいませんから。」

二人は顔を見合った。

「ほんとに静かですこと！」とザビーネは言った。「めつたにな
いことですよ……なんだか変な気分がしますわ……。」

「ああ、」とにわかにはクリストフは憤然と叫んだ、「あいつを絞
め殺してやりたいと幾度思ったかしのれない！」

だれのことを言ってるのか説明するに及ばなかった。

「そして他の人は？」とザビーネは快活に尋ねた。

「なるほど、」とクリストフはがっかりして言った、「ローザも

いる。」

「かわいそうな娘さんだこと！」とザビーネは言った。

二人は黙った。

「ああ、いつも今のようだったら……」とクリストフは溜息をついた。

彼女はにこやかな眼で彼の方を見上げたが、また眼を伏せた。

彼は彼女が仕事をしてるのに気づいた。

「何をしているんです？」と彼は尋ねた。

（二人は、両方の庭の間に張られた蔦つたの帷とぼりで隔てられていた。）

「おわかりでしょう。」と彼女は言いながら、膝の上の皿さらをもち上げた。「豌豆えんどうの莢さやをむいていますの。」

彼女は大きな溜息をもらした。

「でもそれは厭な仕事じゃありません！」と彼は笑いながら言った。

「あらたまりませんわ、」と彼女は答えた、「いつも食べ物のことにかかりあつてるのは！」

「きつとあなたは、」彼は言った、「もしできることなら、厭な思いをして食べ物をごしらせるより、食べないですます方の人です。ね。」

「ほんとにそうですわ！」と彼女は叫んだ。

「お待ちなさい。手伝つてあげます。」

彼は垣根かきねをまたぎ越して、彼女のそばに来た。

彼女は家の入口のところで椅子いすに腰かけていた。彼は彼女の足下の踏段にすわった。腹のところにかくねてある彼女の長衣の皺しわの中から、彼は青い豌豆さやの莢をつかみ取った。そして彼女の膝にはさまれてる皿の中に、丸い小さな豆を入れた。彼は下を見つめていた。ザビーネの黒い靴下くつが見えていて、踝くるぶしや足先の形を示していた。彼は彼女を見上げられなかった。

空気は重かった。空は白ばんでごく低くたれ、そよとの風もなかった。一枚の木の葉も動かなかった。庭は大きな壁で仕切られ、世界はそこで終っていた。

子供は隣の女と出かけていた。二人きりだった。二人は物を言わなかった。もう何にも言うことができなかつた。眼をあげない

で彼は、ザビーネの膝から、なお豌豆をつかみ取った。その指先は彼女に触れると震えた。瑞々みずみずしいなめらかな莢の中で、ザビーネの指先に出会った。彼女の指も震えていた。二人はもうつづけることができなかつた。たがいに眼をそらしてじつとしていた。彼女は椅子に身をそらし、口を半ば開き、両腕をたれていた。彼はその足下にすわり、彼女に背をもたしていた。肩と腕とに沿つて、ザビーネの膝の温ぬくみを感じた。二人とも息をはずましていた。クリストフは手のほてりを冷すために石に押しあてた。その片方の手が、靴から出てるザビーネの足先に触れた。そして引離すことができなくてその上を押えた。二人ともぞつと身を震わした。茫ぼうとして気を失いかけた。クリストフの片手はザビーネの小さな

足の細い指先を握りしめていた。ザビーネは汗ばみまた冷たくなつて、クリストフの方へ身をかがめてきた……。

聞き慣れた人声が、その陶酔から二人を呼びさました。二人は震え上つた。クリストフは一挙に飛び立ち、また垣根^{かきね}を越えた。

ザビーネは長衣の中に莢を拾い集めて、家へはいつた。中庭から彼はふり向いた。彼女は戸口に立っていた。二人は顔を見合つた、雨の細かな粒が木の葉に音をたて始めていた……。彼女は戸を閉ざした。フォーゲル夫人とローザとがもどつてきた……。彼は自分の室にはいつた……。

黄色つぼい昼の光が、激しい雨におぼれて消えかかったころ、彼は抗しがたい衝動に駆られてテーブルから立上つた。しまつて

る窓のところへかけつけて、向うの窓の方へ両腕を差出した。同時に、向うの窓に、しまつてる窓ガラスの後ろに、室の薄暗がりの中に、両腕をこちらに差出してゐるザビーネの姿を、彼は見た——見たと思つた。

彼は室から駆け出した。階段を降りて行つた。庭の垣根かきねに駆け寄つた。人に見られるのも構わずに、それを乗り越えようとした。

しかし、彼女の姿が見えた窓をながめると、雨戸がすっかりしめ切つてあつた。家の中は寝静まつてるかと思われた。彼は行くのを躊躇ちゆうちよした。窖あなぐらへ行こうとしていたオイレル老人が、彼を見て呼びかけた。彼は足を返した。夢をみたような気がした。

ローザはどういうことが起こってるか、長く気づかないではい
なかつた。元來彼女には狐疑心こぎがなかつたし、嫉妬しつとの感情とはど
んなものだかまだ知らなかつた。彼女はすべてを与えるつもりで
い、また代わりに何かを求めようとはしなかつた。しかし、クリ
ストフから少しも愛してもらえないことを悲しげにあきらめては
いたものの、クリストフが他の女を愛するようないふことがあると
は、かつて思つてもみなかつた。

ある晩、食事のあとに、彼女は数か月來のめんどうな刺繡ししゅうを
なし終えた。うれしい心地がした。一度クリストフと話をしに行
つて、いくらか心を晴らしたかつた。母が背を向けてるのに乗じ
て、室からぬけ出した。悪戯いたずらをする小学生徒のように、家の外

に忍び出た。いつまでたつてもその仕事が終わるものかと軽蔑けいべつ的な口をきいたクリストフを、少しやりこめてやるのが楽しみだった。この憐あわれな娘は、自分にたいするクリストフの感情がどんなものだか、いたずらに知ってるばかりだった。自分で人に会うのがうれしいものだから、他人も自分に会えばうれしいものだといつも考えがちであった。

彼女は表に出た。家の前にはクリストフとザビーネとが腰かけていた。ローザの心は悲しくなった。けれども彼女は、その不穏当な印象を受けてもやめなかった。彼女は快活にクリストフを呼びかけた。その鋭い声音を静かな夜の中に聞いて、クリストフは誤った音符を聞いたような気がした。彼は椅子いすの上でぞつとし、

怒りに顔をしかめた。ローザは彼の鼻の先に、得意然として刺^{ししゆ}繡^うを振ってみせた。クリストフは苛^{いらだ}立^たつてそれを押しつけた。

「できあがったわ、できあがったわ！」と彼女は言い張っていた。「ではも一つ始めたらいいでしょう。」とクリストフは冷淡に言った。

ローザはまごついた。喜びはすべて消えてしまった。

クリストフは意地悪く言いつづけた。

「そしてあなたがそれを三十もこしらえたら、すっかりお婆^{ばあ}さんにもなったら、生^{しょう}涯^{がい}を無駄^{むだ}にはしなかつたと自分で考えることぐらいはできるでしょう。」

ローザは泣きたくなっていた。

「まあ意地悪なこと！」と彼女は言った。

クリストフは恥ずかしくなった。そして二、三言親切な言葉をかけてやった。彼女はごくわずかなことにも満足しがちだったので、すぐにまた信頼してしまった。そして盛んに騒々しいおしゃべりをやりだした。家の中での習慣のために、低い声で話すことができずに、大声にわめきたてた。クリストフはいくら我慢をしても、不機嫌ふきげんさを隠すことができなかつた。初めは苛立つた簡単な言葉を返してやったが、次にはもうなんとも返辞をせず、背中を向けて、彼女のがらがらしたおしゃべりのままに歯ぎしりをするながら椅子いすの上にやきもきした。ローザは彼がじりじりしてるのを見、黙らなければいけないことを知っていた。それでもなお激

しくしやべりつづけるばかりだった。ザビーネは数歩先の暗がりの中で黙って、皮肉な平静さでその光景を見ていた。それから飽きてきて、その晩はもう駄目になったと感じながら、立上って家にはいった。クリストフは彼女がいなくなつてからようやく、彼女の立去つたことに気づいた。そして自分もすぐ立上り、言い訳もしないで、冷やかな挨拶あいさつを言い捨てて、ふいと行つてしまつた。

ローザは街路に一人残つて、彼がはいつて行つた戸をがっかりしながらながめていた。涙が出て来た。彼女は急いで家にはいり、母と口をきかないで済むようと、足音をたてないで自分の室に上つてゆき、大急ぎで着物をぬぎ、一度寢床にはいつて蒲団ふとんをか

ぶると、そのまますすり泣き始めた。彼女は今起こったことを考えてみようとはしなかった。クリストフがザビーネを愛してるかどうか、クリストフとザビーネとが自分を辛抱することができないかどうか、それをみずから尋ねてみなかった。彼女は知っていた、万事終ったことを、もはや生活には意義がなくなったことを、ただ死ぬより外はないことを。

翌朝になると、また考慮の力が永久のいたずらな希望を伴って彼女に帰ってきた。前夜の出来事を一々思い起しながら、それをあれほど重大に考えたのは間違いだつたと思ひ込んだ。もちろんクリストフは彼女を愛していなかった。がそれは、こちらから愛してるのでついには向うからも愛されるだろうという、ひそかな

考えを心の底に秘めて、あきらめていた。しかしザビーネと彼との間に何かあるということ、どの点で見取られたのか。あんなに賢い人が、だれの目にも下らなく平凡に見える女などを、どうして愛することができようか。彼女は安心を覚えた。——がやはり、クリストフを監視し始めた。その日は何にも眼に止らなかつた、なぜなら、眼に止るようなことが何にもなかつたから。しかしクリストフの方では、彼女が終日自分のまわりをうろろし、てるのを見て、なぜとなく妙な苛立ちいらだを覚えた。晩に彼女がまた往来へ出て来て、思い切つて、二人の横に腰をおろすと、彼の苛立ちはさらに激しくなつた。それは前夜の光景の反復であつた。ローザが一人でしやべつた。しかしザビーネは前夜ほど長く待た

ないで、間もなく家へはいった。クリストフもそれに倣ならった。ローザはもはや、自分のいるのが邪魔になつてゐることを、みずから隠すわけにゆかなかつた。しかしこの不幸な娘は自分を欺こうとつとめた。自分の心をごまかそうとするのは、最もいけないことだとは気づかなかつた。そしていつもの頓馬とんまさで、その後毎日同じことをやつた。

翌日クリストフは、ローザを傍かたわらに控えながら、ザビーネが出て来るのをむなしく待った。

その次の日には、ローザ一人きりだつた。二人は彼女と争うのをやめていた。しかし彼女がかち得たものは、クリストフの恨みだけだつた。クリストフは唯一の幸福たる大事な晩の楽しみを奪

われたのを、非常に憤った。自分の感情にばかりふけて、かつてローザの感情を察してやろうともしなかつただけに、彼女をいっそう許しがたく思った。

かなり以前からザビーネは、ローザの意中を知っていた、自分の方で愛してるかどうかを知る前に、すでに彼女はローザが嫉妬しつとを感じてるのを知っていた。しかし彼女はそれについてなんとも言わなかつた。そして勝利を確信してる美しい女にがちの残忍さをもつて、彼女は黙って嘲ちやうろう弄ちやうろう半分に、拙劣な敵の徒勞をながめていた。

ローザは戦場を自分の手に収めながらも、自分の戦術の結果を

憐れにもうちながめた。彼女にとって最善の策は、強情を張り通さないことであり、クリストフを平穩にさしておくことであつた、少なくとも当分のうちは。ところが彼女はそうしなかつた。そして最悪の策は彼にザビーネのことを話すことだつたが、彼女はまさしくそれをした。

彼女は胸を踊らせながら、彼の意中を知ろうとして、ザビーネはきれいだとかわご言つてみた。非常にきれいだとかクリストフは冷やかに答え返した。ローザはみずから求めたその答えを予期していたものの、それを耳にきくと心に打撃を受けた。ザビーネがきれいであることを彼女はよく知っていた。しかしかつてそれを気に止めなかつた。ところが今初めて、クリストフの眼を通し

て彼女をながめていた。そして見て取ったのは、彼女のすつきりした顔だち、小さな鼻、かわいい口、ほっそりした身体、優美な動作……。ああどんなにか切ないことだった！……そういう身体になれるならば、何物に換えても惜しいとは思わなかった。自分の身体よりあの身体の方を人が好む訳は、あまりによくわかった。……自分の身体は！……こんな身体に生まれるとはなんの因果だったろう。なんとという重々しい身体だろう。なんと醜く見えることだろう。なんと厭らしいことだろう。そして、それから解放されるには死より外に道はないと考えると！……彼女はきわめて傲慢うまんであり同時に謙譲だったから、愛されないことに苦情を言いはしなかった。苦情を言うなんらの権利もなかった。そしてなお

いつそう自分を卑下しようとしてとめた。しかし彼女の本能はそれに反抗した。……否、それは不正だ！……なぜこんな醜い身体は自分にだけあって、ザビーネにはないのか。……なぜ人はザビーネを愛するのか。ザビーネは人に愛されるだけのことを何をしたか。……ローザの容赦ない眼に映じたザビーネは、怠惰で、やりっぱなしで、利己的で、だれにも構わず、家のことも子供のこともまた何にも気を止めず、自分の身だけをかわいがり、生きてるのもただ、眠ったりぶらついたりなんにもしないでいるためばかりだった。……そしてそんなことで、人に好かれてるのだ……クリストフに好かれてるのだ……あれほど厳格なクリストフに、何よりもローザが尊重し感服してるクリストフに！ それはあまり

に不正なことだった。またあまりに馬鹿げたことだった。……どうしてクリストフはそれに気づかなかったのか？——彼女は時々、ザビーネにとってはあまりありがたくない意見を、クリストフの耳に入れざるを得なかった。彼女はそうしたくはなかったが、自分で控えることができなかった。そしてはいつもみずから後悔した。なぜなら、彼女はきわめて善良で、だれの悪口をも言うことを好まなかったから。それになおいつそう後悔したわけは、クリストフがいかに夢中になつてゐるかを示す残酷な答えを、いつもそれから招き出した。クリストフは自分の愛情を傷つけられると、相手を傷つけることばかり求めた。そしていつもうまくいった。ローザはなんとも答え返さないで、泣くまいと我慢しながら唇をくちびる

きつと結び、頭をたれて去っていった。彼女は自分が悪かったのだと考えた。クリストフにその愛する者の悪口を言つて心を痛めさせたから、これも当然の報いだと考えた。

ローザの母の方は、それほど我慢強くなかった。何にでもよく眼が届くフォーゲル夫人は、オイレル老人とともに、クリストフがよく隣の若い女と話をしてることに、間もなく気づいた。恋物語を推察するにかたくはなかった。他日ローザとクリストフとを結婚させようという彼らのひそかな計量は、そのために障害を受けた。相談もせず勝手にきめたことだし、クリストフにもわかつてるはずだとは言えなかつたけれど、それでも彼らにとつては、右のことはクリストフから仕向けられた直接の侮辱のように考え

られた。アマリアの専制的な心は、人が自分と異った考えをもつことを許せなかつた。幾度となくザビーネについて吐いた冷評を、クリストフからないがしろにされたのが、いかにも忌々しく思われるのであつた。

彼女は憚りもなくその冷評を彼にくり返し聞かした。彼が傍らはばかにいるたびごとに、彼女は何か口実を設けて隣の女の噂うわさをした。

最も侮辱的な事柄を、最もクリストフの気にさわるような事柄を、わざわざ捜し求めた。そして彼女の生々なまなましい眼と言葉とをもつ

てすれば、それを見出すのは訳もなかつた。善を施すとともにまた害悪をなす術においても、男よりずっとすぐれている女特有の残忍な本能から、彼女はザビーネの怠惰や道德的弱点よりもむしろ

ろ、その不潔なことを多く言いたてた。彼女の厚かましい穿鑿せんさく的な眼は、窓ガラス越しに、家の奥まではいり込み、ザビーネの粉飾ふんしよくの秘密まで見通して、不潔な証拠を探り出し、彼女はそれをずうずうしい満足さで並べたてた。礼儀上すつかり言い尽されない場合には、口で言うよりいつそうほのめかした。

クリストフは恥辱と憤怒とに顔色を変え、布のように蒼白あおしろくなり、唇くちびるを震わした。ローザはどういうことになるかわからない気がして、止めてくれと母に願った。ザビーネを弁護しようとさえ試みた。しかしそれはますますアマリアの攻勢を激しくさせるばかりだった。

そして突然、クリストフは椅子いすから飛び上った。彼はテーブル

をたたきながら怒鳴りだした。そういうふうに一婦人のことを噂し、その居間をのぞき込み、その浅間しい事柄を並べたてるのは、卑劣きわまることだ。一人離れて暮してゆき、だれにも害をなさずだれの悪口もいわない、善良な美しい穏かな人、それにたいして憤慨する者は、きわめて意地悪な奴やつに違いない。しかし、それで向うの人を傷つけたと思うのは、大した間違いだ。それはただ、向うの人にますます同情を集めさせ、その善良さをますます目立たせるばかりだ。

アマリアはあまり言いすぎたと感じていた。しかし彼女はクリストフの訓戒しやくが癩しかにさわった。そして論鋒ろんぽうを転じて言った。善良さを云々うんぬんするのは訳もないことだ。善良という言葉をもつて

すれば、なんでも許される。なるほど、決して何にも手をつけず、だれにも構わず、自分の義務を尽さないで、それで善良だとされるのだから、至つて便利なものだ！

それにたいしてクリストフは答え返した。第一の義務は、他人にたいして生活を楽しくなくしてやることだ。しかしながら、醜いこと、無愛想なこと、人をいやがらせること、他人の自由を妨げること、人を苦しめること、隣人や召使や家族や自分自身をそこなうこと、それを唯一の義務と心得てるような奴が、世には沢山ある。そういう者どもやそういう義務は、疫病と共に、御免こうむりたいものだ！……

争論は激烈になっていった。アマリアはきわめて苛棘かきよくになつ

た。クリストフは一步も譲らなかつた。——そして最も明らかな結果としては、その後クリストフが、たえずザビーネといつしよのところを見せてつけようとする事だつた。彼は彼女を訪れて戸をたたいた。彼女と快活に談笑した。そのためには、アマリアやローザに見られるような時を選んだ。アマリアは激烈な言葉でそれに報いた。しかし正直なローザは、そういう残忍な妙計に胸をしぼらるる思いがした。彼が自分たちをさげすんでることを、彼が復讐しようとしてることを、彼女は感じた。そして苦^にい涙を流した。

かくて、幾度となく不正の苦しみを受けたことのあるクリストフは、今や他人に不正の苦しみを与えることを覚えた。

それからしばらくたつたころ、この町から数里隔つたランデックという小さな町で粉屋をやつてるザビーネの兄が、息子の洗礼式を挙げた。ザビーネは教母だつた。彼女はクリストフを招待した。彼はそういう祝いごとを好まなかつたが、フォーゲル一家の者をいやがらせかつザビーネといつしよにいられるという満足のために、さつそく承知をした。

ザビーネは、断られることはわかつていながら、わざわざアマリアとローザとを招待して、意地悪な楽しみを味わつた。はたして彼女らは断つた。ローザは承諾したくてたまらなかつた。彼女はザビーネをきらつてはいなかつた。クリストフが愛してるので、

時には愛情でいっぱいになる気持がすることもあった。ザビーネにそのことを言つて、頸くびに飛びつきたかつた。しかし母が控えていたし、母の実例があつた。彼女は傲然と心を引きしめて、招待を断つた。それから、彼ら二人が出発してしまつた時、二人がいつしよにいて、いつしよに楽しくしていて、この七月の麗わしい日に、ちようど今ごろは野を散歩してゐるだらうと思つたと、しかも自分は、口やかましい母の傍らに、山のように堆うずたかい繕かい物とともに、室の中に閉じこもつてゐるのに、と思つたと、彼女は息がつまるような気がした。そして自分の自尊心をのろつた。ああ、もしまだ間に合うなら？……だが間に合つたとしても、やはり彼女は同じことだつたらう……。

粉屋は自分の腰掛馬車をやって、クリストフとザビーネを迎えさせた。二人は途中で、数人の招待客を乗せてやった。天気はさわやかでかわいていた。野の中の桜の実の赤い房が、うららかな太陽に輝いていた。ザビーネは微笑ほほえんでいた。その蒼ひやざめた顔は、清新な空気のため薔薇ばら色になっていた。クリストフは膝ひざの上に女の子をのせていた。二人はたがいに話そうとしなかった。だれ構わず隣の者に、そして何事にかかわらず、ただ話しかけた。そしてたがいの声を聞いて満足し、同じ馬車で運ばれるのに満足した。人家や樹木や通行人などをたがいにさし示しては、子供らしい喜びの眼つきをかわした。ザビーネは田舎いなかが好きであった。しかしほとんど行ったことがなかった。不治の怠惰な性質のため

に、少しも散歩を試みなかった。もう満一年近くも町から出たことがなかった。それでちよつとした物を見ても面白がった。そんな物は、クリストフにとっては少しも目新しくなかった。しかし彼はザビーネを愛していた。そして愛する者の常として、彼女を通してすべてを見ていた。彼女の喜びの戦おののきを一々感じ、さらに彼女の情緒を高まらしていた。彼は恋人と一つに溶け合いながら、自分の一身を挙げて彼女に与えきつていたのである。

水車場へ着くと、農家の人たちや他の招待客が中庭に集まっていて、非常な大騒ぎで二人を迎えた。鶏や家鴨あひるや犬などが声を合わしていた。粉屋のベルトルトは、金色の髪で、頭も肩も四角張り、ザビーネが小柄なのと同じ程度に肥大で、快活な男だった。

彼は小さな妹を両腕に抱き取り、こわれやしないか気づかつてるかのようにそつと地面に降ろした。小さな妹は例のとおり、その大男を勝手に取扱い、しかも大男の兄は、彼女のむら気や無精や沢山の欠点を、口重々しく嘲りながらも、足に接吻せつぶんせんにばかりうやうやに恭しく仕えていることを、クリストフは間もなく見て取った。彼女はそういうことに慣れていて、当然のことだと思つていた。当然のことだと思つていて、どんなことにも驚かなかつた。彼女は愛されるためにもなんにもしなかつた。彼女にとつては愛されるのがまったく自然のことらしかつた。もし愛されなくとも彼女は平氣だつた。そのゆえにまただれでも彼女を愛した。

クリストフはなおも一つ発見した。それは前のほど愉快なもの

ではなかつた。洗礼式はただに教母を仮定するばかりではなく、また教父をも仮定するものである。そして教父は教母にたいしてある権利をもつてゐるもので、教母が年若くてきれいである時には、教父はたいしてその権利を捨てるものではない。ところで、金髪の縮れた耳輪をつけた一人の百姓が、笑いながらザビーネに近寄つて、その両の頬ほおに接吻した時、クリストフはそれを見て、にわかにかがをついた。そういうことを今まで忘れていたのは馬鹿であるし、それを気にかけるのはさらに馬鹿であると、彼は考えるどころかかえつて、あたかもザビーネがその闇やみうち討うにわざわざ自分を陥れたもののように、彼女を恨んだ。式をつづく間、彼女と別々になつてると、彼の不機嫌ふきげんさはなお募つてきた。牧場の間をう

ねってゆく行列の中で、ザビーネは時々ふり向いて、彼の方にやさしい眼つきを送った。彼は見ないふりをしていた。彼女は彼が怒ってるのを感じ、その訳も察していた。しかしそれでも彼女はほとんど平気だった。かえって面白がっていた。もし愛する男とほんとうに仲違いをしても、たといそれに心痛を感じようとも、彼女は決してその誤解をとこうとは露ほどもつとめなかつたろう。それはたいへん骨の折れることに相違なかつた。どんなことでもついにはひとりでよくなつてゆくものである……。

食卓でクリストフは、粉屋の妻君と頬の赤い太った娘との間ですわつた。彼はその娘に従つてミサに列して、その時は別に気にも止めなかつたが、今少し見てやろうと思いついた。そして相当

の容貌ようぼうだと思つたので、腹癒はらいせのために、わざとザビーネの注意をひくように、大声にちやほやした。彼はうまくザビーネの注意をひき得た。しかしザビーネは、どんなことにもまただれにも嫉妬しつとを感じずるような女ではなかつた。自分が愛されてさえおれば、その人がなお他の者を愛しようと、そんなことには無関心だつた。腹をたてるどころか、クリストフが楽しんでるのをうれしがつた。食卓の向う端から、最もあでやかな笑みを彼に送つた。クリストフはまごついた。もうザビーネの冷淡さは疑えなかつた。そして彼はまた黙々たる脹れ顔ふくに返つた。擲揄やゆされようと、杯に酒を盛られようと、何をされても機嫌がなおらなかつた。ついに彼は、その尽きることなき飲食の間に何をしに來たのかと、腹だたく

みずから尋ねながら、うとうとするような心地になつてしまつたので、招待客の幾人かをその農家へ送りかたがた舟を乗り回そうと粉屋が言い出したのも、耳に止めなかつた。またザビーネが、同じ舟へ乗るためにこちらへ来いと相図してるのも、彼の眼にはいらなかつた。そうしようと思つた時には、もう彼の席はなくなつていた。そして他の舟に乗らなければならなかつた。その新たな不運は彼をますます不機嫌ふきげんになしたが、幸いにも、同乗者を途中でたいてい降ろしてゆくことがすぐになつた。すると彼は気分を和らげ、それらの人々に晴やかな顔を見せた。その上に、水上の麗かな午後、舟を漕こぐ楽しさ、質しつぱく朴な人々の快活さなどは、ついに彼の不機嫌さをすっかり消散さしてしまつた。ザビーネが

そばにいなかったのも、彼はもう少しも気を引きしめず、他人と同じくなんらの懸念もなしに磊落らいらくに遊び楽しんだ。

皆は三艘そうの舟にのつていた。三艘ともたがいに追い抜こうとして間近につづいていた。人々は舟から舟へ、快活な冗談を言い合つた。舟がすれ合つた時、クリストフはザビーネの笑みを含んだ眼つきを見た。そして彼もまた微笑ほほえみ返さないではおれなかつた。仲直りができた。やがて二人でいっしょに帰つてゆかれることを彼は知っていたのである。

人々は四部合唱を歌い始めた。おのおのの群れが順次に歌の一句を言い、反覆部はみなで合唱した。間を隔てた舟が、たがいに反響を返し合つた。歌声は小鳥のように水面をすべつていった。

時々どの舟かが岸に着けられた。一、二人の百姓が降りていった。降りた者は岸に立つて、遠ざかってゆく舟に相図をした。元からあまり多くない仲間は次第に減っていった。声は合唱から一つ一つ離れていった。しまいには、クリストフとザビーネと粉屋との三人だけになった。

三人は同じ舟に乗り、流れを下って帰っていった。クリストフとベルトルトとは櫂かいを手にしていたが、漕いではいなかった。ザビーネはクリストフの正面に艫ともの方にすわって、兄と話をし、クリストフをながめていた。兄との対話のために、二人は安らかに見かわすことができた。もし言葉が途切れたら二人は見かわすことができなかつたらう。その嘘うその言葉は、こう言うようだった、

「私が見てるのはあなたではありません。」しかし眼つきはたがいにかう言っていた、「あなたはとうとう人？ 私が愛してるあなたは……！」

空は曇ってきた。霧が牧場から立ちのぼり、川は水蒸気をたて、太陽は靄もやの中に消えていった。ザビーネは震えながら、小さな黒い肩掛で肩と頭とを包んだ。彼女は疲れてるらしかった。舟が岸に沿うて、枝をさし伸べた柳の下にすべってゆく時には、彼女は眼を閉じた。ほっそりした顔が蒼ざめていた。唇には苦しそうな皺しわが寄っていた。彼女はもう身動きもしなかった。苦しんでる——たいへん苦しんだ——死んでる、ようだった。クリストフは心がかしめつけられた。彼は彼女の方に身をかがめた。彼女は眼を開

き、クリストフの不安な眼が問いかけてるのを見、それに微笑^{ほほえ}み返してやった。それは彼にとって一条の日の光にも等しかった。彼は小声で尋ねた。

「加減が悪いんじゃないやありませんか。」

彼女は否という身振をして言った。

「寒いんですの。」

二人の男は自分たちの外^{がいとう}套を彼女にかけてやった。あたかも子供を夜具の中にくるんでやるように、その足先や脛^{すね}や膝^{ひざ}を包んでやった。彼女はされるままになって、眼つきで礼を言った。細かな冷たい雨が落ち始めた。二人は櫂を取って、帰りを急いだ。重々しい雲が空を隠していた。川はインキのような波をたててい

た。野の中にはあちらこちらに、人家の窓に火がともった。水車場へ着いた時には、雨が激しく降りしきっていた。ザビーネは凍えていた。

台所で盛んに火を焚たいて、驟しゅうう雨の過ぎるのを待った。しかし雨は降り募るばかりで、風まで加わった。町へ帰るには馬車で三里ほど行かなければならなかった。粉屋は、こんな天気にはザビーネを帰らせられないと言った。そして彼ら二人に、その農家で一夜を明かしてくれと言い出した。クリストフは承諾するのに躊ちゆうちよ躇した。彼はザビーネの眼つきに相談しかけた。しかしザビーネの眼は炉の炎をじつと見つめていた。クリストフの決断に影響するのを恐れてるものようだった。しかしクリストフが承諾

の一言を言った時、彼女は彼の方へ赤い——（それは火の反射だったろうか？）——顔を向けた。彼は彼女が満足してるのを見てとった。

楽しい一晚……。外には雨があばれていた。火は黒い暖炉の中で、金色の火花を無数に散らしていた。皆はそのまわりに丸く集まっていた。彼らの奇怪な影が壁の上に揺いでいた。粉屋はザビーネの娘に、手で種々な影を作る仕方を見せていた。子供は笑っていた。それでもすっかり安心しきつてはいなかった。ザビーネは火の上にかがみ込んで、重い火箸で機械的に火をかきたてていた。彼女は少しぐったりしていた。家庭のことを述べたてる嫂のおしやべりに、耳も傾けずただうなずきながら、微笑んで夢に

ふけていた。クリストフは粉屋と並んで影の中にすわり、子供の髪を静かに引つ張っていた。そしてザビーネの微笑をながめていた。彼女は彼から見られてることを知っていた。彼は彼女から微笑みかけられてることを知っていた。二人にはその晩じゆうただの一度も、たがいに話し合う機会もなく、正面に顔を見かわす機会もなかった。また二人はそうしようとも求めなかった。

二人は晩早く別れた。彼らの寝室は隣合っていた。内部に扉が一つあつて通じ合っていた。クリストフは我知らず、ザビーネの室の方にかけがねがおろしてあることを確かめた。彼は床にはいつて、眠ろうとつとめた。雨が窓ガラスを打っていた。風が煙筒の中で

うなつていた。階下の扉が一つばたばた動いていた。一本の白はくよ楊樹うじゆが嵐あらしに打たれて、窓の前でみりみり音していた。クリストフは眼を閉じることができなかつた。彼女のそばに同じ屋根の下にいることを考えた。彼女とは壁一重越しであつた。ザビーネの室にはなんの音も聞えなかつた、しかし彼女の姿が見えるように思われた。寢床の上に起き上つて、壁越しに小声で彼女を呼び、愛のこもつた熱烈な言葉を言い送つた。そして、なつかしい声が自分に答えてくれ、自分の言つた文句をくり返し、低く自分の名を呼んでるのが、聞こえるような気がした。自分一人で問うたり答えたりしてるのか、あるいは彼女が實際口をきいてるのか、彼にはわからなかつた。少し高い呼び声をきくと、じつとしてるこ

とができなかつた。彼は寝台から飛び出した。暗夜の中を手探りで、扉に近寄つた。彼はそれを開きたくなかつた。その扉がしまつてるので安心を覚えていた。そしてふたたびそのハンドルに触れると、扉の開くのが眼についた……。

彼ははつとした……。また静かに扉をしめ、また開き、も一度しめた。先刻扉は締まつていたではないか。そうだ、彼はそれを確かに知つていた。では誰が開いたのか。彼は胸がとどろいて息がつけなかつた。寝台によりかかつた。腰をおろして息をついた。彼は情熱に圧倒された。そして身動きができなくなつた。身体じゆうが震えた。彼はその未知の歡喜を、数か月来呼び求めてはいたが、それが今自分のそばにそこにあつて、もう何も間を隔てる

物が無い時になって、恐怖の念をいだいた。恋にとらわれてる激越なこの青年は、その欲求が実現されかかるとにわかには、恐怖と嫌悪けんおとを感ずるのみだった。彼はその欲望を恥じ、自分が将まさにせんとしていることを恥じた。彼はあまりに愛していたので、愛するものをあえて享樂することができず、むしろそれを恐れた。悦よろこびを避けるためには、何事でもなしたかも知れなかった。愛することとは、ああ愛することは、愛するものを流けがすことによつてしか可能ではないのか？……

彼は扉のそばにまたやつて来ていた。そして、愛欲と懸念とに震えながら、錠前に手をかけながら、開こうと決心することができなかつた。

そして扉の向う側では、床石に素足をつけ、寒さに震えながら、ザビーネが立っていた。

かくて二人は躡ちゆうちよ躡ちよした……幾いくばく何の間かを……幾分間かを、

幾時間かを……二人はたがいそこにいることを知らなかった、しかもまた知っていた。二人はたがいに腕を差出していた——彼は激しい愛欲に押しつぶされてはいる勇氣もなく——彼女は、彼を呼び、彼を待ち、彼がはいって来はすまいかとうち震えながら……。そしてついに彼がはいろいろと意を決したのは、彼女が思い切つてかけがねをかしてしまった時であつた。

すると彼は自分を狂人だとした。彼は全力をこめて扉にのしかかった。口を錠前に押しあてて願つた。

「あけて！」

彼はごく低くザビーネを呼んだ。彼女は彼のあえぐ息を聞き得た。彼女は扉のそばに釘付けくぎになつて、身動きもせず、凍えきり、齒をうち合して震え、扉を開く力もなく、床につく力もなかつた……。

暴風雨はなおつづいて、樹木を鳴らし、家の戸をきしらしめてた……。二人はおのおの、身体は疲れ果て、心は悲しみに満ちて、自分の寢床へもどつた。鶏しわがが嘎れた声で鳴いた。曙あけぼのの最初の光が、一面に濛もうと曇つた窓ガラスを通して現われた。降りしきる雨におぼれた、悲しい蒼白あおしろい曙であつた。

クリストフはできるだけ早く起き上つた。彼は台所へ降りてゆ

き、人々と話をした。彼は出発を急ぎ、ザビーネと二人きりになるのを恐れた。お上さんが出て来て、ザビーネの気分の悪いことを告げ、昨日の散歩に風邪かぜをひいて、その朝出発しがたいことを言つた時、彼はほとんど安堵あんどの思いをした。

帰りの道中は痛ましかつた。彼は馬車を断つた。そして、地面や樹木や人家を喪布もぬののように包んでる黄色い霧の中を、ぬれた野を通つて、徒歩で帰つていった。光と同じく、生命も消え失うせてるかと思われた。すべてが幽鬼のようなありさまをしていた。彼自身も幽鬼のようであつた。

家へ帰つてみると、皆怒おこつた顔をしていた。彼がザビーネとい

つしよに、どこでだか分つたものじゃない、一夜を過したことを
皆いまいましく思っていた。彼は自分の室にとじこもつて、仕事
にかかった。ザビーネは翌日帰つて来たが、やはり室に閉じこも
つた。二人はたがいに会わないように用心した。それに天氣が雨
がちで寒かった。どちらも外へ出かけなかつた。二人はしめ切つ
た窓ガラスの影から見合つた。ザビーネは沢山着込んで暖炉の隅すみ
にうづくまり、考えに沈んでいた。クリストフは書き物の中に埋
つていた。二人は遠慮氣味に窓から窓へ会釈をかわした。二人と
も自分が何を感じてるか明確に知つてはいなかつた。彼らはたが
いに恨み、自分自身を恨み、事物を恨んでいた。農家の一夜は考
えの外におかれていた。彼らはそれに顔を赤くした。そして自分

たちの熱狂を多く恥じてるのか、熱狂に打ち負けなかったことを多く恥じてるのか、自分でもわからなかった。たがいに顔を合せるのがつらかった。なぜなら、顔を見合すと避けたく思ってる記憶が浮かんできたから。そしてたがいに同じ思いで、どちらも室の奥に引込んで、すっかりおのれを忘れてしまおうとした。しかしそれはできなかつた。そして彼らはたがいのひそかな敵意を苦しんだ。クリストフはある時、ザビーネの冷たい顔の上に、隠れた怨^{えんこん}恨の表情を読み取り得て、それが長く頭から離れなかつた。彼女もやはり同じように、そういう考えに苦しんでいた。いくらそれとたたかい、それを打消してみても、それから免れることはできなかつた。自分の心のうちに起こったことをクリストフに推

察されたという恥ずかしさが、それに加わっていた——そして身を提供した恥ずかしさが……身を提供しながら与えなかつた恥ずかしさが。

クリストフは音楽会のために、ケルンやデュッセルドルフへ行く機会を進んでとらえた。家を遠く離れて二、三週間過すのは、きわめて愉快なことだった。それらの音楽会の準備と、そこで演奏しようと思つてゐる新曲の創作とに、彼はすっかり没頭して、ついに煩わしい思い出を忘れてしまった。ザビーネもまた例のぼんやりした生活を始めて、思い出は頭から消え失せた。二人はたがいのことを平気で考えるようになった。ほんとに愛し合つていたのであろうか？ 彼らはそれを疑つてみた。クリストフはザビー

ネに別れも告げないでケルンへ出発しようとした。

彼の出發の前日、どうしたのか二人はまた近づいた。皆が教会堂へ行つてゐる例の日曜の午後であつた。クリストフも旅行の仕度を済ますために出かけていた。ザビーネは小さな庭に腰をおろして、夕日に當つていた。クリストフが歸つてきた。彼は急いでいた。初めは、彼女の姿を見ながら、会釈をしたまま通りすぎようとした。しかしその瞬間に、彼は何か引止められた。それはザビーネの蒼あおしろ白い顔色であつたか、あるいは、悔恨とか懸念とか情愛とかの、何か言いがたい感情であつたか？……とにかく彼は立止つて、ザビーネの方をふり向いた。そして庭の垣根かきねによりかかつて、晩の挨拶あいさつをした。彼女はなんとも答えないで、手を差

出した。彼女の笑顔には温良さが満ち充ちていた——彼がかつて彼女に見受けなかつたほどの温良さが。彼女の身振には「仲直り……」という意味が見えていた。彼は垣根越しにその手をとらえ、身をかがめてそれに接吻した。彼女は少しも手を引込めようとはしなかつた。彼はそこにひざまずいて、「私は愛してる」と言いたかつた。……二人は黙つて顔を見合つた。しかし少しも意中を明かさなかつた。やがて彼女は手を離し、顔をそむけた。彼も胸騒ぎを隠すために横を向いた。それから二人はまた、晴やかな眼で見合つた。太陽は沈みかけていた。菫色、^{すみれ}、^{だいだい}、^{あおい}、橙色、葵色、いろんな美妙的な色合が、清い寒い空に流れていた。彼女は彼の見慣れた手つきで、寒そうに肩の肩掛を合した。彼は尋ねた。

「身体はどうですか。」

彼女は答えるに及ばないともいいうように、ちよつと口をとがらした。二人はうれしそうにじつと見かわしつづけた。たがいに見失っていたのがまためぐり会ったかのようにだった……。

彼はついに沈黙を破つて言った。

「明日発たちます。」

ザビーネは駭がい然ぜんとした顔つきになった。

「発つんですって？」と彼女はくり返した。

彼は急いでつけ加えた。

「なに、たった二、三週間です」

「二、三週間！」と彼女は狼ろう狽ばいの様子で言った。

彼は説明した、音楽会に約束したこと、しかしいったん帰って来れば、もう冬じゅうどこへも行かないと。

「冬、」と彼女は言った、「それまでにはまだなかなか……。」
「いいえ、」と彼は言った、「じきに冬になります。」

彼女は彼の方を見ないで首を振っていた。

「いつまた会えるでしょうか？」と彼女はややあつて言った。彼にはその問いの意味がよくわからなかった。もうそれは答えられてたはずだった。

「帰ってくればすぐに会えます、十五日か、おそくも二十日たつたら。」

彼女は落胆しきつた様子をつづけていた。彼は冗談を言ってみ

た。

「あなたにはそれくらいの時間なんか長くはないでしょう。」と彼は言った。「眠っていらつしやいよ。」

「そうね。」とザビーネは言った。

彼女は微笑ほほえもうとした。しかし唇くちびるが震えていた。

「クリストフさん！……」彼女は突然言いながら、彼の方へ身を起こした。

その声のうちには悲嘆の調子がこもっていた。こう言ってるらしかつた。

「行かないでくださいな！ 発たつては厭いや！……」

彼は彼女の手を取った。その顔をながめた。彼女がその二週間

の旅を重大視してる訳がわからなかった。しかし、彼女が一言言
いさえすれば、こう言つてやつたであろう。

——行きません……。

彼女が口を開こうとした時に、表の戸があいて、ローザが現わ
れた。ザビーネはクリストフの手から自分の手を引込めた。そし
て急いで家へはいった。入口で、彼女はも一度彼をながめた——
そして姿が消えた。

クリストフはその晩も一度彼女に会おうと考えていた。しかし、
フォーゲル一家の者からは監視され、どこへ行くにも母からつい
て来られ、例によって旅の仕度は遅れがちだし、家から逃げ出せ

る隙はひま一瞬間もなかった。

翌日、彼はごく早朝に出発した。ザビーネの門口を通ると、中にはいりたくなくなり、その窓をたたきたかった。彼女に別れるのが非常につらかった、しかも別辞もかわさないで別れるのが——別れを告げる隙もひまないほど早くから、ローザに妨げられたのであった。しかし彼は、彼女は眠つてゐるだろうと考え、起こしたら恨まれるだろうと考えた。それに、何を言うべき言葉があつたらうか？ 今となつては、旅をやめるにはあまりに時過ぎていた。そしてもし彼女が止めてくれと願つたら……とにかく彼は、自分の力を彼女にためしてみることをも——場合によつては彼女に少し心配をかけることをも、あえて辞せないとはみずから認めかねた

……。自分の出発のためにザビーネが受ける苦しみを、彼は真面目には考えていなかった。そしてそのわずかな間の不在は、おそらく彼女がいただいてる愛情を募らせるだろうと、彼は思っていた。彼は停車場へかけつけた。やはり多少の心残りを感じた。しかし汽車が動き出すとすべてを忘れてしまった。心が青春の気に満ちてるような気がした。屋根や塔の頂が太陽から薔薇色に染められてる古い町に向って、快活に挨拶をした。そして出発する者のこだわりない気持をもって、残ってる人たちに別れを告げ、もはやそのことを考えなかった。

デュツセルドルフやケルンにいる間、彼は一日もザビーネのことを頭に浮べなかつた。朝から晩まで、音楽会の試演や公演に没

頭し、会食や談話に夢中になり、沢山の新奇な事物や成功の驕きよう慢まんな満足に気を奪われて、思い出す隙がなかった。ただ一度、出発後五日目の夜に、悪夢のあと急に眼を覚さました時、眠りながら彼女の事を考えていて、その考えのために眼が覚めたことを、彼は気づいた。しかし、どうして彼女の事を考えたかは思い出せなかった。悩ましくて胸騒ぎがしていた。それは別に不思議でもなかった。その晩彼は、音楽会で演奏し、会場を出ると、夜食の宴に引張り込まれ、そこで数杯のシャンパンを飲んだのだった。彼は眠ることができないので起き上った。ある楽がく想そうが頭につきまどっていた。睡眠中に自分を苦しめたのはこれだなと彼は思った。そしてそれを書いてみた。読み返してみると、たいへん悲し

いものであるのを見てびっくりした。書く時にはなんらの悲しみも感じてはいなかった、少なくともそうらしかった。しかしながら、いつかも、悲しんでる時に、癪しやくにさわるほど快活な音楽しか書けなかったことがあるのを、思い出した。でそのことは、それ以上考えつめなかった。自分の内部の世界の不思議さには、訳はわからないながらも慣れきっていた。彼はそれからすぐにまた眠って、翌朝になると、もう何にも思い出さなかった。

彼は三、四日旅を長引かした。帰ろうと思えばすぐ帰れることがわかっていたので、旅を長引かすのが面白かった。急いで帰る必要もなかった。そして帰途の汽車の中で、彼は初めてザビーネのことを考えた。手紙も書き送らないでいた。もらってるかもし

れない手紙を郵便局へ受取りに出かけて行くこともしなかったほど、呑気のんきであつた。彼はそうして沈黙してゐることに、ひそかな楽しみを見出していた。あなたには自分を待つてゐる人がいること、自分を愛してゐる人がいることが、わかつていた。……愛してゐる？

彼女はまだかつてそれを彼に言わなかつた。彼はかつてそれを彼女に言わなかつた。しかしもとより口に言うまでもなく、二人はそれを知つていた。とは言え、最も貴重なのは確実な告白であつた。なぜ二人は、それをするのにあれほど長く待つたのであろうか。告白を口に出そうとすると、いつも何かがある偶然事故が、ある邪魔物が——それを妨げたのだつた。なぜか？ なぜなのか？ いかにも多くの時を二人は失つたことだらう！ 彼は恋し

い人の口からその大事な言葉が出るのを聞きたくてたまらなくなつた。彼はその言葉を彼女に言いたくてたまらなくなつた。そして人のいない車室の中で、それを声高く言つてみた。近くなるに従つて、焦燥の念で胸が迫つてきた、一種の苦悶くもんで……。もつと早く走れ！ さあもつと早く！ ああ、一時間たてば彼女に会えるのだと考えると！……

彼が家へ戻つたのは朝の六時半だつた。だれもまだ起きていなかった。ザビーネの部屋の窓はしまつていた。彼は彼女に足音を聞かれまいとして、爪つまさき先で中庭を通りすぎた。彼女をふいに驚かしてやろうと楽しんでいた。彼は自分の部屋へ上つていった。

母は眠っていた。彼は音をたてずに服装をととのえた。腹がすいていた。しかし戸棚とだなを捜したらルイザが眼覚めはすまいかと恐れた。中庭に足音が聞えた。そつと窓を開いて見ると、例のとおりローザがまつ先に起き上つて、掃除を始めてるのであった。彼は小声で呼んだ。彼女は彼の姿を見て、うれしい驚きの身振りをした。それからいかめしい様子をした。彼はまだ彼女から恨まれてるなど考えた。しかし非常に気が晴々していた。彼女のそばへ降りて行つた。

「ローザさん、ローザさん、」と彼は快活な声で言った、「何か食べる物をくださいよ。くれなけりやあなたを食つちまう。腹がすいてたまらない！」

ローザは微笑ほほえんだ。そして彼を一階の台所へ連れていった。彼に牛乳を一碗わんついでやりながら、旅や音楽会などのことをしきりに尋ねないではおかなかつた。しかし彼が快くそれに答えているのに——（帰ってきた喜びのために彼は、ローザの饒じょう舌ぜつに出会つてもかえつてうれしいくらいだった）——ローザはにわかに関問いの途中で口をつぐんだ。彼女は悲しげな顔をし、眼をそらし、何かが心にかかるらしかつた。それからまたしやべりだした。しかし彼女はそれをみずからとがめるらしく、またびたりと言葉を途切らした。彼もついにそれに気がついて言った。

「いったいどうしたんです。僕に不平なんですか？」

彼女は否と言うために、強く頭を振った。そして例のとおりだ

しぬけに、彼の方を向きながら両手でその腕をとらえた。

「おう、クリストフさん！……」と彼女は言った。

彼ははつとした。手にもっていたパンを取り落とした。

「え、なんですか？」と彼は言った。

彼女はくり返した。

「おう、クリストフさん！……たいへん悲しいことが起こったの

……。」

彼はテーブルを押しやった。そして口ごもった。

「ここで！」

彼女は中庭の向う側の家をさし示した。

彼は叫んだ。

「ザビーネさんが！」

彼女は泣いた。

「死にました。」

クリストフはもう何にも眼にはいらなかった。彼は立上った。倒れるような気がした。テーブルにつかまったら。上につてた物を皆ひっくり返した。大声にわめきたかった。ひどい苦痛をなめた。嘔吐おうとを催した。

ローザは駭然がいぜんとして、彼の傍らかたわに駆け寄った。彼の頭をかかえて泣いた。

口がきけるようになると彼は言った。

「ほんとうなもんか！」

彼はほんとうだと知っていた。しかしそれを否定したかった。

あつたことをないものにしたかった。けれど涙の流れてるローザの顔を見た時、もう疑えなかつた。彼はすすり泣いた。

ローザは顔をあげた。

「クリストフさん！」と彼女は言った。

彼はテーブルの上に身を伸ばして、顔を隠していた、彼女はその上に身をかがめた。

「クリストフさん！……お母さんが来ますよ……。」

クリストフは立上った。

「いやだ、」と彼は言った、「見られたくない。」

彼女は彼の手を取り、涙で見えなくなつてよろめいてる彼を、

中庭に面してる小さな薪部屋まきまで連れていった。彼女は戸をしめた。真暗まっくらになった。彼は手当り次第に、薪割台の上に腰をおろした。彼女は薪束の上に腰かけた。外部の物音はかすかにしか聞こえなかった。そこで彼は人に聞かれる恐れなしに泣くことができた。彼は我を投げ出して激しくむせび泣いた。ローザは彼が泣くのをかつて見たことがなかった。彼に泣くことができようとさえも思っていなかった。彼女は自分の少女の涙しか知らなかった。そしてこういう男子の絶望を見ると、恐怖と憐憫れんびんとが胸いっぱいになった。彼女はクリストフにたいして熱烈な愛情を覚えていた。その愛には少しも利己的な点がなかった。それは犠牲になりたい無限の欲求、彼のために苦しみたい渴望、彼のあらゆる苦し

みを身に引受けてやりたい渴望であつた。彼女は母親のように彼を両腕で抱いてやった。

「クリストフさん、」と彼女は言った、「泣いてはいけないわよ！」

クリストフは横を向いた。

「死んでしまいたい！」

ローザは両手を握り合した。

「そんなことを言っちゃいや、クリストフさん。」

「僕は死んでしまいたい。もうできない……もう生きておれない……生きてたつてなんの役にたつもんか。」

「クリストフさん、ねえクリストフさん、あなたは一人ぼっちじ

やないわ。あなたを愛してる人もあつてよ……。」

「それがなんになるもんか。もう何もかも厭だ。他のものは生きようと死のうと勝手だ。何もかも厭だ。あの女だけを愛してたのに、あの女だけしか愛していなかったのに！」

彼は両手に顔を隠しながら、さらに激しくむせび泣いた。ローザはもうなんとも言うことができなかつた。クリストフの情熱の利己主義に、彼女は胸を刺し通された。最も彼に近づいてると思つていた瞬間に、かつてなかつたほど孤独な惨めな自分を感じたのであつた。苦しみは、二人を近づけるどころか、ますます二人を引離していた。彼女は苦い涙にがを流した。

ややあつてクリストフは泣くのをやめた、そして尋ねた。

「でもどうして、どうして?……」

ローザはその意味がわかった。

「あなたが発たった晩に、インフルエンザにかかったのよ、そしてすぐに亡なくなつて……。」

彼はうなつた。

「ああ!……なぜ僕に知らしてくれなかつたんだろう?」

彼女は言った。

「私は手紙を書いたのよ。でもあなたのお所がわからなかつたの、なんとも言い置いてくださらなかつたんですもの。芝居へも聞きに行つたけれど、だれも知つていなかつたの。」

彼は彼女の恥はずかしがりなことを知つていたし、その奔走には

たいへん骨折れたろうと察した。彼は尋ねた。

「あの女ひとが……あの女がそうしてくれと言ったんですか？」

彼女は頭を振った。

「いいえ、私が思いついて……。」

彼は眼つきで彼女に感謝した。ローザの心は解けた。

「かわいそうに……クリストフさん！」と彼女は言った。

彼女は泣きながら彼の首に飛びついた。クリストフはその純な愛情とくとの貴とさを感じた。彼はどんなにか慰めてもらいたかった。彼は彼女を抱擁した。

「ありがとう。」と彼は言った。「ではあなたもあの女を愛して
いたんだね？」

彼女は彼から身を離し、熱烈な眼つきで彼を見やり、なんとも答えず、また泣きだした。

その眼つきは彼にとつては一の光明であつた。それはこう言つてゐるがようだつた。

——私が愛していたのは、あの女ではない……。

クリストフはついに見てとつた、まだ知らなかつたことを——幾月も前から見ようと欲しなかつたことを。彼は彼女から愛されていたことを見てとつた。

「しッ！」と彼女は言つた、「私を呼んでるのよ。」

アマリアの声が聞こえていた。

ローザは尋ねた。

「家へ行きますか？」

彼は言った。

「いや、まだ駄目だ、母と話をすることなんかできない……。あとで……。」

彼女は言った。

「ここにいらつしやいな。じきにもどつてくるから。」

彼は暗い薪部屋まきに残った。一条の光が、蜘蛛くもの巣の張りつめた狭い軒窓から落ちていた。往来には物売女の呼び声が聞えていた。隣の厩うまやで一頭の馬が、壁に息を吐きかけ蹄ひづめで蹴けっていた。クリストフは先刻悟った事柄について、なんらの喜びをも感じなかった。しかし一時はそれが気にかかった。今までわからなかった多くの

ことが、ようやく了解されてきた。今まで注意も払わなかつた数^あ多^{また}の細かな事実が、頭に浮かんできて明^め瞭^{りよう}になつた。彼はそんなことを考えたのにみずから驚き、一瞬間といえども自分の悲しみから気を転じたのにみずから憤つた。しかしその悲しみは、きわめて残酷なものだったので、愛欲よりもずっと強い自己保存の本能に強^しいられて、彼はそれから眼をそらし、あたかも水におぼれた絶望者が、なお一瞬間水面に浮かぶ助けとなる物なら、何物にでも本意ならずもすがりつくがように、この新らしい考えに取りついたのであつた。そのうえ、彼はみずから苦しんでいたの^で、他人が苦しんでる——しかも自分のために苦しんでるゆえんを、今感じたのであつた。彼は先刻流^{さつき}さした涙を理解した。ロー

ザがかわいそうになった。彼女にたいして自分が残酷であつたことを——なおこれからも残酷であるだろうことを、彼は考えた。

なぜなら彼は彼女を愛していなかったから。彼女が彼を愛してもなんの役にたとう？ 憐あわれな娘よ！……彼女は親切だ（それを彼

女は先刻証明した）ということ、彼はいたずらに思うばかりだつた。彼女の親切さが彼になつたろう？……彼女の生が彼に何になつたろう？……彼は考えた。

「なぜ彼女の方が死ななかつたのか、なぜあの女ひとの方が生きていないのか？」

彼はまた考えた。

「彼女は生きています。私を愛している。今日か、明日か、生涯の

うちには、それを私に言うことができる。——そしてあの女、ひと私
が愛するただ一人の女、彼女は愛していることを私に告げずに死
んでしまった。私の方でも愛していることを彼女に言わなかった。永
久に私は彼女がそれを言うのを聞くことがないだろう。永久に彼
女は言うことができないだろう……。」

そして最後の夕の思い出が浮かんできた。たがいのうち明けよ
うとしてると、ローザがやって来て二人を妨げたことを、彼は思
い出した。そして彼はローザを憎んだ……。

まき
薪部屋まきの戸がまた開かれた。ローザは低い声でクリストフを呼
び、手さぐりで捜した。彼女は彼の手を取った。彼はその手に触
れて反発心を覚えた。みずからそれを心にとがめたが、どうにも

できなかつた。

ローザは黙っていた。深い同情の念から口をつぐんでいたのである。クリストフは無駄むだ口で苦しみを乱されないので感謝した。けれども彼は知りたかつた。……あの女のことを話してくれる者は彼女一人だつた。彼は低く尋ねた。

「いつあの女ひとは……？」

（死んだか、とは言い得なかつた。）

彼女は答えた。

「一週間前の土曜日に。」

一つの思い出が彼の頭を過よぎつた。彼は言つた。

「夜中ですね。」

ローザはびっくりして彼をながめた。そして言った。

「ええ、夜中よ、二時と三時との間に。」

あの悲しみのメロデーがまた彼に現われた。

彼は震えながら尋ねた。

「たいへん苦しみましたか。」

「いいえ、仕合せと、別にお苦しみなさらなかったの。あんなにお弱かつたんですもの。ちつとも逆らいなさらなかったの。すぐに、駄目だめだということがわかったのよ。」

「そしてあの女ひとは、前からそれと知っていましたか。」

「さあどうですか。でもなんだか……。」

「何か言いましたか。」

「いいえ、何にも。赤ん坊のようにむずがっていらしてよ。」

「あなたはそばにいたんですか。」

「ええ、初めの二日間、兄さんがいらっしやるまで、一人でついでいたの。」

彼は感謝の念に駆られて彼女の手を握りしめた。

「ありがとう。」

彼女は血が心臓にこみ上げてくるような気がした。

ちよつと黙つてた後に、彼は言った、息がつまるような問いをつぶやいた。

「あの女ひとは何にも言わなかつたんですか……僕にたいして。」

ローザは悲しげに頭を振った。彼が待つて返事をしてやるこ

とができたなら、何を投げ出しても惜しく思わなかったであろう。
嘘うそを言うことができないのが心苦しかった。彼女は彼を慰めよう
とつとめた。

「もう本心を失っていらしたんですもの。」

「口をききましたか。」

「意味がよくわからなかったの。ごく低い声でした。」

「娘さんはどこにいます?」

「兄さんが田舎の家へ連れていったの。」

「そして、あの女は?」

「やはり向うに。前週の月曜日に、ここから発たれたの。」

二人はまた泣き出した。

フォーゲル夫人の声がまたローザを呼んだ。クリストフはふたたび一人残つて、逝去せいぎよのその日々に立ちもどつてみた。一週間、もう一週間になつていた……。嗚呼ああ、あの女ひとはどうなつたのだろう。その週間は、なんと雨が多いことだつたらう、地上では！……そして彼は、その間じゆう笑い楽しんでいたではないか！

彼はポケットの中に、絹紙に包んだ物を感じた。彼女の靴くつにつけてやるためにもつて来た銀の留とめがね金であつた。靴から出てる小さな足先に手を押し当てた夕のことを、彼は思い出した。その小さな足も、今はどこにあるのか。どんなにか冷えきつてることだろう！……その生あたたかい接触の思い出だけが、あの愛する身体から得た唯一のものであることを、彼は考えた。彼はかつてそ

の身体に触れ得なかつた、それを両腕に抱き取り得なかつた。彼女はまったく識^しられないままに去つていった。彼女については、魂も肉体も、彼は少しも知るところがなかつた。彼女の形態や生命や愛について、彼は一つの思い出も持つていなかつた。……彼女の愛？……その証拠さえあつたのであろうか。……手紙も、形見の品も——なんにも彼はもたなかつた。自分の中にか、自分の外にか、どこに彼女をとらえ彼女を捜したらいいか？……ただ虚無！ 彼女について彼に残つてるものは、彼女にたいする彼の愛ばかりであつた。彼に残つてるものは彼自身ばかりであつた……

——それでもなお、壊滅の手から彼女をもぎ取らんとする激しい欲望と死を否定せんとする欲求のために、彼は最後の遺品に

執着して、狂信的な一句の中に没入した。

妻は死わらわにたるに非ず、住居すまいを変えたるなり。

泣きつつ妻を見給う君のうちに、妻は生きて残れり。

愛せられし魂は姿を變うるも、恋人の魂の外には出でじ。

彼はそれらの崇高な言葉を讀んだことはかつてなかつた。しかしそれは彼のうちにあつたのである。人は皆順次に、幾世紀となく十字架に上つてゆく。各自に苦悶を見出し、幾世紀となき絶望的な希望を見出す。かつて生存した人々、かつて死とたたかい、死を否定し——そして死んだ人々、彼らの足跡をそのまま、各自

にたどつてゆく。

彼は家に閉じこもつた。向うの家の窓を見ないために、終日雨戸を閉ざしておいた。彼はフォーゲル一家の者を避けた。彼らが厭でたまらなかつた。彼は彼らを責むべきものは持つていながつた。皆ごく善良な人々でごく敬けいけん度であつて、死にたいしては私の感情を抑制していた。クリストフの苦しみを知つていて、どう考えたにしろとにかくそれを尊重していた。彼の前でザビーネの名前を口にすることを避けた。しかし彼らは、彼女の生前には彼の敵であつた。それだけの事実で彼はもう十分に、彼女がいなくなつた今でも彼らに敵意を含むことができた。

そのうえ、彼らは騒々しい振舞を少しも変えなかった。一時的であるがとにかく真面目な憐憫の情を感じはしたが、その不幸に無関心なことは——（それは当然すぎることだったが）——明白であった。おそらく彼らは、心ひそかに厄介払いをした気持ちさえ感じたであろう。少なくともクリストフはそう想像した。彼にたいするフォーゲル一家の意向が明らかにわかつてる今では、彼はややもすればそれを誇張して考えがちだった。実際においては、彼らはあまり彼を眼中においてはいなかった。そして彼は自分を重大視すぎていた。ザビーネの死は、家主一家の計画から主要な障害を取り除いて、ローザに自由の地を与えるものだと思われただろうということを、彼は疑わなかった。それでなお彼は

ローザをきらった。人が——（フォーゲル一家の者でも、ルイザでも、ローザ自身でも）——彼の一身を相談もなくひそかに処置するならば、もはやそれだけの事実で、いかなる場合においても、愛してもらいたいという女から彼を遠ざけるには十分だった。彼は自分がたいせつにしてる自由に手を触れられると思うたびごとに、猛然と反抗した。しかしこんどの場合には、彼一人だけの問題ではなかった。彼にたいする人々の越権な振舞は、ただに彼の権利を侵害するばかりではなく、彼が心をささげていた死者の権利をも侵害するものであった。それで彼は、だれからも攻撃されはしなかつたのに、猛然と権利を防護しようとした。彼はローザの善良さをも疑った。ローザは彼が苦しむのを見て自分も苦しみ、

しばしば訪れて来ては、彼を慰めようとし、彼にあの女の話をしようとした。彼はそれをしりぞけなかった。彼はザビーネが生前知り合いだっただれかとその話をしたかった。病中の些細な出来事をも知りたかった。しかし彼はローザのそういう親切を感謝しなかった。彼女の心に打算的な動機があると見なしていた。何かの当てがない以上は彼女が決して許されそうもないそれらの訪問や長い談話を、一家の者は、またアマリアさえ、明らかに許可していたではないか。ローザも家の者らと同意見ではなかったであろうか。ローザの同情がまったく誠実なもので私念のこもったものではないということ、彼は信ずることができなかった。

しかるに、ローザはもとよりそういう心ではなかった。彼女は

クリストフを心から氣の毒がつていた。クリストフを通じてザビ
ーネを愛せんがために、彼の眼で彼女を見ようとつとめていた。
以前彼女にたいしていただいていた悪い感情をきびしくみずからと
がめて、晩に祈りをするおりに彼女の許しを願っていた。しかし
ローザは、忘れることができたであろうか、自分が生きてること
を、始終クリストフに会つてることを、彼を愛してること、も
はやも一人の女を恐れるに及ばないことを、も一人の女は消え失
せてしまったことを、その思い出さえもやはり消え失せるだろう
ということ、自分一人残つてるということを、そしていつかは
……ということ。自分の悲しみの最中に、自分の悲しみとなる
愛する人の悲しみの最中に、突然の喜ばしい挙動を、不条理な希

望を、押えることができたであろうか。ローザはあとでそれをみずからとがめた。それは一閃せんにすぎなかつた。それでも十分だつた。彼はそれを見てとつた。彼は彼女がぞつとするような眼つきを注いだ。彼女はその中に憎悪ぞうおの気持を読みとつた。あの女が死ひとんだのに彼女が生きてることを、彼は恨んでいた。

粉屋はその馬車を連れて、ザビーネのわずかな道具を取りに来た。クリストフが出稽でげいこ古からもどつて来て見ると、寝台、筆筒たんす、蒲団ふとん、衣類、すべて彼女の所有であつたものが、すべて彼女のあとに残つてたものが、家の前の街路に並べられていた。彼には見るに堪えない光景であつた。彼は急いで通りすぎた。玄関でベルトルトに出会つた。ベルトルトは彼を引止めた。

「ああ、あなた。」と彼は言いながらクリストフの手を心こめて握りしめた。「ごいつしよだったあのころには、こんなことになろうとはだれも思いもしませんでしたね。あの時は愉快でした。それでもあの日から、水の上を漕ぎ回ったあの時から、悪くなりだしたんですよ。だが結局、愚痴をこぼしたってなんの役にもたちません。死んでしまっただけです。この次はわれわれの番でしょう。世の中はそうしたもんです。……そしてあなたは、いかがです？ 私はまあおかげさまで、至って丈夫です。」

彼は赤い顔色をし、汗をかき、酒の匂いをさしていた。この男が彼女の兄であり、彼女の思い出に権利をもってるかと思うと、クリストフの心は傷つけられた。愛する者のことをその男の口か

ら聞くのが苦しかった。これに反して粉屋の方は、ザビーネの話ができる知人を見出したのがうれしかった。彼はクリストフの冷淡の訳がわからなかった。自分がそこにいること、あの農家の一日のことを突然もち出したこと、重々しく呼び起こしてる楽しい思い出、地面に散らかつていて話の間に足で押しやられてるザビーネの憐れな遺品、そういうものがクリストフの心の中の苦しみをかきまわそうとは、彼は夢にも思わなかったのである。しかしザビーネの名前がちよつと彼の口に上ってさえ、クリストフは胸裂ける思いをした。彼はベルトルトを黙らせる口実を捜した。彼は階段を上りかけた。しかし相手は彼にくつついて来、階段の途中で彼を引止め、話をつづけた。そしてついに、ある種の人々が、

ことに下層の人々が、病氣のことを話すおりに見出す不思議な楽しみをもつて、聞きづらい細かな事柄をもやたらにもち出して、ザビーネの病氣を語り出した時、クリストフはもう我慢ができなかった。（彼は切ない声をたてまいとしてじつと身を堅くしていた。）彼はきっぱりと相手の言葉をさえぎった。

「御免ください。」と彼は氷のような冷淡さで言った。「これで失礼します。」

彼はその外の挨拶あいさつもせず**に別れた。**

そういう無情な態度に、粉屋は反感を覚えた。彼は妹とクリストフとの間のひそかな愛情を察していないではなかった。そして今クリストフがそういう無関心さを示したのが、彼には奇怪なこ

とに思われた。クリストフは少しも人情のない奴だやつと彼は判断した。

クリストフは居室に逃げ込んだ。胸苦しかった。引越騒ぎのつづいてる間、もう外に出なかつた。彼は窓からのぞくまいとみずから誓つた。しかしのぞかないではおられなかつた。窓掛の後ろの片隅かたすみに隠れて、なつかしい衣類がもち出されるのを見送つた。それらがなくなつてゆくのを見ると、彼は往来に駆け出そうとし、「いえいえ、私に残していつてください、もつていつてはいけません」と叫ぼうとした。彼は彼女を全部奪われないために、少くとも一品を、たつた一品でも、自分に与えてくれと願ひたかつた。しかしどうして粉屋にそれを願われよう？ 彼にとっては粉屋は

赤の他人であつた。彼の恋は彼女でさえも知つてはいなかつた。それをどうして今他の人に示されよう？ それにまた、もし一言言いかけたら、すぐに泣き出すかもしれない。……否々、黙つていなければならぬ、全部の消滅をただじつとうちながめていなければならぬ、その難破から名残りの一片を救い出すためには、何にもなすことができずに……。

そしてすべてが済んだ時、家が空になつた時、粉屋の後ろに表門がしめられた時、荷車の車輪の響きが窓ガラスを震わしながら遠ざかつた時、その響きが消えてしまつた時、彼は床に倒れ伏して、もはや一滴の涙もなく、苦しもうとのあるいはたたかおうとの考えもなく、冷えきつてしまい、彼自身死んだようになった。

とびら
扉をたたく者があつた。彼はじつとしていた。また扉がたたか
れた。彼は鍵かぎをかけて閉じこもることを忘れていた。ローザがは
いつてきた。床の上に横たわっている彼を見て、彼女は声をたて、
恐れて立止つた。彼は憤然と頭をもたげた。

「何？ なんの用です？ 構わないでください。」
彼女は出て行かなかつた。扉によりかかつて 躊躇ちゆうちよしながら
たたずんでいた。くり返して言つた。

「クリストフさん……。」

彼は黙つて立上つた。そういう所を彼女に見られたのが恥ずか
しかつた。手で埃ほこりを払いながら、きびしい調子で尋ねた。

「いったいなんの用です？」

ローザは気をくじかれて言った。

「御免なさい……クリストフさん……はいつて来たのは……もつてきてあげたのよ……。」

彼は彼女が手に一品をもつてるのを見た。

「これなの。」と彼女は言いながらそれを彼に差出した。「ベルトルトさんに願って、形見の品をもらったのよ。あなたがお喜びなさるだろうと思って……。」

それは小さな銀の鏡であった。あの女が幾時間ひとも、おめかしをするというよりもむしろなまけて、顔を映すのを常としていた、懐中鏡であった。クリストフはその鏡を取った、それを差出している手を取った。

「おう、ローザ！……」と彼は言った。

彼はひしと彼女の親切さを感じ、自分の不正さを感じた。情に激した様子で、彼女の前にひざまずき、その手に唇くちびるをつけた。

「許しておくれ……許しておくれ……。」と彼は言った。

ローザには、初めはわからなかった、それから、よくわかりすぎた。彼女は真赤まっかになり、泣きだした。彼の言う意味はこうであることがわかった。

「僕が悪くとも許しておくれ……あなたを愛さなくとも許しておくれ……僕にできなくとも許しておくれ……あなたを愛することができなくとも、いつまでもあなたを愛することがなかりうとも

！……！」

彼女は手を引込めなかった。彼が接吻せつぶんしてるのは自分ではないことを、彼女は知っていた。そして彼は、ローザの手に頬ほおを押しあてたまま、彼女に意中を読み取られてることを知りながら、熱い涙を流した。彼女を愛することができないのに、彼女を苦しめるのに、苦にがい悲しみを感じていた。

二人は室内の薄ら明りの中に、二人とも泣きながら、そのままじつとしていた。

ついに彼女は手を放した。彼はなおつぶやいていた。

「許しておくれ！……」

彼女はやさしく彼の頭に手をのせた。彼は立上った。二人は黙って接吻し合った。たがいに唇の上に涙の辛い味を感じた。

「長く友だちになりましたよ。」と彼は低く言った。

彼女はうなずいた。そしてあまりの悲しさに口もきけないで、彼と別れた。

世の中は悪くできてるものだと思はれた。愛する者は愛されない。愛される者は少しも愛しない。愛し愛される者は、いつかは早晚、愛から引離される……。人はみずから苦しむ。人は他人を苦しませる。そして最も不幸なのは、かならずしもみずから苦しんでる者ではない。

クリストフはまた家から逃げ出し始めた。もはや家で暮らすことができなかつた。窓掛のない窓やむなし部屋を、正面に見ること

とができなかつた。

彼はさらにひどい苦しみを知つた。オイレル老人はすぐに、その一階を人に貸した。ある日クリストフは、ザビーネの室に見知らぬ人々の顔を見た。新しい生活が、消え失せた生活の最後の痕跡んせきをも消滅さしてしまつた。

家にとどまつてることが彼にはできなくなつた。彼は終日外で過した。夜になつて何にも見えなくなるころに、ようやく歸つて来た。ふたたび彼は野の道しやうようを始めた。そして不可抗の力でベルトルトの農家の方へ引きつけられた。しかし中へははいらなかつた。近寄ることもしかねた。遠くからその周囲を回つた。農家や平野や川を見おろせる丘の上の一地点を見出していた。それ

がいつも散歩の目的地であつた。そこから彼は、屈折して流れてる水を見送り、柳の茂みの下で死の影がザビーネの顔をかすめるのを見たことのある、あの場所まで見渡した。そこから彼は、二人が一つの扉に——永遠の扉に隔てられ、あれほど近くしかも遠く相並んで夜を明したことのある、あの室の二つの窓を見分けた。そこから彼は、墓地の上へ翔かけつていった。彼はまだ墓地へはいろいろと決心することができないでいた。彼は幼い時からその腐爛ふらんの畑地に嫌悪けんおを感じていて、愛する人々の面影をそこに結びつけることが嫌だつた。しかし、高くから遠くから見ると、小さな死の畑地には少しも陰惨な気がなかつた。それは静かだつた、太陽の光に眠つていた。……眠り！……彼女は眠るのが好きだつた！

今その土地では、何物も彼女の眠りを防げないだろう。鶏の聲が、平野を横切つて答え合つていた。農家からは、水車の音や、家禽かきんの鳴声や、子供らのきぎ戯の聲が響いていた。彼はザビーネの小さな娘を見つけ、その走るのを見、その笑声を聞き分けた。一度彼は、農家の門口で、壁をとり巻いてる凹路くぼみちの影で、彼女を待ち受けた。そして彼女が通るのをとらえ、激しく抱きしめた。娘は恐こわがつて泣き出した。彼女はもうほとんど彼を忘れていた。彼は尋ねた。

「ここにるのがいいの？」

「ええ、面白いわ……。」

「帰りたくはない？」

「いやよ！」

彼は放してやった。子供のそういう無関心さが、彼には切なかつた。憐あわれなザビーネよ！……でもその子供は、彼女であつた、彼女の小部分であつた……ごくわずかな小部分！　子供は母親に似ていなかつた。彼女の中でしばらく過して来たのではあつたが、その神秘的滞在からは、故人のごくかすかな香かおりをようやく得てきてるのみだつた。声の抑揚、唇くちびるのちよつとしたゆがめ方、頭の傾かしげ方、などばかりだつた。その他の全身は、まったく他人であつた。そしてザビーネの存在に交渉のあるこの存在にたいして、クリストフはみずから認めはしなかつたが、ある嫌けん悪おを感じてい

た。

クリストフがザビーネの面影を見出したのは、自分自身のうちにだけだった。その面影は至る所へ彼について来た。けれども彼が真に彼女といっしょにいると感ずるのは、一人きりの時だった。とくに、彼女の思い出に満ちたその土地のまん中の、人目の遠い、丘の上の、その隠れ場所にいる時くらい、彼女をすぐそばに感ずることはなかった。彼は数里の道を歩いてやって来、あたかもある密会へおもむくかのように胸をどきつかせながらそこへ駆け上った。それは実際一つの密会だった。そこへ着くと、彼は地面に——彼女の身体が横たわってるその同じ地面に——身を横たえた。彼は眼をつぶった。彼女が彼のうちに沁み込んできた。彼は彼女の顔だちを見なかった、声を聞かなかった。がその必要はなかつ

た。彼女は彼のうちには入り込み、彼女は彼をとらえ、彼は彼女を自分のものにした。そういう熱烈な幻覚状態のうちにあつては、彼は彼女といつしよにいるということ以外には、もう何事も意識しなかつた。

その状態は長くはつづかなかつた。——実を言えば、彼がまつたく真実だったのはただ一回だけだった。翌日からは、早くも意志が加わつた。そしてそれ以来、クリストフはその状態を復活させようといたずらにつとめた。その時になつて彼は初めて、ザビ―ネのはつきりした姿を心に描き出そうと考えた。それまでは、そんなことは思いもしなかつたのである。彼は閃せんこう光的にそれを描き出すことができ、それにすっかり光被された。しかしそれも、

長い期待と暗黒とをもつてして初めて得られるのであった。

「憐あわれなザビーネよ！」と彼は考えた、「彼らは皆お前を忘れて
いる。お前を愛し、永久にお前を心にとどめているのは、私だけ
だ、おう私の貴い宝よ！ 私はお前をもっている、お前をとらえ
ている。決してお前をのがすまい！……」

彼はそういうふうに言っていた。なぜならすでに彼女は彼から
のがれかかっていたから。あたかも水が指の間から漏るように、
彼女は彼の考えから逃げ出しかかっていた。彼はいつも忠実に密
会にやって来た。彼は彼女のことを考えようとして、眼をつぶつ
た。しかし往々にして彼は、三十分の後に、一時間の後に、時
は二時間の後に、自分が何にも考えていなかったことに気づいた。

低地の物音、水門に水の奔騰する音、丘の上に草を食^はんでる二匹の山羊^{やぎ}の鈴の音、彼が寝ころがってるすぐそばの細い小さな木立を過ぎる風の音、そういうものが、海綿のように粗^{あら}い柔軟な彼の考えを浸していた。彼は自分の考えに憤った。その考えは彼の望みに従おうとつとめ、故人の面影を固定させようとつとめた。しかし飽き疲れうつとりしてまた力を失い、安堵^{あんど}の溜^{ため}息^{いき}をつきながら、種々の感覚の怠惰な波動にふたたび身を任すのであった。

彼は自分の遅鈍な気分を振いたたした。ザビーネを求めて田舎^{いなか}を歩き回った。その笑顔が宿ったことのある鏡の中に彼女を求めた。その手が水に浸ったことのある川縁に彼女を求めた。しかし鏡も水も、彼自身の反映をしかもたらさなかつた。歩行の刺激、

新鮮な空気、脈打つ強健な血潮、それらは彼のうちに音楽を呼び覚さました。彼は自分を欺こうとした。

「ああザビーネ……」と彼は嘆いた。

彼はそれらの歌を彼女にささげた。自分の愛と苦しみとを、頭のうちに蘇よみがえらせようと企てた。……しかしかたにしても甲斐かいがなかつた。愛と苦しみとはよく蘇よみがえつた。しかし憐あわれなザビーネはそれにかかわりをもっていなかつた。愛と苦しみとは未来の方をながめていて、過去の方をながめてはいなかつた。クリストフはこれらの青春にたいしてはなんらの手向いもできなかつた。活気は新たな激しさをもつて彼のうちに湧わき上つてきた。彼の悲痛、愛惜、清浄な燃えたつ愛、抑圧された欲望は、彼の熱を高進さして

いった。喪の悲しみにもかかわらず、彼の心臓は快い激しい律動
 で鼓動していた。いきり立った歌が酔い狂った音律で踊っていた。
 すべてが生命を祝しゆくしやう頌し、悲しみさえも祝いの性質を帯びてい
 た。クリストフはきわめて率直だったから、みずから幻を描きつ
 づけることができなかつた。そして彼はおのれを蔑さげすんだ。しかし
 生命は彼に打ち勝つた。死に満ちた魂と生命に満ちた身体とを持
 ち、彼は悲しみながら、復活の力に身を任せ、狂きやうもう妄もうな生の
 喜びに身を任した。強者にあつては、苦悶くもんも、憐憫れんびんも、絶望も、
 回復できない亡失の痛切な負傷いたでも、死のあらゆる苦痛も、猛烈な
 拍車うで彼らの脇腹わきばらをこすりながら、この生の喜びを刺激せんどし煽せんど
 動うするばかりである。

かつまたクリストフは、ザビーネの影が閉じ込められてる近づきがたい侵しがたい奥殿を、自分の魂の底の深みにもつていっていることを、よく知っていた。生命の急流もこの奥殿を流し去ることはできないだろう。人は皆おのおの、おのが心の奥底に、愛した人たちの小さな墓場のごときものをもっている。彼らは何物にも覚さされずに、幾年月かをそこに眠る。しかし他日その墓窟はかあなの開ける日が——人の知るごとく——めぐつて来る。死者はその墓を出でて、母の胎内に眠つてる子供のようにな、彼らの思い出がやす息やすらつてゐる胸を持つ愛人へ、愛する者へ、色褪あせた唇くちびるで頬笑ほほえみかける。

三 アーダ

雨がちな夏のあとに、秋が輝いていた。果樹園の中には、果実が枝の上に群れをなしていた。赤い林檎りんごが、象牙珠ぞうげだまのように光っていた。ある樹木は早くも、晩秋の燦爛さんらんたる衣をまとっていた。火の色、果実の色、熟した瓜うりや、オレンジや、シトロンや、美味な料理や、焼肉などの、種々の色彩いろどり。鹿子色かのこいろの光が、林の間の至る所にひらめいていた。そして牧場からは、透き通ったさふらの小さな薔薇色ばらの炎が立ちのぼっていた。

彼は丘を降りていた。日曜の午後だった。彼は傾斜に引かれてほとんど駆けながら、おおまた大胯おまたに歩を運んでいた。散歩の初めから頭につきまどつた律動をもつてる一句を、彼は歌っていた。そして真赤まっかな色をし、胸をはだけ、狂人のように腕を振り、眼をきよろつかせながら、やって行くと、道の曲り角で、金髪の大きな娘に、ぱったり出会った。娘は壁の上に乗って、大きな枝を力任せに引張りながら、紫色の小さな梅の実を、うまそうに食っていた。彼らは二人とも同じようにびっくりした。彼女はどきまぎしで、口いっぱいほおばりながら彼をながめた。それから笑い出した。彼も同じく放笑ふきだした。彼女は見るも快い姿だった、光の粉を散らしたような、縮れた金髪で縁取られた丸顔、赤いふつくらと

した頬ほお、青い大きな眼、横柄にそりくり返つてるやや太い鼻、つき出た強い糸切歯をそなえたまつ白な歯並が見えてる、ごく赤い小さな口、貪どんしよく食あご的な頤あご、それから、丈夫な骨組みの体格のよい、大きな脂あぶらぎつた豊ほうじよう饒あぶらな身体。彼は彼女に叫んだ。

「御馳走ちそうさま！」

そして歩きつづけようとした。しかし彼女は呼びかけた。

「もし、もし、少し親切にしてくださいませんか？ 助けておろしてちょうだいな。降りられなくなつたから……。」

彼はもどつてきた。どうして上つたかと尋ねた。

「手足で……上るのはいつもやさしいものよ……。」

「うまそうな果物くだものが頭の上にぶらさがつてる時には、なおさら

でしよう。」

「ええ……でも食べてしまうと、がっかりするわ。もうどこから降りていいかわからなくなってしまいわ。」

彼はそこにとまってる彼女をながめた。そして言った。

「そうやってるとよく似合いますよ。そこにじつとしていらつしやい。また明日あした見に来ます。さよなら！」

しかし彼は彼女の下にたたずんで、動かなかつた。

彼女は恐こわがつてるふうをした。そしてかわいい顔つきで、置きざりにしないようにと願つた。二人は笑いながら、そのまま顔を見合つていた。彼女はつかまつてる枝を彼にさし示しながら言つた。

「あげましようか。」

所有権にたいするクリストフの尊重の念は、オットーとともに
彷徨ほうこうしていたころよりも、少しも発達していなかった。彼は躊躇ちゅうちよ
なく承諾した。彼女は彼に梅の実を投げつけながら面白が
った。

彼が食べてしまうと、彼女は言った。

「さあこれで!……」

彼はなお待たして意地悪くうれしがった。彼女は壁の上でじれ
つたがっていた。ついに彼は言った。

「さあ!」

そして彼は腕を差出した。

しかし飛び降りようとする時になって彼女は考え直した。

「待ってちょうだい！ 先に食べ物を取込んでおかなくちやならないわ。」

彼女は手の届くかぎりのりっぱな梅の実を摘み取って、ふくらんだチョッキにいっぱいいつめた。

「用心してくださいよ。つぶしちやいけないわよ。」
彼はつぶしてやりたいほどだった。

彼女は壁の上に身をかがめ、彼の腕に飛び込んだ。彼は頑がんじよ丈うではあったが、その重みをささえかねて、彼女とともに後ろ

ぎまに倒れかけた。二人は同じくらいな身長だった。顔が触れ合った。梅の汁しるにぬれた甘い唇くちびるに、彼は接吻せつぶんした。彼女も同じく

無遠慮に接吻を返した。

「どこへ行くんです？」と彼は尋ねた。

「わからないわ。」

「一人で散歩してるんですか。」

「いいえ。友だちといっしょなの。でも見失ってしまったのよ。

……おい！」と彼女はいきなり精いっぱい呼び声をたてた。

何の答えもなかった。

彼女は別にそれを気にもかけなかった。二人はどこへともなくただまっすぐに歩き出した。

「そしてあなたは、どこへいらっしやるの？」と彼女は言った。

「僕もわからないんです。」

「ちようどいいわ。いつしよに行きましよう。」

彼女は少しはだけてるチヨツキから梅の実を取出して、それをかじりだした。

「毒になりますよ。」と彼は言った。

「いいえちつとも。いつも食べてるのよ。」

チヨツキの隙間すきまから彼は彼女の肌はだ襦じゆ袷ばんを見ていた。

「もうすっかりあたたかになつちやったわ。」と彼女は言った。

「どれ！」

彼女は笑いながら彼に一つ差出した。彼はそれを食べた。彼女は子供のよう梅の実をすすりながら、横目で彼をながめていた。彼にはこの出来事がしまいになるかよくわからなかった。が

彼女には少なくとも多少の見当はついていて、彼女は待っていた。「おーい！」と林の中で叫ぶ声がした。

「おーい！」と彼女は答えた。「……あらいたわ、」とクリストフに言った、「まあよかった。」

彼女は反対に、かえって悪いと考えていた。しかし女にとつては、言葉というものは考えどおりのことを言うために与えられたものではない。……ありがたいことだ！もしそうでなかったら、地上にはもはや道德が存し得なくなるだろう。

人声は近づいてきた。連れの者たちが道に出て来るところだった。彼女は一飛びに路傍の溝を踊り越し、その土手によじ上り、木立の後ろに隠れた。彼はびっくりして彼女のすることをながめ

ていた。彼女は来いと強く相図をした。彼はあとについていった。彼女は林の中の方にはいり込んでいった。

「おい！」と彼女は連れの者たちがかなり遠くなつた時にふたたび言った。「……少し捜さしてやらなきやいけないわ。」と彼女はクリストフに言つてきかした。

連れの者たちは道の上に立止つて、どこから声が響いてくるのか耳を傾けた。彼らは彼女の声に答えて、つづいて林の中にはいつてきた。しかし彼女は待つていなかった。右に出たり左に出たりして面白がった。彼らは喉のどを潤からして呼んでいた。彼女はそのままにさしておいて、それから反対の方へ行つて呼んだ。ついに彼らは疲れてしまった。彼女を出て来させる最上の策は、少しも

捜してやらないことにあるのだと信じて、こう叫んだ。

「さようなら！」

そして歌いながら去っていった。

彼女は彼らにほつたらかさされたのを怒った。彼らを厄介払いしようとしてはいたが、しかし彼らにそうやすやすと思ひ切られたことが許せなかった。クリストフは馬鹿ばかげた顔つきをしていた。

見知らぬ娘といっしょにやった隠れん坊の遊びが、たいして面白くもなかった。そして二人きりなのに乗じようとも考えてはいなかった。彼女も別にそうしようとは考えていなかった。腹だちまぎれにクリストフのことなんか忘れていた。

「まあ、ずいぶんひどい。」と彼女は手を打ちながら言った。

「こんなに置いてきぼりにするなんて！」

「でも、」とクリストフは言った、「自分で望んだことでしよう。」

「いいえちつとも！」

「自分で逃げたでしょう。」

「私が逃げたつて、それは私一人のことで、あの人たちの知ったことじゃないわ。あの人たちは私を捜してくれなけりやならないはずだわ。もしも私が道にでも迷ったんだつたら……。」

もしも……もしも事情が反対だったら、どんなことになっていたらうかと、彼女ははや心細がっていた。

「そう、少し責めてやらなくっちゃ！」と彼女は言った。

彼女は おおまた 大跨に引返した。

道の上に出ると、彼女はクリストフのことを思いだして、また彼をながめた。——しかしもう時遅れだった。彼女は笑いだした。先刻彼女のうちにいた小さな悪魔は、もういなくなっていた。彼女はほかのがも一匹やって来るのを待ちながら、無関心な眼でクリストフをながめていた。それにまた、彼女は腹がすいていた。胃袋の加減で、夕飯時なのを思い出していた。飲食店で連れの者たちといっしょになろうと急いでいた。彼女はクリストフの腕をとらえ、力いっぱいにもたれかかり、しきりに吐息をつき、疲れ果てたと言った。それでもやはり、狂人のように叫んだり笑ったり駆けたりしながら、クリストフを引張って坂道を降りていった。

二人は話しだした。彼女は彼がどういう者であるか知った。しかし彼女は彼の名前を知っていなかった。そして彼の音楽家たる肩書にたいして敬意を払わないらしかった。彼の方でも彼女のことを知った。カイゼル街（町の最もりっぱな通り）のある化粧品商の店員で、名前はアーデルハイト——友だち仲間ではアーダ、であつた。その散歩の仲間は、同じ商店に働いてる朋輩ほうばいの一人と、二人のりっぱな青年だつた。青年の一人はヴァイレル銀行員で、も一人はある大きな流行品商の事務員だつた。彼らは日曜を利用したのであつて、ライン河の美景が見られるプロヘツト飲食店で晩餐ばんさんをし、それから船で帰るつもりにしていた。

二人が飲食店に着いた時、一同はもうそこにすわり込んでいた。

アーダは一同を責めたてないではおかなかつた。卑劣にも置きざりにしたことを彼らに不平言い、そしてこの人に助けてもらったのだと言つてクリストフを紹介した。彼らはアーダの苦情はいつこう構いつけなかつた。しかし彼らはクリストフのことを知つていた。銀行員は評判を耳にしていたし、事務員は二、三の樂曲を聞いたことがあつた——（彼はすぐに得意然とその一節ひとつしを口ずさんだ。）そして彼にたいする彼らの尊敬の様子は、アーダに感銘を与えた。そのうえ、も一人の若い女ミルハ——（實際はヨハンナという名前だつたが）——栗色くり髪くの女で、始終眼をまたたき、額が骨たち、前髪を引きつめ、その支那の女みたいな顔は、多少澁めがちではあつたが、しかし利口そうでちよつとかわいく、山や

羊ぎみたいな面影があり、脂あぶらけ気の多い金色の皮膚をしていた——それが急に宮廷音楽員をちやほやしだしたので、アーダはなお感銘を受けた。一同は晚餐御同席の栄を得たいと彼に願った。

彼はかつてそういう供応に臨んだことがなかった。各人がきそつて彼を尊敬した。二人の女が、仲よく彼を奪い合つた。二人とも彼の氣を迎えた——ミルハは、大仰な様子と狡こうかつ猾な眼つきをして、食卓の下で彼に膝ひざがしら頭あたまをつきつけながら——アーダは、美しい瞳ひとみや美しい口や、すべてその美しい身体のあらゆる誘惑の種を、厚かましく働かせながら。そしてやや露骨すぎるそういう嬌きょう態たいは、クリストフを当惑させ悩ました。それらの大胆な二人の娘は、ふだん家で彼をとり巻いてる無愛想な人々の顔つきと

は、まったく別種の観があつた。彼はミルハに興味を覚えた。彼女の方がアーダよりも伶俐れいりだと推察した。しかしそのひどく阿諛あゆ的なやり方と曖あいまい昧な微笑とには、好悪こうおの入り交つた気持を起こさせられた。彼女はアーダから発する喜悅の光輝にたいしては、匹敵し得なかつた。そして彼女もよくそれを知つていた。勝負は自分の方が負けだと見てとると、彼女は強しいて頑張がんばらずに、ただ微笑ほほえみつけ、氣長に好機を待つことにした。アーダはもう自分のものだと見てとると、そのうえ優勢に乗ずることをしなかつた。彼女の振舞は、朋輩を不愉快がらせようとするのが重おもであつた。彼女はそれに成功した。満足だつた。しかしその戯れに、彼女はみずから引つかかつた。クリストフの眼の中に、彼女は自分が煽あお

りたててやった情熱を感じた。そしてその情熱は、彼女のうちにも燃えてきた。彼女は口をつぐんだ。下等な擲揄やゆをやめた。二人は黙って顔を見かわした。口の上には接吻せつぶんの味が残っていた。時々にはわかにかに元気を出して、他の人達の冗談に騒々しく口を出した。それからまた黙り込んで、そつと顔を見合つた。しまいは人に気づかれるのを恐れるかのように、もう見かわしもしなかつた。自分のうちにくぐまり込んで、情欲をかきいだいていた。

食事が終ると、一同は出かけることにした。乗船場まで行くには、林をつき切つて二キロメートル歩かなければならなかつた。アーダはまっ先に立上つた。クリストフはそのあとにつづいた。二人は他の人々の仕度ができるのを待ちながら、表の石段の上に

たたずんだ——飲食店の門前にもさされたただ一つの軒燈の光が、ぼつりと差ししてる浅い霧の中に、無言のまま相並んで……。

アーダはクリストフの手を取り、家の横を、庭の暗闇くらやみの方へ引張っていった。茂るに任せた葡萄蔓ぶどうづるが一面にたれさがつてるバルコニーの下に、二人は身を潜めた。あたりは重い闇だった。

二人は相手の顔も見えなかった。風が縦もみこずえの梢を揺すつていた。彼は自分の指にからんでるアーダの生あたたかい指を感じ、彼女が胸にさしている一輪のヘリオトロープの香りかおを感じた。

にわかには彼女は彼を引寄せた。クリストフの口は、霧にぬれたアーダの髪に触れ、彼女の眼や睫毛まつげや小鼻や脂肪太りの頬骨ほおぼねに接吻し、口の角に接吻し、唇くちびるを捜し求めて、そこにじっと吸いつ

いた。

他の者たちも出て来ていた。彼らは呼んでいた。

「アーダさん！……」

二人はじつとしていた。たがいに抱きしめながら、息を凝らしていた。

ミルハの声が聞えた。

「先に行ったのよ。」

仲間の者の足音は、闇の中を遠ざかっていった。二人はたがいになお強く抱きしめて、熱烈なささや囁きも唇からくちびる漏れる余地がなかった。

村の大時計が遠くで鳴った。二人は抱擁から身を離した。乗船

場へ大急ぎで駆けつけなければならなかった。二人は無言のまま、腕と手とを組み合せ、たがいに歩調を合せながら出かけた——彼女の気性どおりの素早いきぱきした小足で。街道は寂しかった。平野に人影もなかった。十歩と先は見えなかった。二人は好ましい闇夜の中を、晴やかな安心しきった心地で歩いていった。道の小石につまずきもしなかった。遅れていたので近道をとった。小道は葡萄畑ぶどうの間をしばらく降りたあとに、また上り坂になり、丘の中腹を長くうねっていた。霧の中に河の音が聞え、近づいて来る船の推進輪の高い響きが聞えてきた。二人は道を捨てて畑の中を駆けだした。ついにライン河の岸に着いた。しかし乗船場まではまだかなりあった。それでも二人の晴やかな気持は変らなかつ

た。アーダは夕の疲労をも忘れていた。二人はそのまま、月の光のように灰白く浮出してる河に沿うて、ますます湿っぽくますますこまやかに漂っている靄もやの中を、ひっそりしてる草の上を、夜通しでも歩けられそうな気がしていた。船の汽笛が鳴って、その眼に見えない怪物は重々しく遠ざかっていった。二人は笑いながら言った。

「次のに乗りましょう。」

河の渚なぎさには、静かな余波が二人の足下に碎けていた。

乗船場に行くと、こう言われた。

「しまいの船が出たばかりです。」

クリストフは胸にどきっとした。アーダの手はいっそう強く彼

の腕を握りしめた。

「いいわ！」と彼女は言った、「明日あしたになったら出るでしょう。」

数歩向うに、河岸かしの高壇テラスにある柱に、角燈がさがっていて、霧かきの暈かきの中にぼーっと光っていた。その少し先に、二、三の明るいガラス窓が見えて、一軒の小さな宿屋があつた。

二人は狭い庭にはいった。歩くと砂が音をたてた。手探りで階段が見つかった。中にはいると、燈火が消され始めていた。アーダはクリストフの腕にすぎりながら、室を一つ求めた。二人が通された室は、庭に面していた。クリストフは窓からのぞき出した。見ると、河かわは燐りん光こうのように浮出しており、角燈が眼のように光っていて、そのガラスに大きな翼の蚊がぶつつかっていた。扉とびらは

しめられた。アーダは寝台のそばに立って、微笑ほほえんでいた。彼女は彼女の方を見られなかった。彼女も彼を見てはいなかったが、しかし睫毛まつげ越しに、彼の一挙一動をうかがっていた。床板は歩きたびにきしつた。家の中のかすかな物音まで聞えた。二人は寝台の上ですわって、無言のまま相抱いだいた。

庭のちらつく燈ともしびは消えた。すべてが消えた……。

夜……淵ふち……光もなく、本心もなく……ただ「存在」が。「存在」の陰いんあん闇どんよく貪欲どんよくな力。無上に力強い喜悅。張り裂けるばかりの喜悅。空虚が石を吸い込むように、全身を吸い込む喜悅。あらゆる考えを吸い尽す情欲の渦卷うず。暗夜のうちに転々する陶醉せる

世界の、狂暴無稽むけいなる「法則」……。

夜……相交る息、溶け合う二つの身体の金色の生あたたかさ、
いっしよに陥つてゆく恍惚こうこつの深淵しんえん……幾多の夜を含む夜、幾
多の世紀を含む時間、死を含む瞬間……共にみる夢、眼を閉じて
ささやく言葉、半ば眠りながら捜し合う素足の、やさしいひそや
かな接触、涙と笑い、万事を空にして愛し合い、また虚無の眠り
を分ち合う、その幸福、脳裏に浮ぶ雑然たる物象、鳴りわたる夜
の幻影……。ライン河は、家の下の入江に、ひたひたと音をたて
ている。遠くには、巖いわおに打ちつけるその波が、砂上に降る小雨の
ように響いている。乗船台は水の重みに、きしりうなっている。
それをつなぎ止める鎖は、古い鉄屑くずのような音をたてて、伸び縮

みしている。河の音が高まって、室の中いっぱいになる。寝台は舟のように思われる。二人は相並んで、眼くらむばかりの流れに運ばれる——空翔かける小鳥のように、空虚のうちに浮かびながら。夜はますます闇やみとなり、空虚はますますむなしくなる。二人はたがいにくまらずしかと抱きしめる。アーダは泣き、クリストフは意識を失い、二人とも暗夜の波の下に沈んでゆく……。

夜……死……。何故よみがえに蘇るの要があるう？……

夜明けの光が、ぬれた窓ガラスをかすめる。生命の光が、懶ものうい身体の中にまたともってくる。彼は眼を覚さます。アーダの眼が彼を見ている。二人の頭は同じ枕の上にもたれている。二人の腕はか
らみ合っている。二人の唇くちびるは相触れている。全生涯が数分間のう

ちに過ぎてゆく、太陽と偉大と静安との日々……。

「私はどこにいるのか？　そして私は二人なのか？　私はまだ存在しているのか？　私はもはや自分の一身を感じない。無限が私をとり巻いている。オリンポスの平安に満ち充ちた静かな大きい眼をしてる彫像、その魂を私は今もっている……。」

二人はまた眠りの時代に陥ってゆく。そして耳慣れた曙あけぼのの音が、遠い鐘、過ぎゆく小舟、水のしたたる二本の櫂かい、道行く人の足音が、二人に生きてることを思い起こさせながら、それを二人に味わわせながら、そのまどろめる幸福を、乱すことなく愛撫あいぶしてゆく……。

窓の前に船の音がしてきたので、うとうととしていたクリストフは我れに返った。きまつた職務の間に合うように町へ帰るため、七時には出かけようという約束だった。彼はささやいた。

「聞こえるだろう？」

彼女は眼を開かなかつた。ただ微笑ほほえんで、唇を差出し、元氣を出して彼を抱擁し、それからまた頭を彼の肩の上に落した。……窓ガラスから彼は、船の煙筒や、人なき甲板や、ほとぼしり出る煙が、白い空にすべってゆくのを見た。彼はまたうつとりとした……。

気づかないうちに一時間たった。時計の音を聞いて、彼ははつとした。

「アーダ……、」と彼は女の耳にささやいた、「ね、アーダ、」
と彼はくり返した、「八時だよ。」

彼女はなお眼を閉じたまま、不機嫌ふきげんそうに眉まゆと口とを渋めた。
「眠らしてちょうだいよ。」と彼女は言った。

そして彼の腕から身を離し、疲れはてた溜息ためいきを漏らしながら、
彼に背を向け、向う向いたまままた眠った。

彼は彼女の傍かたわらに寝ていた。同じあたたかさが二人の身体を流
れていた。彼は夢想にふけり始めた。血潮は穏かな大きい波をな
して流れていた。清朗な感覚は微妙な清新さでごくわずかな印象
をも感じていた。彼は自分の力と青春とを楽しんだ。男子たるの
誇りを感じた。自分の幸福ほほえに微笑んだ。そして自分の孤独を感じ

た、いつものとおりの孤独を、おそらくはなおいつそうの孤独を。しかしなんらの悲哀もなく、崇高なせきりよう寂寥の孤独だった。もはや熱気もなかった。もはや陰影もなかった。自然は彼の朗らかな魂のうちに自由に反映していた。仰向けに横たわり、窓に面し、輝く霧を含んだまぶしい空気の中に眼をおぼらして、彼は微笑んだ。

「生きることはなんといいことだろう！……」

生きる！……一艘そうの小舟が通った。……彼は突然、もう生きていない人たちのことを考えた。通りすぎた小舟のことを考えた。それにはいつしよに乗っていた、彼らが——彼と——彼女と……。彼女とは？……それは今彼のそばに眠ってるこの女ではない。た

だ一人の女、恋しい女、死んでる憐あわれな小さな女。——それならばこの女は何者であるか？ どうしてここにいるのか？ どうして二人は、この室に、この寝台に、やって来たのか？ ながめても、見覚えがない。見知らぬ女だ。昨日の朝までは、彼にとつて彼女は存在していなかった。彼は彼女のことを知っているか？——伶俐でないことを知っている。善良でないことを知っている。血の気の少ない寝ね脹ばれた顔をし、低い額をし、息をするために口を開き、ふくれつき出た唇くちびるこいで鯉こいのような口つきをしていて、今は美しくないことを知っている。自分が少しも愛していないことを知っている。そして考えれば考えるほど、切ない悩みに彼は胸を刺し通される。最初の瞬間から、この見知らぬ唇せつぷんに接吻し

たのだ。出会った最初の夜から、この無関係な美しい身体を抱いたのだ。——それなのに、愛する彼女にたいしては、自分のそばに彼女が生きまた死ぬのをながめてき、かつてその髪に触れることもなし得なかつたし、その身体の香りを知ること永久にないだろう。もう何も残っていない。すべて溶け去ってしまった。土地からすべて奪われてしまった。彼女を護るまもこともしなかつた：
∴。

そして、仇気あどけなく眠っている女をのぞき込み、その顔だちをうかがいながら、好意のない眼でながめていると、彼女は彼の視線を感じた。彼女はじつと見られてるのが不安になり、ようやく元気を出して、重い眼まぶた瞼を上げ、微笑ほほえんだ。眼覚めたばかりの子供

のように、よく回らぬ舌の先で、彼女は言った。

「見ちや嫌いやよ、見つともないから……。」

彼女は眠氣にうちまけて、またすぐになお微
笑み、口ごもった。

「ああ、ほんとに……ほんとうに眠いのよ！」

そしてまた夢にはいった。

彼は笑わないではおられなかった。その子供らしい口と鼻とにやさしく接吻した。それから、その大きな小娘の寝姿をなおちよつとながめた後、その身体をまたぎ越して、音をたてずに起上った。彼が寢床から出ると、彼女はほつと溜息をついて、あいた寢台のまん中に、長々と身を伸した。彼は身繕いをしながら、彼女

の眼を覚させまいと、その心配は少しもなかつたが、とにかく用心をした。それが済むと、窓ぎわの椅子いすにかけて、氷塊こりけがころげてるかと思われるような、霧の濛々もうもうと立ちこめた河をながめた。そして夢想のうちに惘然ぼうぜんと沈んでゆくと、哀調を帯びた牧歌の曲が漂つてきた。

時々彼女は、眼を少し開いて、ぼんやり彼の方をながめ、幾秒かかかつて彼の姿を認め、彼に微笑ほほえみかけ、またも眠りに陥つていった。彼女は彼に時間を尋ねた。

「九時十五分前だよ。」

彼女は半ば眠りながら考えた。

「まだなんでもないわ、九時十五分前なら。」

九時半に、彼女は伸びをし、溜息をつき、起きると言った。

しかし彼女がまだ動かないうちに、十時が鳴った。彼女は不機嫌ふきげんになった。

「また鳴ってるわ!……いつも時間の進むこと!……」

彼は笑った。そして彼女のそばに来て寝台に腰かけた。彼女は彼の頸くびに両腕をまきつけて、夢の話をした。彼はあまり注意して聞かないで、ちよいちよいやさしい言葉をはさんでさえぎった。しかし彼女は彼を黙らして、非常に重大な話かなんぞのように、ごく真面目まじめに話をつづけた。

——彼女は晩餐会ばんさんに列していた。大公爵もいた。ミルハは彪む犬いぬだった……いや、縮れ毛の羊だった。そして給仕をしていた。

……アーダはどうしたのか、地面から上へ上って行って、空中で歩いたり踊ったり寝たりすることができた。それは訳もないことだった。ただ、こう……こうすればよかった。するともうそれができるのだった。

クリストフは彼女をひやかした。彼女は笑われたのを少しむつとしながらも、自分でも笑っていた。彼女は肩をそびやかした。

「ああ、あんたにはちつともわからないのね！……」

二人はその寝台の上で、同じ皿さらと同じ匙さじとで朝食をした。

彼女はついに起上った。掛物をはねのけ、美しい大きなまっ白い足先と、でっぷりした美しい脛すねを出して、敷物の上にすべりおりました。それから、そこにすわって息をつき、自分の足をながめた。

しまい、手を打って、出てゆくように彼に言った。彼がぐずぐずしてると、彼女は彼の肩をとらえ、扉の外とびらに押し出し、鍵かぎでしめ切った。

彼女はいろいろ手間どり、美しい手足を一つずつながめては差伸ばし、顔を洗いながら十四連の感傷的な歌曲リードを歌い、窓につかまっつてタンブリンの音をまねてるクリストフの顔に水をはねかけ、出かける時には、庭に咲き残ぼらつてる薔薇の花を摘み取り、そして二人は船に乗った。霧はまだ晴れていなかった。しかしそれを通して日が輝いていた。乳色の光の中に浮とんでる気がした。アーダはクリストフとともに艫ともの方にすわり、うとうととした不平そうな様子をし、光が眼にしみるとか、一日じゅう頭痛がするだろう

とか、愚痴を言っていた。そしてクリストフが、彼女の苦情を十分本気にとつてやらなかつたので、彼女は無愛想に黙り込んでしまった。わずかに細目を開き、眼覚めたばかりの子供のようなおかしな鹿しかつめ爪らしきをしていた。しかし次の乗船場で、優美な貴婦人が乗り込んで近くにすわると、彼女はすぐに元気になって、感傷的な上品なことをクリストフに言おうとつとめた。四角張つた言葉使いを彼にしだした。

クリストフは彼女が女主人になんと遅延の言い訳をするか、それを気にしていた。彼女はほとんど気にかけてもいなかった。

「なに、初めてのことじゃないわ。」

「何が?……」

「おそくなつたのが。」と彼女は彼の問いに少し困つて言った。彼は彼女がそう何度もおそくなつた理由を尋ね得なかつた。

「なんと言うつもりだい？」

「お母さんが病氣だとか、死んだとか……なんだつていいわ。」
彼女にそう無造作むぞうさに言われたので、彼は嫌いやな心地がした。

「嘘うそをつくのはいけない。」

彼女はむつとした。

「私は嘘は言いません……それにしたつて、言えやしません……」

彼は半ば冗談に半ば真面目まじめに尋ねた。

「なぜ言えないんだい？」

彼女は笑った。そして肩をそびやかしながら言った、彼は粗野で無作法だとか、もうお前なんて言葉つきをしないように頼んでおいたのにか。

「僕にはその権利がないのかい？」

「ちつともありません。」

「あんなことがあつたあとでも？」

「何にもあつたんじゃありません。」

彼女は笑いながら、軽侮の様子で彼を見つめた。そして、もとよりそれは冗談ではあつたが、最もひどいことには、真面目まじめにそう言いほとんどそう信じることも、彼女にはたいして骨の折れることではないに違いなかつた。——（彼はそれを感じた。）しか

し彼女はきつと愉快的思い出しにはしゃいでもいたのだろう。クリストフをながめながら急に笑い出し、音高く接吻せつぶんし、近くの人々をもはばからなかった。それにまた近くの人々も、なんら驚いた様子をも見せなかった。

彼は今では、いつも男女の店員らと連れだつて散歩するようになった。彼らの野卑さを彼もあまり好まず、途中ではぐれようとつとめた。しかしアーダは、つむじ曲りの気質から、もう林の中に迷い込もうとしなかった。雨が降る時か、あるいは他の理由で町から出かけられない時には、彼は芝居や博物館や動物園などに彼女を連れていった。なぜなら、彼女はいつも彼といっしょなの

を人に見せつけたがったから。彼女はまた、宗教上の祭式にまで彼について来てもらいたがった。しかし彼は、もはや信仰しなくなつてからは、教会堂へ足を踏み入れることを欲しなかつたほど、ばかばかしく誠実だった。——（他の口実を設けて、会堂のオルガニストの地位を辞してしまつていた。）——しかもまた同時に、みずから識^しらずしてやはり宗教的だったので、アーダの申し出を不敬なことだと思わずにはいられなかつた。

彼は晩には彼女のところへ出かけていった。同じ家に住んでるミルハがいつしよにいた。ミルハは少しも恨みをいだいていないで、柔らかいやさしい手を彼に差出し、無関係なことや放縦な事柄を話し、そしてつつましく姿を隠した。この二人の女は、親友

たる理由を最も失つて以来、最も親友らしく振舞つていた。いつも二人いつしよにいた。アーダは何事もミルハに隠さないで、すっかりうち明けていた。ミルハはなんでも聞いていた。そしてそれを、二人とも同じくらいうれしがつてるようだった。

クリストフはこの二人の女といつしよになると、どうも気がゆつたりしなかつた。彼女らの友誼、^{ゆうぎ}その奇怪な会話、^{ほうし}放恣な行動、無遠慮な態度、とくにミルハの物の見方や話し方の無遠慮さ——（それでも彼の面前ではいくらか少なかつたが、彼がいない時のこともアーダが聞かしてくれた）——それからまた、つまらない問題やかなり淫^{みだ}らかな問題へいつもわたつてゆく、不謹慎で、^{じょうぜ}饒舌な彼女らの好奇心、すべてそういう曖^{あいまい}昧な多少猥^{ふん}雑な雰囲気

気に、彼は恐ろしく困らされた。それでもまた心をひかれた。なぜならそういう種類のことを少しも知らなかったから。その二人の小さな獣どもは、つまらないことを話し合い、とりとめもないことを語り合い、馬鹿げた笑い方をし、うれしそうに眼を輝かしながら、淫逸な話をつづけるので、そういう会話の中に出ると彼は面食つてしまった。そしてミルハが立ち去るとほつと安堵するのだった。二人の女をいっしょにすると、彼には言葉のわからない外国の土地のように思われた。考えを通じ合うことができなかつた。彼女らは彼の言葉には耳も傾けず、外国人たる彼を馬鹿にしていた。

アーダと二人きりの時には、やはり違った二つの言葉を使いは

したが、それでもたがいに了解するために、二人とも少なくとも努力はしていた。しかし実を言えば、彼は彼女を了解すればするほど、ますます了解していきいのであった。彼女は彼が知った最初の女性だった。あの憐れなあわザビーネも女性の一人ではあったが、彼は彼女を少しも知っていなかった。彼にとっては、彼女はただ心の夢だけとなっていた。しかるにアーダは、空費した時を回復させる役目となった。彼はこんどこそ女性の謎を解こうとつとめた——おそらくはなんらかの意義を求めようとする人々にとつてしか謎ではないところの謎を。

アーダは少しの知力もそなえていなかった。がそれはまだ些細さいさいな欠点だった。もし彼女がそれをあきらめていたら、クリストフ

もそれをあきらめたるう。しかし彼女は、つまらないことにばかり頭を向けていながらも、精神的な事柄にも通じてると自負して、確信をもつて万事を判断した。音楽のことを話しては、クリストフが最もよく知つてる事柄を彼に説明してやり、判定を下して頑がんとして応じなかつた。彼女を説伏しようとしても無駄むだだつた。彼女は万事にたいして主張と疑惑とをもつていた。やたらに氣むずかしいことを言い、頑固がんこで傲慢ごうまんであつて、何物をも理解しようとはしなかつた——理解することができなかつた。實際何にもわからないといふことが、どうしても承知できなかつた。もし彼女が、その欠点と美点とをもつてただ生地きじのまま満足していたなら、彼はさらにいかほどかよく愛してやったことだらう！

事実彼女は、考えるということをはほとんど心にかけていなかった。食べ飲み歌い踊り叫び笑い眠ることだけを、心にかけていた。幸福にしていたいと思っていた。そしてそれは、もし成功していたらきわめて結構なことだったろう。元来彼女は、幸福なるために天賦の才をもっていて、大食であり、怠惰であり、淫蕩いんとうであり、クリストフをいやがらせまた面白がらせる無邪気な利己心をそなえていたし、約言すれば、友だちにたいしてではないが、合せにもそれをもつてゐる本人にたいして人生を愉快ならしむるところの、ほとんどあらゆる悪徳をもつていたし——（それになお、幸福な顔つきをしていたが、この幸福な顔つきは、少なくともそれがきれいである以上は、すべて近寄る人たちの上に幸福を光被

するものである)——かくて生存に満足すべき多くの理由がありはしたけれど、しかし満足するだけの知力さえそなえてはいなかった。健康そうな様子をし、あふれるばかりの快活さを有し、猛烈な食欲をそなえ、清新で、陽気で、美しい丈夫なこの娘は、自分の健康を気づかっていた。馬のように大食しながら、身体の弱いことを嘆いていた。あらゆる愚痴をこぼしていた、もう歩けない、もう息がつけない、頭痛がする、足が痛む、眼が痛む、胃が痛む、心が痛む、などと。あらゆるものを恐がり、ばかに迷信家で、どこにでも何かの前兆を認めていた。たとえば食卓では、ナイフ、十字に組合したフォーク、客の数、ひっくり返つてゐる塩入れなどがあつて、災難を避けるために沢山の禁呪まじないをしなければ

ならなかった。散歩をしてると、鳥の数を数え、それがどちらへ飛ぶかをかならず観察した。また心配そうに足下の道をうかがい、もし午前中に蜘蛛くもが通るのを見つけると、非常に悲しがつて、引返したがった。それをむりにつづけて散歩させるには、もう正午過ぎなので前兆は凶から吉へ変つたのだと説き伏せるより外に、なんらの手段もなかった。また夢を気にしていた。彼女はいつも長々とクリストフに夢の話をした。そのちよつとした些事さじを忘れても、幾時間もかかつて思い出そうとした。ただ一つの事柄も彼に聞かせないではおかなかつた。それはまったく荒唐無稽むげいな事柄の連続であつて、おかしな結婚、死人、裁縫女、王侯、滑稽こっけいなまた時には猥褻わいせつな事柄、などが問題になつていた。彼はそれに

耳を傾けなければならぬし、意見を吐かなければならぬ。彼女はその愚にもつかない幻影に、終日つきまとわれてることもしばしばだった。世の中は悪くできてるものだと考え、事物や人々をぶしつけにながめ、やたらに嘆息してクリストフを困らした。そして彼は、自家の陰鬱いんうつな小市民たちのもとをいくら逃げ出しても、やはりここにもまた、永遠の敵たる「陰気な非ギリシヤ的な憂鬱病者」を見出したのである。

そういう不機嫌ふきげんな愚痴の最中に、突然、また快活な様子が騒々しく大袈裟げさに現われてくるのであった。するともう、先刻の苦情と同じく、その快活さにも手のつけようがなかった。理由もないのにいつまでもつづくかと思われるほど大笑いをし、畑の中を駆

けずり回り、狂氣じみた仕業しわざをし、子供のように戯れ、ばかなことをして喜び、土くれや汚きたない物をかきまわし、畜類や蜘蛛くもや蟻ありや蚯蚓みみずなどをいじくり、それをいじめ、害を加え、小鳥を猫ねこに、蚯蚓を鶏に、蜘蛛を蟻に、たがいに食わせ、しかも悪心あつてなすのではなく、あるいはまったく無意識的な加害の本能から、好奇心から、無為退屈な心からであつた。または、倦うむことなき欲求をもつて、くだらないことを言い、なんの意味もない言葉を何十度となく繰り返し、人をいやがらせ、苛いらだ立たせ、じらし、激怒させることもあつた。しかも、だれかが——だれでも構わない——道に姿を現わすと、また嬌きようたい態が始まつた。すぐに彼女は、元氣よく口をきき、笑声をたて、騒さわぎたて、変な表情をし、人目を

引いた。わざとらしい突飛な行動をした。クリストフは今に彼女が真面目らしいことを言い出すだろうと、びくびくしながら予感した。——そして、はたしていつもそのとおりだった。彼女は感傷的になった。しかも他の場合と同じく、こんどもまた法外だった。恐ろしい勢いで感情をぶちまけた。クリストフはそれに悩まされて、なぐりつけたかった。彼が彼女に何よりも最も許しがたかったことは、誠実でないということだった。誠実というのは、知力や美貌と同じくらいめつたにない賦性で、万人にそれを要求するのは無理であるということを、彼はまだ知らなかった。彼は虚言を忍ぶことができなかつた。しかもアーダは彼にひどく嘘をついた。明らかな事実が現われていても、平気でたえず嘘をつい

た。彼に不快を与えた事柄を——彼の氣に入つた事柄をも——すぐに忘れてしまふ驚くべき容易さを、その時々々の調子に任して生活してゐる女が一般に有する忘却の容易さを、彼女はもつていた。

そして、それにもかかわらず二人は愛し合つていた。たがいに心から愛し合つていた。アーダも愛にかけては、クリストフと同様に誠実だった。その愛は精神の同感の上に立つてはいなかったが、それでもやはり真実のものだった。下等な情熱とはなんらの共通点ももつてはいなかった。青春の美しい愛であつた。いかに肉感的なものではあつたが、卑俗なものではなかった。なぜならその中ではすべてが若々しかつたから。率直でほとんど清廉で、快樂の燃えたつ清純さに洗われた愛だった。アーダはなかなかク

リストフほど初心うぶではなかったとは言え、まだ青春の心と身体とのりっぱな特権をもっていた。その感覚の清新さは、小川のように清澄はつらつ澆はつらつ澆はつらつとして、ほとんど純潔の感を与え、何物にも妨げられることがなかった。彼女は普通の生活においては利己的で平凡で不誠実であったが、愛のために、素朴そぼくに真実にほとんど善良にさえなっていた。他人のために自己を忘れることにおいて見出される喜びを、彼女は理解するほどになつていた。クリストフはその様子をうれしげにながめた。すると、彼女のために死んでも惜しくないような気がした。愛する魂はその愛のうちに、いかにかしなしかも痛切な欺瞞ぎまんをもちきたすことであるか！ 恋人にありがちな幻は、クリストフのうちにあっては、あらゆる芸術家に

固有な幻想力によつてさらに強調されていた。アーダの一つの微笑も、彼にとつては深い意義をもつていた。やさしい一言も、その心の善良さの証拠であつた。彼は宇宙にあるあらゆるみごとなものを、彼女のうちにおいて愛していた。彼は彼女を、おのれの自我、おのれの魂、おのれの存在、と呼んでいた。二人はいつしよに愛情のあまり涙を流した。

二人を結びつけてるものは、ただ快樂ばかりではなかつた。追想と夢想との得も言えぬ詩趣であつた。がその追想と夢想とは、彼ら二人のものだつたらうか、あるいはまた、彼ら以前に愛していた人々、彼ら以前に……彼らのうちに……存在していた人々、そういう人たちのものだつたらうか？……二人はたがいにそれと

言わずに、おそらくはそれと知らずに、心のうちにいだいていた、林の中で出会った最初の瞬間の幻影を、いつしよに過した最初の日々と夜々との幻影を、たがいに腕のなかにいだかれ合い、身動きせず、考えもせず、愛と無言の喜悦との奔流に浸つて、うとうととしたそれらの眠りを。ちよつと触れてもすでに人知れず顔色が変わり一身が快感のうちに溶け去つてゆくほどの、突然の追憶、種々の事象、隠密な考えなどが、みつばち蜜蜂のような羽音を立てて二人を取り巻いていた。燃えたつやさしい光。心はあまりに大きな楽しさに圧倒されて、ぼうぜん惘然となり黙り込んでゆく。春の初光のうち震える大地の沈黙、熱つぽいものう懶さ、けだるい微笑……。若々しい二つの身体の清新な愛は、四月の朝である。それは露のよう

に過ぎてゆく。心の若さは、太陽の朝ちようさん餐さんである。

クリストフとアーダとの恋愛関係をますます密接ならしめたものは、ことに彼らに対する世間の批評であつた。

二人が最初に出会つたその翌日から、近くの人々は皆それを知つた。アーダは少しもその情事を隠そうとしなかつた。むしろ彼を手に入れたことを自慢にしたがつていた。クリストフはもつと内密にしたがつていたが、しかし人々の好奇心につきまとわれてるのを感じた。そしてアーダの前を逃げようとする様子をしたくなかつたので、わざと彼女といつしよのところを見せつけていた。小さな町じゆうにぱつと噂うわさがたつた。クリストフの管弦楽団の仲

間は、彼にちようしよ嘲笑しよ的なお世辞を述べた。彼は自分のことに他人が干渉するのを許し得なかつたので、返辞もしなかつた。官邸でも、彼の不品行が非難された。中流市民らは、彼の行いをきびしく批評した。彼は数軒の音楽教授の口を失つた。また他の家では、それ以来母親たちは、あたかもクリストフが大事な娘を奪おうと思つてでもいるかのように、疑い深い様子をして、娘の稽古けいこに立ち合わなければいけないと考えた。令嬢たちは何にも知らないことと見なされていた。しかし、もとより彼女らはすっかり知つていた。そして、クリストフは趣味を解しないとして冷遇しながら、もつと詳しいことを非常に知りたがつていた。クリストフの評判がいいのは、小さな商人や店員などの間ばかりだった。しかしそ

れも長つづきはしなかった。彼は一方の悪評にたいするのと同じく、他方の好評にたいしても腹をたてていた。そして悪評の方はなんともしようがなかったので、称賛の方がつづかないような策をとり、しかもそれはさほど困難なことではなかった。彼は世間一般の無遠慮を憤っていた。

彼にたいして最も激昂げつこうしたのは、ユスツス・オイレルとフォーゲル一家だった。クリストフの不品行は、直接身に受けた侮辱のように彼らには思われた。それでも彼らは、なんら真面目まじめな計画を彼の上にすえてるのでもなかった。彼らは——ことにフォーゲル夫人は——芸術家気質なるものを軽蔑けいべつしていた。しかし彼らは、元来苦労性の精神をもっていたし、運命に苦しめられてると

信じがちな精神をもっていたので、クリストフとローザとの結婚が実現されそうもないことがいよいよ確かになると、その結婚に執着していたのだとみずから思い込んだ。そしてそこに例の不運の一つの兆^{しるし}を見てとったのである。もし運命が彼らの違算の責を帯びるものとするならば、理論上クリストフには責任がないはずだった。しかしフォーゲル一家の者の理論は、苦情を言うべき理由を最も多く見出し得させるような理論であった。それで彼らは、クリストフが不品行をするのも、単に彼一個の楽しみのためばかりではなく、また自分らを侮辱せんがためにである、と判断した。そのうえ彼らは、不品行そのものをも忌みきらった。彼らはきわめて信仰深く、道徳心強く、家庭的の徳義心に厚かったので、そ

ういう人たちの例として、彼らの考えによれば、肉欲の罪は最も恥すべきものであり最も重大なものであり、また唯一の恐るべきものであるから唯一の罪とも言えるのであった。——（相当の者なら決して窃盗や殺害の心は起こすものでないということは、あまりに明らかなことだった。）——それでクリストフは徹頭徹尾正しからぬ者だと彼らには思われた。彼らは彼にたいする態度を変えた。彼が通りかかると、冷酷な顔つきをして横を向いた。クリストフの方では、彼らと話をしたくも思つてはいなかつたので、それらの澄し込んだ様子を見るごとに肩をそびやかした。アマリアは彼を軽蔑して避けるようなふうをしながらも、心にたまつてることを言つてやるために、しきりに彼と接する機会を作りたが

っていたが、彼はその無礼な仕打ちをも見ないふりをしていた。

クリストフが心打たれたのは、ただローザの態度だけであつた。この少女は家族のだれよりもいつそうきびしく彼を非難した。それは、クリストフの新しい恋が、彼から自分が愛される機会を、まったく破壊してしまうように思われるからではなかつた。彼女はそういう機会が一つもないことを知っていた——（やはりつづけて希望はかけていたろうけれど。……彼女は永久に希望をかけているだろう！）——しかし彼女は、クリストフを偶像視していた。しかるにその偶像がこわれかけたのである。それは最もつらい苦痛だつた……彼女の純潔な心のうちでは、彼から蔑視べっしされることよりも、さらに残忍な苦痛だつた。彼女は清教徒的なやり方

で、偏狭な道德のうち育てられ、その道德を熱心に信じていたので、クリストフについて聞き知った事柄は、ただに彼女を悲しませたばかりでなく、また嫌悪けんおの情さえも起こさせた。彼がザビ―ネを愛してる時から、彼女はすでに苦しんでいた。その自分の崇拜者にたいする幻影を、すでに幾いくばく何か失いかけた。クリストフがかくも凡ほんよう庸な魂を愛するということは、不可解なまたあまり名誉でないことのように彼女には思われた。しかし少なくともその愛は純粹であつて、かつザビ―ネはそれに相当し得ないでもなかつた。最後に死が通り過ぎて、すべてを清めたのであつた：∴。しかしすぐそのあとで、クリストフが他の女を愛そうとは――しかもいかなる女か！――それは卑しいことであり、嫌悪すべ

きことだった！ 彼女は彼に対抗して、死んだ女を庇護ひごするようになった。その女を忘れたことを、彼に許し得なかつた。……が嗚呼ああ、彼は彼女よりもなおいつそうそのことを考えていたのである！ しかし彼女は、熱烈な心の中に二つの感情を同時にいれ得る余地があろうとは、夢にも思わなかつた。現在を犠牲にしなれば過去に忠実であり得ないものだ、と、信じていた。清くて冷やかな彼女は、人生についてもまたクリストフについても、なんらの觀念をも得ていなかつた。すべてが彼女自身と同じように、純粹で狭小で義務に服従していなければいけないように思われた。彼女は心身ともすべてにおいて謙讓であつて、ただ一つの誇りをしかもつていなかつた。それは純潔の誇りだつた。そして自分に

ついてもまた他人についても、それを要求していた。クリストフがかくまで墮落したことを、彼女は許してやり得なかつたし、永久に許してやり得なかつたであろう。

クリストフは彼女に、弁解するつもりではないとしても、とにかく話をしようとしてとつとめた。——（純潔無邪気な娘に何を言い得ることがあつたらう？）——ただ、自分は彼女の友であること、彼女の尊重を切望してること、自分はまだそれを受けるに足りること、などを彼女に確信さしてやりたかつた。しかしローザはいかめしく口をつぐんで、彼を避けていた。彼は彼女から軽蔑されてることを感じた。

彼はそれを苦しみまた憤つた。自分はその軽蔑けいべつに相当する者

でない、という自覚があった。それでも彼はついに狼狽ろうばいしてしまつた。自分に罪があると考えた。そして最も苦々しい非難を、ザビーネのことを考えながら、みずから自分に浴せた。彼はみずから自分を苦しめた。

「嗚呼ああ、どうしてこんなはずがあるだろうか？ どうして私はこんなのか？……」

しかし彼は自分を押し流す流れに抵抗することができなかつた。彼は人生は罪悪的なものだと考えた。そして人生を見ないで生きるために眼を閉じた。それほど、生きたく、愛したく、幸福でありたかつた。……確かに、彼の愛のうちにはなんら軽蔑けいべつすべきものはなかつた。アーダを愛するのは、賢明でなく伶俐れいりでなくた

いして幸福でさえないかもしれないと、彼はよく知っていた。しかしなんの賤いやしい点があつたらうか？ たとい——（彼は信じま
いとつとめていたが）——アーダには大して精神的価値がなかつ
たと仮定しても、彼女にたいする彼の愛は、何によつてそれだけ
純潔の度が少ないと言えたであらうか？ 愛は愛する者のうちに
あるので、愛される者のうちにあるのではない。純潔な者にあつ
ては、すべてが純潔だ。強壯な者や健全な者にあつては、すべて
が純潔だ。愛は、ある種の小鳥をその最も美しい色彩で飾りたて
るものであり、正直な魂から、その最も高尚なものを引出してく
る。愛人にふさわしくないものは何一つ示したくないという欲求
から、人はもはや、愛が刻んだ美しい像に調和する思想や行為に

しか、喜びを見出さなくなる。そして魂が浴する青春の泉は、力と喜悦との潔きよい光輝は、麗わしくかつ有益であつて、人の心をまします偉大ならしむるものである。

知友たちから誤解されてることは、彼の心に憂苦を満さした。しかし最も重大な憂苦は母親までが心配し始めたことであつた。

この善良な婦人は、フォーゲル一家の偏狭な主義を共に奉じてはいながつた。彼女はあまり目近に眞の悲しみを見てきたので、他の悲しみを想像し出そうとはしなかつた。自分を卑下し、生活に困こんぱい憊し、生活からたいした喜びも受けず、生活に喜びを求め、成行のままにあきらめ、事変を理解しようともつとめないで、他人を批判し非難することを慎しんでいた。

自分にはその権利がないと信じていた。自分をきわめて愚かだと考えて、他人が自分と同じように考えないから間違つてるとは見なさなかつた。自分の道徳と信念との一徹な規則を他人にも押しつけようとすることは、彼女には笑うべきことのように思われた。そのうえ、彼女の道徳と信念とは、すべて本能的なものであつた。自分一身に關しては敬けいけん虔けんで純潔であつた彼女は、ある種の欠点にたいする下層の人々の寛大さをもつて、他人の行いには眼をつぶっていた。かつて舅しゅうとのジャン・ミシェルが彼女にたいしてだいていた不満の一つも、そういう点にあつた。彼女は尊むべき人々とそうでない人々との間に、充分の区別をつけていなかった。相当の婦人なら知らないふりをすべきであるような、付近で評判

のあだつぽい娘らにも、往来や市場なんかで、立止つて親しく握手をしたり話しかけたりすることを、平気でやっていた。善悪を区別することは、罰したり許したりすることは、これを神にうち任していた。彼女が他人に求めるところは、たがいに生活を気楽ならしむるためにごく必要な、多少のやさしい同情ばかりであった。親切でさえあれば、というのが彼女にとっては肝要なことだった。

しかしフォーゲル家に住んで以来、彼女は皆から変化されつつあった。当時彼女はがっかりして反抗するだけの力がなかつただけになおさら、一家の誹謗的ひぼうな精神は容易に彼女を餌食えじきにしてしまった。アマリアが彼女を奪い取った。朝から晩まで、二人いつ

しよに仕事をし、アマリア一人口をききながら、ずっと差向いでいるうちに、受身で圧倒されがちなルイザは、知らず知らずのうち、すべてを判断し批評するような習慣になってしまった。フオーゲル夫人はクリストフの行状にたいする自分の考えを、彼女に言わないではおかなかつた。ルイザの平気なのが癪しやくにさわつていた。自分たち一家の者が憤慨してゐる事柄をルイザがいつこう気にも留めないのは、不都合なことだと考えていた。彼女の心をすつかり乱させることができないうのを、不満に思つていた。クリストフはそれに気がついた。ルイザは思い切つて彼をとがめることができなかつた。しかし毎日、小心な不安な執拗しつような意見がくり返された。彼が苛立いらだつて乱暴な返辞をすると、もう彼女はなんと

も言わなかつた。しかしその眼にはやはり心痛の色があるのを、彼は読みとつた。家にもどつてきて、彼女が泣いてたことに気づくことも時々あつた。彼は母の性質をよく知つていたので、そういう心配は彼女自身の心から出たものでないことを確信した。――そしてどこからその心配が来るかを知つた。

彼はそれを片付けてしまおうと決心した。ある晩、ルイザは涙を押しきれなくなつて、食事の最中に立上つた。クリストフはその悲しみの種を聞く隙ひまもなかつた。彼は大跨おおまたに階段をまたぎ降り、フォーゲル一家のもとに押しかけていった。彼は憤りに燃えたつていた。母にたいするフォーゲル夫人の振舞を怒つてるばかりではなかつた。ローザを煽せんどう動して敵意をもたせたこと、ザビ

ーネを中傷したこと、その他数か月来しいて我慢してきた数々のこと、その仕返しをしてやらなければならなかった。彼は数か月以来、積り積った恨みの荷を背負っていて、それを早くおろしてしまおうとした。

彼はフォーゲル夫人の室に飛び込んだ。そして、しずめようとしてみなお激怒に震える声で、母にどんなことをいつてあんなふうにならせたのかと詰問した。

アマリアはそれを非常に悪くとつた。自分の勝手なことを言つたまでであると答え、自分の行いをだれにも報告する必要はない——まして彼に報告する必要はない、と答えた。そして日ごろ用意していた言葉を言つてやるために、その機会に乗じてつけ加え

た、もしルイザが悲しんでるなら、その理由は彼自身の行状以外に捜すに及ばない、彼の行状は、彼自身にとっては恥辱であり、他のすべての人にとっては醜怪事であると。

クリストフが攻撃を始めるには、向うからの一つの攻撃で充分だった。彼は激昂げつこうして叫んだ、自分の行状は自分だけに関するものであること、自分の行状がフォーゲル夫人の気に入ろうが入るまいが、そんなことはいっこう構わないこと、もし不平を言いたければ、自分に向って言ってもらいたいこと、言いたいことはなんでも自分に向って言えるはずだということ、言われたって自分は雨が落ちかかったほどにも思わないということ、しかし自分は断じて禁ずる——（よく聞くがいい）——何一つ母に言うのを禁

ずるといふこと、そして、病身の年老いた憐あわれな女を攻撃するのは、卑劣な仕業しわざだといふこと。

フォーゲル夫人は大声をたてた。かつてだれからも、そんな調子で物を言われたことがなかった。小僧っ子から——しかも自分の家で——説論を受けるものかと彼女は言つた。そして彼を侮辱的な態度で取扱つた。

喧嘩けんかの声を聞きつけて、他の人たちもやって来た——ただフォーゲルを除いて。フォーゲルは自分の健康の害になるようなことはいつも避けていたのである。オイレル老人は、立腹してるアマリアから介添人に立てられて、将来は意見や訪問は差控えてもらいたいとクリストフにきびしく頼んだ。自分たちは彼の助言をま

たずともなすべきことを知っており、義務を果しており、常に義務を果すだろう、と言った。

クリストフは出て行くと言い、もう二度と足を踏み入れるものと公言した。けれども彼は、自分にとっては直接身の敵となつてゐる例の「義務」について、心ゆくまで彼らに言つてやらない。うちは、決して出て行かなかつた。そんな「義務」を云々うんぬんするならば、自分はむしろ悪徳の方を好むだろう、と彼は言つた。フオーゲル一家のような人たちこそ、しきりに善を不愉快なものにしなから、善をみだすものであつた。彼らとの対照によつてこそ人は、不徳義ではあつてもしかし愛想のいいにこやかな人たちに、誘惑を感じるのであつた。ついには生活を陰鬱いんうつにし害毒するほ

どの堅苦しい横柄な厳格さで、つまらない雑役や取るに足らぬ行
いなど、すべてに、義務という言葉を通用するのは、かえって義
務の名を流けがすものである。義務は特殊なものである。実際の献身
の場合のために、それは保留しておかなければいけない。自分の
不ふ機き嫌げんや、他人を不快がらせようとする欲望などを、義務の名で
覆おおつてはいけない。自分が愚かにもまたは不面目にも陰気だから
と言って、すべての人が陰気であるようにと願ひ、すべての人に
自分の不具な撰生法を強いんとするのは、理由のないことである。
美德のうちで第一のものは、喜悅である。美德は、幸福な自由な
こだわりのない顔つきをしていなければいけない。善をなす者は、
みずから自身を喜ばせなければいけない。しかるに、フォーゲル

一家のいわゆる常住不断の義務、小学校教師みたいな压制、やましい口調、役にもたたない議論、不快な幼稚な理屈、喧騒けんそう、優雅の欠乏、あらゆる魅力と礼節と沈黙とを欠いた生活、生存をいび萎微させるようなものなんでも取上げる浅薄な悲観思想、他人を理解するよりも軽蔑けいべつする方を易やすしとする傲慢ごうまんな非理知、すべてそれらの、偉大さも幸福も美もない凡俗な道徳、それは実に醜悪な有害なものである。それは実に、美德よりも悪徳の方に、いつそう人間的な観を与えさせるものである。

そういうふうにはクリストフは考えていた。そして自分を傷つけた者を傷つけ返してやりたいという欲求に駆られて、自分も相手の人たちと同様に間違つてるといふことには気づかなかつた。

もちろんこの憐あわれな人たちは、ほとんど彼の觀察どおりであった。しかしそれは彼らの罪ではなかった。彼らの顔つきや態度や思想を不愛想ならしめてしまった、不愛想な生活の罪であった。彼らは悲惨から——一挙に落ちかかって人を殺すかあるいは鍛えるかする大悲慘からではなく——たえずくり返される不運、最初の日から最後の日に至るまで一滴ずつ落ちてくる小さな悲惨から、変化されてしまっていた……。なんと悲しむべきことであるか！

なぜなら、それらの粗硬な表皮の下には、方正や善良や無言の勇氣など、いかに多くの宝がたくわえられていたことだろう！……

：一民衆の力が、未来の活気が！

クリストフが義務は特殊なものだと信じたのは、誤りではなかつた。しかし恋愛もやはり特殊なものである。すべてが特殊である。何かに価するすべてのものは皆——悪でさえもやはり（悪にも価値がある）——常習ということより以上の敵を有しない。魂の致命的な敵は、毎日の消耗である。

アーダは倦怠けんたいし始めていた。クリストフの性質のように豊富な性質の中で、自分の愛を更新してゆくには、彼女は充分の知力をそなえていなかった。彼女の官能と浮華的な精神とは、およそ見出し得るかぎりの快樂を愛から引出してしまっていた。もはや愛を破壊する快樂しか残ってはいなかった。彼女は一種のひそかな本能をもっていた。それは多くの女に、善良な女にも、また多

くの男に、れいり 伶俐な男にも、共通な本能であつて、この本能をそなえた男女は、仕事もせず、子供もこしらえず、活動もせず——いかなることをも、生活をもせず——しかも、あまりに多くの活力をもっているのです、おのれの無用さを堪え忍ぶこともできないのである。彼らは他人も自分らと同じく無用ならんことを望み、他人をそうなささんためにできるだけつとめる。時とすると我知らずそうしていることもあつて、その悪の欲求にみずから氣づくこと、憤然としてそれをしりぞける。しかし多くは、その欲求を守り育てる。そして各自の力に従つて——ある者は、わずかな親しい仲間内だけでひそかに——ある者は、広く公衆にたいして大規模に——すべて生を有するもの、生を欲するもの、生に価するものを、

ことごとく破壊しつくそうとつとめる。偉人や偉大な思想などを、おのれと同じ水準に引下げようと熱中する批評家、恋人を卑いやしくすることを喜ぶ娘、この二つは同種類の有害な二匹の畜生である。——ただ後者の方がいくらかかわいい。

アーダはクリストフをやりこめるために、彼を多少墮落させたかったであろう。が事実彼女は、力をもっていなかった。他人を墮落させるについても、もつと知力が必要であった。彼女はそれを感じていた。そして自分の愛がクリストフを害することができないのは、彼女が彼にたいして隠しもってる大きな不平の一つだった。彼女は彼を害しようとして望んでるとはみずから認めていなかった。もしできてもおそろくはしなかったであろう。しかしそれ

を自分の力でできないということが、癩しやくにさわるように思われるのだった。愛してくれる男を善化しあるいは悪化する力が自分にあるという幻を、女に与えてやらないのは、愛の不足を示すものである。ぜひともそれを実際にためしてみようという心を、女に起こさせるものである。クリストフはそれを用心していなかった。ある時アーダは戯れに尋ねた。

「私のためになら音楽を捨ててくださって？」（もちろん彼女はそれを少しも願ってはいなかった。）

すると彼は直ちよくせつ截せつに答えた。

「おうそんなことは、たといお前にしろ、だれにしろ、できるものかね。僕はどこまでも音楽をやるつもりだ。」

「それであんたは私を愛してるというの？」と彼女はむっとして叫んだ。

この音楽というものを、彼女は憎んでいた——自分に少しもわからないだけになおさら、そしてまた、この眼に見えない敵を害してクリストフの熱情を傷つけるべき妙策を見出し得ないだけになおさら、それを憎んでいた。いかに彼女が軽蔑けいべつの調子で音楽のことを語り、クリストフの作曲を軽視しようとも、彼はただ大笑いをするだけだった。アーダは激昂げつこうしながらも口をつぐまざるを得なかった。なぜなら、自分の滑稽こっけいなことがわかっていたから。

しかしながら、この方面ではなんともしかたがなかったとは言

え、彼女はクリストフのうちに、いつそうたやすく急所を刺し得る他の弱点を見出していた。それは彼の道徳的信念であつた。クリストフはフォーゲル一家との喧嘩けんかにもかかわらず、青春期の熱狂にもかかわらず、本能的な貞節さを、純潔の要求を、まだ心にもつていた。彼はそれを意識してはいなかつたが、しかしそれがアーダのような女を、最初は驚かしひきつけ魅惑し、次には面白がらせ、次には苛立いらだたせ、次には憎悪の念をいだくまでに激させるのだつた。彼女はその点を正面から攻撃しはしなかつた。彼女は奸かん佞ねいな尋ね方をした。

「あんたは私を愛してくださるの？」

「愛するとも！」

「どれくらい愛してくださるの？」

「できるかぎり。」

「それじゃ充分でないわよ……そうよ……私にはどんなことをしてくだすって？」

「なんでも望みどおりに。」

「悪いことでもしてくだすって？」

「おかしな愛し方だね。」

「それとは別問題よ。してくだすって？」

「そんな必要はありやしない。」

「でも私がそれを望んだら？」

「お前が間違ってるんだ。」

「かもしれないわ……で、してくださいって？」

彼は彼女を接吻せつぶんしようとした。しかし彼女は押しつけた。

「悪いことでもしてくださいさるの、どうなの？」

「厭いやだよ。」

彼女は怒おこって背中を向けた。

「あんたは愛していないのね。愛するとはどういうことだか知らないんだわ。」

「そうかもしれない。」と彼は人のいい様子で言った。

情熱に駆られた瞬間には、人と同じように馬鹿なことでも、おそらくは悪いことでも、またそれ以上のことでも——わかったもんじゃない——自分はやりかねないと、彼はよく知っていた。し

かし冷静にそれを自慢するのは恥ずべきことだと思い、アーダにそれを明言するのは危険だと思った。本能的に彼は、相手の女が自分を監視し、わずかな言葉をも注意してるのを、感じていた。不利な尻尾しっぽを押えられるようなことをしたくなかった。

なお幾度も、彼女は攻撃してきた。彼女は尋ねた。

「あんたが私を愛してくださいるのは、ほんとに私を愛してるからなの、または私があんたを愛してるからなの？」

「お前を愛してるからだ。」

「では、私があんたを愛さなくとも、やはり私を愛してくださいさるの？」

「ああ。」

「そして、もし私が他の人^{ほか}を愛しても、やはり私を愛してくださいませんか？」

「さあ、それは僕にはわからない……そうは思えない……がいずれにしても、お前は、僕が愛すると言う最後の女だろう。」

「でも何か今と変ることがあつて？」

「沢山ある。僕もたぶん変わるだろう、お前もきつと変つてくる。」

「私が変わったら、どうなるの？」

「たいへんなことになるさ。僕は今のままお前を愛してるんだ。」

もしお前がまったく別な者になったら、僕はもうお前を愛するかどうか受け合えない。」

「あんたは愛していないのよ、愛していないのよ！ そんなへり

くつが何になって！ 愛するか愛しないか、どっちかだわ。もしあんたが私を愛しているんなら、私が何をしようと、いつでも変らず、そのまま私を愛してくださるはずだわ。」

「それは畜生のような愛し方だ。」

「私はそういうふうに愛してもらいたいよ。」

「それじゃお前は人を見違えたんだ、」と彼は戯れて言った、

「僕はお前が求めるような者じゃない。そんなことは、僕にはしようにってできやしない。それにまた僕はしようとも思わない。」

「あんたは利口なのをたいそう御自慢ね。私よりも自分の知恵の方を余計愛しているんだわ。」

「僕はお前を愛してるんだ、ひどいことを言う奴やつだね、お前が自

分の身を愛してるよりもっと深くお前を愛してるんだ。お前が美しくって善良であればあるほど、ますます僕はお前を愛するんだ。
」。

「まるで学校の先生みたいね。」と彼女はむっつとして言った。

「だってさ、僕は美しいものが好きなんだ。醜いものはきらいだ。
」。

「私のうちにあっても？」

「お前のうちにあるとことにそうだ。」

彼女は荒々しく足をふみ鳴した。

「私は批評されたかありません。」

「それじゃ、僕がお前をどう思ってるか、そしてどんなに愛して

るか、それを不平言うがいいよ。」と彼は彼女の心を和らげるためにやさしく言った。

彼女は彼の腕に抱かれるままになって、微笑みほほえをさえ浮かべ、彼に接吻せつぶんを許した。しかしやがて、もう忘れたころだと彼が思つてる時に、彼女は不安そうに尋ねた。

「あんたは私のどういふところを醜いと思つてるの？」

彼は用心してそれを彼女に言わなかつた。卑怯ひきょうな答えをした。「何にも醜いと思つてる所はない。」

彼女はちよつと考え、微笑み、そして言った。

「ねえ、クリストフ、あんたは嘘うそはきらいだと言つたわね。」

「軽蔑けいべつしてるよ。」

「道理もつともだわ、」と彼女は言った、「私も軽蔑しててよ。それに、私は安心だわ、決して嘘をつかないから。」

彼はその顔をながめた。彼女は本気で言ってるのだった。その無自覚さが彼の心をくつろがした。「ではね、」と彼女は彼の頸くびに両腕を巻きつけながらつぶけて言った、「もし私が他の人を愛したら、そしてあなたにそう言ったら、なぜあなたは私を恨むの？」

「よしてくれよ、僕をいつも苦しめるのを。」

「あなたを苦しめるんじゃないわ。他の人を愛していると私は言ってるんじゃないのよ、愛してはいないとさえ言ってるわ。……でもこれから先、もし愛したら……？」

「まあ、そんなことは考えないでしょうや。」

「私は考えたいのよ。……あんたは私を恨まないの？ 私を恨むことができないの？」

「僕は恨まないだろう、お前と別れるだろう。それつきりだ。」

「別れる？ どうしてなの？ 私がまだあんたを愛していても……」

「他の男を愛しながら？」

「むろんよ。そんなことはよくあるわ。」

「なに、僕たちにはそんなことが起こるものか。」

「なぜ？」

「なぜって、お前が他の男を愛する時には、もう僕はお前を、ち

つとも、もうちつとも、愛さないだろうからさ。」

「先刻さつきはわからないと言つてたじゃないの。……それごらんさ
い、あんたは私を愛さないんだわ！」

「そうかもしれない。その方がお前のためにはいいよ。」

「というのは？……」

「お前が他の男を愛する時に、もし僕がお前を愛していたら、お前にも、僕にも、またその男にも、始末が悪くなるだろうからさ。」

「そうら！……あんたはもう無茶苦茶よ。では私は、一生しょうがい涯が
あんたといっしょになってなけりやならないもんなの？」

「安心おし、お前は自由だよ。いつでも僕と別れたい時には別れ

るがいいさ。ただ、それは一時の別れじゃなくて、永久のおさらばだ。」

「でも、やはりあんたを愛してるとしたら、この私が。」

「愛し合ってる時には、たがいに一身をささげ合うものなんだ。」
「じゃあ、あんたからささげてちょうだい！」

彼はその利己主義には笑わずにおれなかつた。彼女も笑つた。

「片方だけの献身は、」と彼は言つた、「片恋になるだけだ。」

「そんなことはないわ。両方からの恋になるものよ。もんあんたが私に身をささげてくださるなら、私はもつとあんたを愛してあげるわ。そして、ねえ、御自分の方だつて考えてごらんさい。

自分は身をささげたからといって、どんなに深く私を愛するかし

れないわ、どんなに幸福になるかshれないわ。」

二人は、ちよつと気をそらして意見の真面目まじめな相違を忘れたのに、満足の笑みをもらしていた。

彼は笑顔をして、彼女を見守みまもった。彼女は心の底では、自分で言つてるとおりに、今すぐにクリストフと別れたくは少しもなかつた。彼はしばしば彼女を怒らせ厭がらせはしたが、彼女は彼のような献身がいかに貴とうといかを知っていた。また彼女はだれも他の男を愛してはいなかつた。戯れにあんなことを言つたのは、半ばは、それが彼に不愉快であることを知っていたからであり、半ばは、子供がきたない水の中をかき回して面白がるように、曖昧あいまいな下品な考えをもてあそぶことが愉快だったからである。彼はそ

れを知っていた。別に彼女を憎まなかつた。しかし彼は、それらの不健全な議論に飽き^あ、自分が愛しておりまた恐らく愛されている、その不安定な混濁した性質の女と、暗々裏に行く^{たたか}に飽いていた。彼女のことをみずから欺くためになさなければならぬ努力に、彼は飽いていたし、時には泣きたいほどうんざりしていた。彼は考えた。「なぜ、なぜ彼女はこうなんだろう？　なぜ人間はこうなんだろう？　いかに人生はつまらないものか！……」と同時にまた彼は微笑^{ほほえ}みながらなめた、彼の方をのぞき込んでるきれいな顔を、その青い眼、つややかな色、にこやかで^{じょうぜ}饒舌^{じょうぜつ}で、多少愚かで、ぬれた齒並と舌とのあざやかな輝きを見せて、半ば開いている口を。二人の唇は^{くちびる}ほとんど触れ合っていた。

しかも彼は、遠くから、ごく遠くから、他の世界からのように、彼女をながめていた。見ると、彼女は次第に遠ざかり、霧の中に消えていった……。次にはもう見えなかった。その声も聞こえなかった。彼は一種の快い忘却のうちに陥ってゆき、その中で、音楽のことや、夢想のことや、アーダに無関係な種々のことを考えた。一つの曲調が聞こえてきた。彼は静かに作曲にふけた……。ああ、美しい音楽！……。かくも悲しい、堪えがたいまでに悲しい、しかも親切な、やさしい音楽……。ああなんと快いことか……。これだ、これだ……。他は皆真実のものではなかった……。

彼は腕を揺すられた。一つの声が叫んでいた。

「まあどうしたの？ まったく狂人だわ。どうして私をそんなに

見てるの？　なぜ返辞をしないのよ？」

彼は自分をながめてる眼をまた見出した。だれなのか！……ああそうだ……。——彼はほつと息をした。

彼女は彼を観察していた。彼が何を考えてるか知ろうとつとめていた。彼女には理解ができなかつた。しかしいくらどんなことをしても駄目だだめと感じた。彼をすっかり手にとらえることができなかつた。いつでも彼が逃げ出せる門があつた。彼女はひそかにいらだ苛立だつていた。

「なぜ泣くの？」と彼女は一度、彼が他の世界へのそういう旅からもどつてくる時に尋ねた。

彼は眼に手をやった。眼がぬれてることを知つた。

「僕にはわからない。」と彼は言った。

「なぜ返辞をしないの？ もう三度も同じことを言ったのよ。」

「いったいどういうんだい？」と彼はやさしく尋ねた。

彼女はまた愚にもつかない議論をもち出した。

彼は飽あき飽あきしてる身振りをした。

「ええ、よすわ。」と彼女は言った。「ただ一ひとこと言いだけ！」

そしてますます盛んにやり出した。

クリストフは怒って身体を揺すった。

「そんなにけがらわしい話はよしてくれ！」

「冗談を言ってるのよ。」

「もつとりっぱな話の種を捜しておいでよ。」

「じゃあせめて理由を言つてごらんなさい。なぜそれが気に入らないか言つてごらんなさい。」

「理由があるもんか。なぜ肥料こやしが臭いかには、議論の余地はない。肥料は臭い、ただそれつきりだ。僕は鼻をつまんで逃げ出すばかりさ。」

彼は憤然として立去つた。そして冷たい空気を呼吸しながら、
大^{おお}胯^{また}に歩き回つた。

しかし彼女は、一遍も、二遍も、十遍も、同じことをやりだした。彼の本心をいやがらせ傷つけるようなものなら、なんでも議論のうちに取り入れた。

それはまったく、人をからかつて面白がる神経衰弱症の娘の、

不健全な戯れにすぎないものだど、彼は思っていた。彼は肩をそびやかし、あるいは聞かないふうをした。彼女の言葉を真面目まじめにはとらなかつた。でもやはり、彼女を投げ捨ててしまいたいような気になることもあつた。なぜなら、神経衰弱症と神経衰弱患者とは、最も彼の趣味に合わなかつたからである……。

しかし彼は十分も彼女と離れていれば、もうすっかり不快なことを忘れてしまうのだつた。そして新しい希望と幻影とをいだいて、アーダのところへもどつていった。彼は彼女を愛していた。愛は不斷の信仰の行為である。神が存在しようとするまいと、そんなことはほとんど構わない。信ずるから信ずるのだ。愛するから愛するのだ。多くの理由を要しない！……

クリストフがフォーゲル一家の者と喧嘩してからは、その同じ家に住んでることができなくなったので、ルイザは余儀なく、息子と自分とのために他の住居を捜して引移った。

ある日、クリストフの末弟のエルンストが、ふいに家へ帰って来た。だいぶ前から消息不明になっていたのだった。何かをやるたびごとに、相次いで追い出されて、なんらの職をももっていない。財布は空であり、健康は害されていた。それで彼は、いったん古巣へ立ちもどって、新たに出直すがいいと考えたのだった。

エルンストは、二人の兄とはどちらとも、仲が悪くなかった。

二人からあまり敬重されてはいず、自分でもそれを知っていた。しかしそんなことはどうでもいいことだったので、別に恨みもしなかった。二人もまた彼を憎んではいなかった。憎んでも無駄だったろう。どんなことを言つてやつても、皆彼からすべり落ちて少しも刃が立たなかった。彼は媚こびを含んだ美しい眼で微笑ほほえみ、つとめて悔悟の様子を装い、他のことを考え、首肯し、感謝し、そしてしまいいはいつも、兄のどちらかから金をしぼり取っていた。クリストフは心ならずも、この道化た愛敬者に愛情をいだいていた。彼の顔だちは、クリストフと同じく、否より以上に、父のメルキオルに似ていた。クリストフと同様に背が高く頑がんじょう丈じょうであつて、整つた顔つき、淡懐な様子、澄んだ眼、真直な鼻、にこや

かな口、美しい齒、愛想のいい態度、をもっていた。クリストフは彼を見ると、心が解けてしまつて、前から用意しておいた小言も半分しか言えなかつた。自分と同じ血を分け、少くとも容姿の点では自分の名誉となる、その美しい少年にたいして、クリストフは本来、一種親愛の情を感じていた。悪い奴だとは思つていなかった。それにエルンストは決して馬鹿ではなかつた。教養はなかつたが、才智がないではなかつた。精神的な事柄に興味を覚え得ないでもなかつた。音楽を聞くと愉快を感じていた。兄の音楽を理解してはいなかつたが、それを物珍しそうに聴きいていた。クリストフは身内の者の同情に甘やかされたことがなかつたので、自分の音楽会にときおり弟の姿を見つけると喜んでいた。

しかしエルンストの主な才能は、二人の兄の性質を知りぬいてることと、二人を巧みにあやなすこととであつた。クリストフはエルンストの利己心と冷淡とを知り、エルンストが必要な時にしか母や自分のことを考えないと知つていても、いつもその愛情を含んだ素振りに陥れられて、何事でも拒むことは滅多になかつた。クリストフは彼の方を、も一人の弟のロドルフよりもずっと好んでいた。ロドルフは端正謹直で、事務に勉励し、徳義心が強く、金を求めることもなく、また金を与えることもなく、毎日曜日は几帳面きちようめんに母に会いに来、一時間留つて、自分のことばかりしやべり、勝手な熱を吹き、自分の家やまた自分に関することとはなんでも自慢をし、他人のことは尋ねもせず、また興味も覚えず、

そして時間が鳴ると、義務を果したことに満足して、立去つてゆくのであつた。こんな人物をこそクリストフは我慢ができなかつた。ロドルフが来る時間には、外出するようになつてゐた。ロドルフはクリストフをねたんでいた。彼は藝術家をすべて軽蔑けいべつしてゐて、クリストフの成功を苦々しく思つてゐた。それでも彼は、自分の出入する商人間におけるちよつとした評判を、利用せずにはおこなかつた。しかしかつて、母にもクリストフにも、それを一言ももらしたことがなかつた。クリストフの成功を知らないよくなふうをしてゐた。それに引代え、クリストフに起こつた不快な出来事は、些細ささいなことまでも皆知つてゐた。クリストフはそういう下らなさを軽蔑して、さらに気づかないふうを装つてゐた。

しかし彼がもし知ったら平気でおられなかつたらうことであるが、そして実際思つてもみなかつたことであるが、彼に不利なロドルフの知識の一部分は、エルンストから来たものであつた。この狡猾な少年は、クリストフとロドルフとの違いをよく見分けていた。もちろん、クリストフのすぐれてることはよく認めていたし、彼の廉潔さにたいして多少皮肉な一種の同情さえいだいてるようだった。しかし彼はそれを利用することをばからなかつた。また、ロドルフの悪い感情を軽蔑しながらも、それに卑屈にも乗じていた。その虚栄心や嫉妬心に諛び、その冷遇をおとなしく甘受し、町の醜聞を、ことにクリストフに関する醜聞を、一々告げ知らした——そんな話なら彼はいつでも不思議なほどよく知つて

いた。そして彼はまんまと目的を達した。ロドルフは吝嗇りんしよくに
もかかわらず、クリストフと同様に、エルンストから騙だまし取られ
ていた。

かくてエルンストは、公平に二人を利用し愚弄ぐろうしていた。また
二人とも彼を愛していた。

エルンストは日ごろの狡猾にもかかわらず、母のところへ姿を
現わした時には気の毒な様子をしていた。彼はミュンヘンからや
つて来たのだった。そこで彼は最後の地位を見つけ出したが例の
とおりに追ひ払われてしまった。篠しのつく雨に打たれたり、ど
ことも知れぬ所に臥ふしたりしながら、大半の道程みちのりを歩かなけれ

ばならなかった。泥どろにまみれ、着物は裂け、乞食こじきのようなふうをし、また痛々しい咳せきをしていた。途中で悪い気管支炎にかかったのである。彼がはいって来るのを見ると、ルイザは心転倒してしまい、クリストフは感動して駆け寄った。エルンストは涙もろかったし、その場の効果に乗じないではおかなかつた。そして皆が感情に駆られた。三人ともたがいに抱だき合つて泣いた。

クリストフは自分の室を与えた。寝床をあたためられ、病人はそこに寝かさされたが、もう死にかけてるかと思われた。ルイザとクリストフとは、その枕頭ちんとうにつき添つて、交替に看護をした。医者、薬剤、室内の十分な火、特別の食物、などが必要だった。

その次にはまた、足から頭までの服装みなりを心配してやらなければ

ならなかった。シャツ、靴、服、すっかり新しくしてやらなければならなかった。エルンストはされるままに任していた。ルイザとクリストフとは、その費用を償うために、血の汗を流して働いた。二人はその当座非常に困窮していた。新たに家具を整え、住居は前と同様に不便でありながら借賃が高かったし、クリストフには弟子が減っていたし、費用はかさんでいた。辛うじてやりくりをしてるだけだった。二人はできるかぎりの手段を尽した。もちろんクリストフは、自分よりもよくエルンストを助け得るような身分にあるロドルフに、頼み込むこともできるはずだった。しかし彼はそうしなくなかった。独力で弟を救わなければ名譽にかかわると考えていた。自分に救う責任があると思っていた、兄

としての資格から言つて——またクリストフたるべきゆえんから言つても。彼は恥ずかしさに顔を赤らめながら、二週間前には憤然として拒絶した仕事を——ある富裕な匿名の好事家ふゆうがあつて、楽曲を一つ買い取つて自分の名前で発表したいというのを、その仲介者がクリストフのところところに申込んできたのであつたが、それを、こちらから引受けて頼みに行かなければならなかつた。ルイザは日当で雇われていつて、衣類を繕つくつた。二人ともたがいに犠牲を隠し合つていた。家へもつて帰る金については、嘘うそを言い合つていた。

エルンストは病後に、暖炉のすみにうずくまりながら、ある日、激しい咳の間々に、多少の借金があることをうち明けた。でそれ

も支払われた。だれも彼に小言一つ言わなかつた。病人にたいして、悔悟してもどつて来た放蕩息子ほうとうむすこにたいして、小言をいうのは親切な処置とは言えないのだつたから。そしてエルンストは、かんなん艱難のために人が變つたかと思われた。彼は涙声で過去の過あやまちを述べた。ルイザは彼を抱擁しながら、もうそんなことを考えてくれるなど頼んだ。彼は元來甘えつ子だつた。愛情をぶちまけてはいつも母に取り入っていた。昔クリストフはそれを多少ねたんだものだつた。しかし今では、最も年下で最も弱い子がまた最も愛せられるのを、当然だと思っていた。彼自身も、たいして年齢が違わないにもかかわらず、エルンストを弟というよりもむしろ、ほとんど息子のように見なしていた。エルンストは彼に非常な尊

敬の念を示していた。時には、クリストフが負担してる重荷のこと、金の不自由を忍んでること……などをそれとなく言い出すこともあった。しかしクリストフは言葉をつづけさせなかった。エルスストは卑下したやさしい眼つきで、ただそれを認定するだけにした。彼はクリストフが与える助言に賛成した。健康が回復したら、生活を一変して、真面目まじめに働くつもりでいるらしかった。

彼は回復しかけていた。しかし予後は長かった。その濫用された身体には養生が肝要だと、医者は明言した。それで彼は引きつづいて、母のもとにとどまり、クリストフと床を分ち、兄がかせぎ出してくれるパンや、ルイザが工夫してこしらえてくれるちよつとした御馳走ごちそうを、うまそうに食べていた。立去るなどとは口に

も出さなかつた。ルイザとクリストフも、そのことを彼に言わなかつた。彼らは、かわいい息子むすこを、かわいい弟を、見出してたいへんうれしがっていた。

クリストフはエルンストと長い夜々をいっしょに過してゐるうちに、次第に親しい話をもするようになった。彼はだれかに心の中をうち明けたがつていた。エルンストは伶俐れいりだつた。機敏な頭をもつていて、半分聞けば全体を悟つた。彼と話すのは愉快だつた。けれどもクリストフは、最も心にかかつてゐることは、自分の恋愛のことは、一言も言い出し得なかつた。一種の羞恥しゆうち心に引止められた。エルンストはすっかり知つていたが、それを少しも外に表わさなかつた。

ある日、すっかり全快したエルンストは、快晴の午後に乗じて、ライン河のほとりをぶらついた。町から少し外へ出て、ある騒々しい飲食店の前を通りかかると、ちょうど日曜のこととて、多くの人がやって来て踊ったり飲んだりしていたが、その中に、大騒ぎをしてるアーダやミルハといっしよに食卓についてる、クリストフの姿が見えた。クリストフも彼の姿を見て、顔を赤らめた。エルンストは慎み深いふうをして、クリストフに近寄らずに通り返した。

クリストフはその出会にたいへん困った。そのために、いかなる連中に自分が立ち交ってるかが、さらに強く感じられた。そういうところを弟に見られたのが、心苦しかった。なぜなら、以後

はエルンストの品行を批判する権利を失ったばかりでなく、また、兄としての義務について、きわめて高い、きわめて素朴な、多少旧弊な、そして多くの人には滑稽こっけいに思われるかもしれないほどの、一つの観念をもっていたからである。自分のようにその義務を欠くと、自分自身の眼にもみずから墮落することになると、彼は考えていた。

その晩、いっしよの居室に二人落ち合った時、彼は昼間の出来事をエルンストが暗に言い出してくれるのを待った。しかしエルンストは慎重に口をつぐんで、やはり待っていた。すると、二人とも着物をぬいでるうちに、クリストフは自分の恋愛をうち明けようと決心した。彼はおどおどしてエルンストの方をながめられ

なかつた。そして気恥ずかしさのあまり、ことさらに乱暴な言い方をした。エルンストは少しも助けてくれなかつた。黙つていて、やはり彼の方をながめなかつた。それでも彼の様子を見てとつていた。クリストフの拙劣さや無器用な言葉などがいかに滑稽こっけいであるかを、少しも見落さなかつた。クリストフは思い切つてアーダを名ざすのも、容易ではなかつた。そして彼の描き出すアーダの姿は、あらゆる恋人にどれにでもよくあてはまるようなものだった。でもとにかく彼は自分の恋愛を語つた。そして心に満ちてる情愛の波に次第に我を忘れてきた。愛することはいかにいいことであるか、闇夜やみよのような生活の中でその光明に出会わないうちは、いかに自分は惨めみじであつたか、深い恋愛がなかつたらいかに

人生はつまらないものであるか、そういうことを語った。相手は真面目まじめくさつて耳を傾けていた。程よく返辞をして、少しも尋ねはしなかった。しかし感動したその握手は、クリストフと同様に感じてることを示した。二人は恋愛と人生とに関して意見を交換した。クリストフはいたってよく了解されたことを喜んだ。二人は眠る前に、親しく抱擁しあつた。

クリストフは多くの気がねと遠慮とをもつてではあつたが、自分の恋愛をエルンストにうち明ける習慣になつた。エルンストの慎み深さは彼を安心さしていた。アーダに関する不安をも、彼はそれとなく知らせた。しかし彼はかつて彼女をとがめなかつた。自分自身をとがめていた。そして眼に涙を浮かべながら、アーダ

を失うようなことがあつたらもう生きてはおられないだろうと言つた。

彼はエルンストのことをアーダに話すのも忘れなかつた。そして彼の^{れいり}伶俐と^{びぼう}美貌とをいつもほめた。

エルンストはアーダに紹介してくれとは、クリストフに進んで申し出なかつた。自分の知つてる者はだれもいらないと言いながら、寂しそうに室に閉じこもつて、出かけることを^{がえん}肯じなかつた。クリストフは日曜日に、弟が家に残つてるのに、アーダとなお野外遊歩をつづけてるのを、みずからとがめた。それでも、恋人と二人つきりにならないと苦しかつた。しかし自分の利己主義もやましかつた。そしてエルンストをいっしょに來ないかと誘つた。

紹介は、アーダの室の入口で、階段の上でなされた。エルンストとアーダは丁重に挨拶あいさつをかわした。アーダはいつもつきつきりのミルハを従えて、外に出て来た。ミルハはエルンストを見ると、ちよつと驚きの声をたてた。エルンストは微笑ほほえみ、近寄ってゆき、ミルハに接吻した。ミルハはそれを当然だと思ってるらしかつた。

「なんだ、お前たちは知ってるのかい？」とクリストフは呆気あつけにとられて尋ねた。

「もちろんだわ。」とミルハは笑いながら言った。

「いつから？」

「ずっと前から。」

「そしてお前も知ってたのかい？」とクリストフはアーダに尋ねた。「なぜそう言わなかったんだい？」

「ミルハさんの情いろおとこ人ならみんな私が知ってるだけでも、あんたは思ってるのね。」とアーダは肩をそびやかしながら言った。

ミルハはその情人という言葉尻じりをとらえて、冗談に怒ったふうをした。クリストフはそれ以上何にも知り得なかった。彼は鬱ふさぎ込んだ。エルンストも、ミルハも、アーダも、皆率直さを欠いてるように彼には思えた。それかと言って、実を言えば、彼らになんら嘘をとがむべき点もなかった。しかし、アーダにたいしてはなんの秘密ももたないミルハが、そのことだけを隠しだてして、いようとは、信じがたかったし、エルンストとアーダとが今までた

がいには知らなかったとは、信じがたかった。クリストフは二人の様子をうかがった。二人は平凡な言葉を少しかわしたただけだった。そしてエルンストは散歩の間じゅう、もうミルハにしか取合わなかった。アーダの方でも、クリストフにしか話しかけなかった。彼女は彼にたいして、いつもよりずっと愛想がよかった。

それ以来、エルンストはいつも彼らの仲間に加わった。クリストフは彼を除外したかったが、あえて口には言い出せなかった。弟を遠ざけたいのは、彼を遊び仲間にすることの恥ずかしさ以外に、他に理由があるのでではなかった。クリストフは疑惑をいだいてはしなかった。エルンストはなんら疑惑の種をも与えなかった。ミルハに熱中してゐるらしかった。そしてアーダにたいしては、て

いねいな遠慮を守り、ほとんど不相応な敬意をさえ見せていた。あたかも兄に示す尊敬の一部を、兄の情婦へも移そうとしてるがようだった。アーダはそれを別に怪しまなかつた。そして自分でも同じく用心をしていた。

彼らはいっしょに長い散歩をした。兄弟二人は先に進み、アーダとミルハとは笑いさざめきながら、数歩あとからついて行つた。彼女らはよく道のまん中に立止つては、長い間しゃべり合つた。クリストフとエルンストもまた立止つて、二人を待つた。しまいにクリストフはじれつたくなつて、また歩き出した。しかし二人のおしやべり女を相手にエルンストが談笑してるのを聞くと、不快になつてすぐに振り向いた。彼らが何を言つてるか知りたかつ

た。でも彼らが彼に追いつく時には、もう話はやんでいた。

「みんなでいつも何をたくらんでるんだい？」と彼は尋ねた。

彼らは冗談を言つてそれに答えた。三人はたがいに諜しめし合して
いた。

クリストフはアーダとかなり激しい口論をしたのだつた。その日は朝から二人でぶつぶつ言い合つていた。アーダはそういう場合にはいつも、意趣晴しをするためにたまらない厭いやなふうを見せつけながら、傲慢ごうまんなむつとした様子をするのであつたが、その時は珍しくもそうではなかつた。こんどに限つて彼女は、単にクリストフを無視するようなふうをして、他の二人の連れを相手に

いかにも上機嫌きげんに振舞っていた。心ではその諍いさかいを別に怒つてもいないかのようだった。

これに反してクリストフは、非常に仲直りをしたがっていた。かつてないほど熱中しきっていた。恋愛の恩恵にたいする感謝の情、ばかげた口論で時間を浪費した後悔の念——また理由もない懸念、この恋愛も終りに近づいてるといふ変な気持、そういうものが彼の愛情につけ加わっていた。彼は寂しげにアーダの美しい顔をながめた。アーダは彼の方を少しも見ないようなふうを装って、他の者と笑い戯れていた。その顔は多くのなつかしい思い出を彼のうちに呼び起こさせた。そのあでやかな顔は、時々——

(この時もそうだったが)——多くの温良さといかにも純潔な微

笑とを浮かべることさえあつて、そんな時クリストフは、なぜ二人の間がもつとうまくゆかないのか、なぜ二人は自分たちの幸福を好んで害しているのか、なぜ彼女は輝かしい時間を忘れようとして、自分のうちにもつてる善良な正直なものと背馳はいちしようとして、それらを怪しむのであつた。——二人の愛情の清らかさを、たとい頭の中においてにしろ、濁らしたりよごしたりして、いかなる不思議な満足を彼女は見出しているのか？ クリストフは自分の愛するものを信じたくてたまらなかつた。そしてさらにも一度みずから幻を描こうとつとめた。彼は自分の方が正しくないのみずからとがめ、自分に寛大な心が欠けてることを後悔していた。

彼はアーダに近寄った。話しかけようとつとめた。が彼女はただ二、三言冷やかな言葉を返すきりだった。少しも彼と仲直りしたいと思つてはいなかつたのである。彼はせがんだ。ちよつと他の者から離れて自分の言うことを聞いてくれとその耳にささやいた。彼女はかなり不愛想な様子でついてきた。二人がだいぶわきにそれで、ミルハからもエルンストからも見られない所まで来ると、彼はふいに彼女の手を取り、許しを乞い、林の中の枯葉の上に、彼女の前にひざまずいた。こんなに仲違いしたままではもう生きておれないと彼は言った。もう散歩や麗わしい天気を楽しむこともできない。もう何物も楽しめない。彼女から愛してもらいたいのだった。なるほど彼は、正しくないこともしばしばあり、

乱暴であり嫌味いやみであることもあった。彼は彼女に許しを懇願した。罪は彼の愛そのものにあつたのだ。愛のうちに何か凡庸ほんようなものがあることを、二人のなつかしい過去の思い出にまったくふさわしいものでなければ何物も、堪え忍ぶことができなかつたのだ。彼は過去の思い出を、最初の邂逅かいこうやいっしょに過した初めの日々を、彼女に思い起こさせた。いつも変わらず彼女を愛しているし、永久に愛するだろう、と彼は言った。どうか遠のいてくれるな！

自分にとっては彼女がすべてである……。

アーダは彼の言葉に耳を傾けながら、微笑ほほえみを浮かべ、落着きを失い、ほとんど感動していた。彼女は彼にやさしい眼つきをし、てやった。たがいに愛おこしていてももう怒おこつてはいないと告げる眼つ

きだった。二人は抱擁し合った。そして寄り添いながら、落葉した林の中を歩いて行った。彼女はクリストフをかわいいと思い、彼のやさしい言葉に満足していた。しかし頭にもってる悪い思いつきを捨てはしなかった。でもさすがに躊躇ちゆうちよされ、先刻ほど気が進まなかった。それでもやはり計画どおりを実行した。なぜか？ それをだれが言い得よう……。先刻みずから実行を誓ったからであるか？……そんなことがだれにわかるものか。おそらくは、自分が自由であるということを、恋人に証明してやり、自身に証明してやるために、彼を欺くのがその日はことに面白く思えたのかもしれない。彼女はそれで恋人を失うとは考えていなかった。失いたくはなかった。最も確かに恋人をとらえると

信じていた。

一同は森の中の木立まばらな所に到着した。そこから二つの小道が分れていた。クリストフは一方の道をとった。エルンストは目的の丘の頂へは他方の道の方が早く着けると言い出した。アーダも同じ意見だった。クリストフはたびたび来て道をよく知っていたので、二人が間違つてると主張した。彼らはどちらも譲らなかつた。そしてためしてみようということになった。どちらも自分の方が先に着くと誓った。アーダはエルンストといっしょに出かけた。ミルハはクリストフに従った。彼女は彼の方がほんとうだと信じてるらしいふうをしていた。そして「いつもあれだ」と一言つけ加えた。クリストフは戯れを本気にとっていた。そして

負けるのがきらいだったから、足早に、ミルハが困るくらい早く歩き出した。ミルハはちつとも彼ほど急いではないなかった。

「まあそんなに急ぐことはないわ。」と彼女は例の皮肉な落着いた調子で言った。「私たちが先に着くにきまつてよ。」

彼はある懸念にとらえられた。

「なるほど、」と彼は言った、「少し早く歩きすぎるようだ。冗談じゃない。」

彼は足をゆるめた。

「だが僕は知ってる、」と彼はつづけて言った、「向うでは確かに、先に着くために駆けてるよ。」

ミルハは笑い出した。

「いいえ、心配しなくつてもいいわ！」

彼女は彼の腕にぶら下り、彼にしかと寄り添っていた。クリストフより少し背が低いので、歩きながら、その伶俐な甘えた眼で彼の方を見上げていた。彼女はまったくきれいで誘惑的だった。彼は彼女を見違えたような気がした。彼女くらい変りやすい者はなかった。普通は少し蒼ざめた脹れぼったい顔をしていたが、ちよつとした興奮や、楽しい考えや、あるいは人の機嫌をとりたい心が起こると、それだけでもう、お婆さんじみた様子がなくなり、頬には赤味がさし、眼の下やまわりの眼瞼の皺が消え、眼つきに光を帯び、そして顔立ち全体に、アーダの顔に見られないような青春と活気と機知とが浮かんでくるのだった。クリストフはその

変化に驚いた。彼は眼をそらした。彼女と二人きりなのが少し不安だつた。彼女が煩わしかった。彼は彼女の言つてゐることには耳を傾けず、返辞をせず、あるいはでたらめの返辞をした。そしてアーダのことだけを考へていた——考へたかつた。アーダが先刻見せたやさしい眼のことを思つた。恋しさで胸がいっぱいになつた。清らかな空に細い小枝を伸してゐる林の景色がいかに美しいかを、ミルハは彼に見とれさせたがつていた。……そうだ、すべてが美しかった。雲は散り失せていた。アーダは彼の手にもどつていた。彼は二人の間の氷を砕くことができたのだつた。二人はまた愛し合つていた。もはや一体にすぎなかつた。彼は安堵あんどの息をついた。いかに空気も軽やかだつたことか！ アーダが彼にもど

つてきたのだ……。すべてが彼に彼女のことを思わせた。……。少し
し天氣が湿つぽかった。彼女は寒くはないだろうか？……。美しい
木立に白く水気が凍りついていた。彼女に今それを見せられない
のが残念だ。……。しかし彼は勝負のことを思い出した。そして足
を早めた。道を間違えないように用心した。目的地に着くと、意
気揚々として言った。

「僕たちが先だ！」

彼は愉快そうに帽子を振った。ミルハは微笑みながら彼をなが
めていた。

二人がいる場所は、森の中の長い険しい岩だった。榛といじけ
た小檜こがしとがまわりに茂ってる頂上の高台から見おろすと、木立の

ある斜面や、紫色の靄もやに包まれた樅もみの梢こずえや、青々とした谷間を流れるライン河の長い帯が見えていた。小鳥の声もしなかった。人声もしなかった。そよとの風もなかった。どんよりした太陽の蒼あおしろ
白い光に寒げにあたたまつてる、しみじみと静まり返った冬の一日であつた。遠くには時々、汽車の短い汽笛が谷間に響いていた。クリストフは岩の端に立って、その景色にながめ入った。ミルハはクリストフをうちながめていた。

彼は機嫌きげんのいい様子で彼女の方へ振り向いた。

「どうだい、怠惰なまけもの者たちだなあ、僕が言つてやったとおりだ！
……よし、待つててやれ……。」

彼は亀裂ひびのはいった地面の上に、日向ひなたに寝そべつた。

「そうよ、待ってましよう……。」とミルハは帽子を脱ぎながら言つた。

彼女の口調には、いかにも嘲りあざけ気味がこもっていたので、彼は身を起こして彼女をながめた。

「どうなすつたの？」と彼女は平然として尋ねた。

「今なんと言つたんだい？」

「待ってましようと言つたのよ。あんなに早く私を歩かせるには及ばなかつたでしょう。」

「そうだね。」

彼らはでこぼこした地面の上に、二人とも寝ころんで待つた。

ミルハは低い声である歌を歌つた。クリストフはそのところどころ

ろを口ずさんだ。しかし彼はたえずそれを途切らしては耳を傾けた。

「足音が聞こえるようだ。」

ミルハは歌いつづけていた。

「ちよつと黙っておくれ。」

ミルハは口をつぐんだ。

「いや、なんでもなかった。」

彼女はまた歌い出した。

クリストフはもうじつとしておれなかった。

「道に迷ったのかもしれない。」

「迷ったんですって？ 迷うはずがないわ。エルンストさんはど

の道でも知ってるから。」

おかしな考えがクリストフの頭に浮かんだ。

「向うが先に着いて、僕たちが来ない前にここから出かけたんじゃないかしら。」

ミルハは仰向けに寝そべり、空を見ながら、歌の途中で、狂人のように笑い出し、息もとまるほどだった。クリストフは言い張った。彼らは停車場へもう行ってるに違いないと言って、そこへ降りてゆきたがった。ミルハはとうとう起き上った。

「そんなことをすればかえってはぐれてしまうだけだわ。……停車場のことなんかなんの話もなかったわ。ここで落合うことになつてたんじゃないの。」

彼はまた彼女のそばにすわった。彼女は彼が待ちくたびれてるのを面白がっていた。彼は自分を見守みまもつてる彼女の皮肉な眼つきを感じた。彼は真面目まじめに心配しだした——彼ら二人のために心配しだした。彼らを疑つてはいなかった。彼はまた立上った。林の中にもどつてゆき、彼らを捜し、彼らを呼んでみよう、と言いだした。ミルハはくすりと笑った。彼女はポケットから、針と鋏はさみと糸とを取出していた。そして帽子の羽飾りを、落着き払つて解いたり付けたりしていた。終日でもそこにすわつてるつもりらしかった。

「駄目だめよ、駄目よ、お馬鹿ばかさんね。」と彼女は言った。「もしあの人たちがここへ来るとしても、仕方なしにやって来るんだとは、

「あんたは思わなくって？」

彼ははつとした。彼女の方を振向いた。彼女は彼を見ないで、仕事に気を入れていた。彼はそのそばに寄った。

「ミルハ！」と彼は言った。

「え？」と彼女は仕事をやめずに言った。

彼はひざまずいて、彼女をすぐ近くからながめた。

「ミルハ！」と彼はくり返した。

「なによ？」と彼女は尋ねながら、仕事から眼をあげ、微笑ほほえんで彼をながめた。「どうしたの？」

彼女は彼の狼狽ろうばいした顔つきを見ながら、嘲るような表情をした。

「ミルハ！」と彼は喉のどをひきつらしながら尋ねた、「君の考えを、言ってくれ……。」

彼女は肩をそびやかし、微笑み、そしてまた仕事にかかった。彼は彼女の手を取り、縫ってる帽子を取り上げた。

「こんなことはよしてくれ、よしてくれ、そして僕に言ってくれよ……。」

彼女は彼を正面まともにじっと見た、そして待った。クリストフの唇くちびるの震えてるのが眼についた。

「君は、」と彼はごく低く言った、「エルンストとアーダとが……。」

彼女は微笑んだ。

「もとよりだわ！」

彼は憤激してきつとなつた。

「いや、いや、そんなはずはない！ 君だつてそう思つてるんじゃないだろう。……嘘だ、嘘だ！」

彼女は彼の両肩に手を置いて、笑いこけた。

「あなたは馬鹿ね、ほんとお馬鹿さんだわ。」

彼は激しく彼女を揺すつた。

「笑うなよ。なぜ笑うんだい？ ほんとうだとしたら笑いごとじゃない。君はエルンストを愛してるじゃないか……。」

彼女は笑いつづけた。そして彼を引寄せながら、接吻した。

彼は我れ知らず、接吻を返した。しかし自分の唇くちびるの上に、まだ兄

弟の接吻の熱がさめぬその唇を感じた時、彼はつと身を引き、彼女の顔を少し押し離した。彼は尋ねた。

「君は知ってたのか？ 皆で謀しめし合したのか？」

彼女は笑いながら「そうだ」と言った。

クリストフは声もたてなかった。憤怒ふんぬの身振りもしなかった。

もう息もできないかのように口を開いた。眼を閉じて、両手で胸を押えた。心臓が裂けそうだった。それから地面に横たわり、両手で頭をかかえた。そして子供の時のように、嫌悪けんおと絶望の発作に打たれた。

あまりやさしくなかったミルハも、彼を気の毒に思った。自然と親愛な憐れあわみの情に駆られ、彼の上に身をかかめ、やさしい言

葉をかけ、また、塩剤の壘びんを嗅かがせようとした。しかし彼は彼女をいやがって押しつけ、彼女が怖こわがったほどにわかにならなかつた。彼には復讐ふくしゅうの力も欲求もなかつた。苦悶くもんに引きつった顔で彼女をながめた。

「恥知らずめが、」と彼は絶望の底から言った、「君はどんなひどいことをしてるか、わかつていないんだ……。」

彼女は彼を引止めようとした。しかし彼は、それらの破廉恥な行いや、泥どろのような心の奴やつらや、彼らが自分を陥れようとした不倫な共愛などを、いまいまして唾棄たきしながら、林の間を逃げていった。涙を流し、身を震わし、嫌悪けんおの念にむせびあげていた。彼女を、彼ら皆を、自分自身を、自分の身体を、自分の心を、嫌忌けんき

していた。軽侮の暴風が彼のうちに荒れていた。その暴風は久しい前から準備されたものだ。低級な思想、卑しい妥協、また彼が数か月来住んでいた腐爛空粗な雰囲気ふらん ぶんいきなどにたいして、早晩反動が来るべきであった。しかし愛したい要求は、愛するものに幻をかけた要求は、その危機をできるだけ遅らしていた。それがにわかには破裂した。その方がかえってよかった。空気と峻しゅんれ烈れつな純潔との大風が、氷のごとき朔風さくふうが、毒気を吹き払った。嫌悪の情は一撃のもとに、アーダにたいする恋愛を滅ぼしてしまつた。

アーダはその仕業しわざによつて、クリストフにたいする支配権をいっそう強固にうち建て得ると信じていたが、それはこんどもまた、

愛してくれてる男にたいする粗雑な不理解を証明するばかりだった。けがれた心をつなぎ止める嫉妬しつとの情も、クリストフのような若い驕きょうまん慢な純潔な性情には、ただ反発させるだけだった。しかし彼がことに許し得なかつたことには、断じて許し得なかつたことには、その裏切りの行為はアードにあつては、情熱から来たものではなく、また、女の理性がたいは屈服しがちな不条理下劣な出来心、その一つでもほとんどなかつた。否——彼は今や了解した——それは彼女にあつては、彼を墮落させ、彼を恥ずかしめ、自分に対抗する彼の道徳心や信念を罰し、彼を自分と同じ水平面に低下さし、彼を自分の足下にひざまずかせ、自分の害毒の力をみずから承認しようという、ひそかな欲望であつた。そし

て彼は嫌忌けんきの念をもつてみずから尋ねた、だが多くの者のうちにある汚さんとするこの欲求は——自分や他人のうちの純潔なものを汚さんとするこの欲求は、いったいなんであるのか？——表皮の全面にもはや一点の清い場所も残っていない時初めて幸福を感じ、汚穢おあいの中にころがって快樂を味わう、それらの豚のような魂は！……

アーダはクリストフが自分のもとにもどつてくるのを、二日ばかり待つてみた。それから気をもみだして、甘つたるい手紙を書き送つた。もちろんあの出来事については何にも言及しなかつた。クリストフは返事もよこさなかつた。彼は言葉にも尽せないほどの深い憎悪ぞうおでアーダを憎んでいた。彼は自分の生活から彼女を抹ま

殺^{つさつ}していた。彼にとつてはもはや彼女は存在していなかった。

クリストフはアーダから解放されていた。しかし自分自身から解放されてはいなかった。みずから心をそらそうとつとめ、過去の清浄強健な静安さに帰ろうとつとめても、その甲斐^{かい}がなかった。人は過去にもどり得るものではない。道は進みつづけなければならぬ。いかにふり返つても、眼にはいるのはただ、通り過ぎて来た場所が、かつて宿った家の遠い煙が、記憶の靄^{もや}の中に、地平線に隠れてゆくばかりで、なんの役にもたたない。そして情熱に駆られた数か月くらい、人を昔の魂から遠く引離すものはない。道は急に曲り、景色は変る。自分のあとに残してゆくものに、最

後の別れを告げるようなものである。

クリストフはそれを承認することができなかつた。彼は過去に向つて腕を差出した。昔の孤独な忍諦にんていの魂を復活させようと固執した。しかしその魂はもはや存在していなかつた。情熱がもたらす多くの廢墟はいきよこそ、情熱それ自身よりもずっと危険である。クリストフはもう愛すまいとし、恋愛を——しばらくの間——輕蔑いべつしようとしたが、甲斐かいがなかつた。彼は恋愛の爪痕つめあとを受けていた。心の中に一つの空虚があつて、それを満たさなければならなかつた。一度味わつたことのある者を焼きつくすような、情愛と快樂とのあの恐ろしい要求の代りに、たとい反対のものでいいから何か他の熱情が必要だつた。輕蔑の熱情、驕慢な純潔の

熱情、徳操の信念の熱情でも。——しかしそれらのものでもやはり足りなかつた。もはや彼の飢えをいやすに足りなかつた。それはただ一時のごまかしにすぎなかつた。彼の生活は、急激な反動の連続——極端から極端への飛躍の連続だつた。あるいは、非人間的禁欲主義の規矩きくに生活を押し込もうとした。そしてもはや物を食はず、水を飲み、歩行や労苦や不眠で身体を痛めつけ、あらゆる楽しみをみずから禁じた。あるいは、自分のような者には力が真の道徳であると思ひ込んだ。そして快樂の追求にふけつた。しかしいづれの場合においても、彼は不幸であつた。彼はもはや一人ではいられなかつた。また、もはや一人でいずにはおられなかつた。

彼にたいする唯一の救済の道は、真の友情を——おそらくはローザの友情を、見出すことであつたらう。彼はその中に身をのがれることができたであろう。しかし両家はまったく不和になつていた。もうたがいに顔を合せることもなかつた。ただ一度、クリストフはローザに出会つた。彼女はミサから出て来るところだつた。彼は彼女に近寄るのを躊躇ちゆうちよした。彼女の方は、彼の姿を見ると、やって来ようとする様子をした。しかし彼がついに、石段を降りてゐる信者たちの人波を分けて、彼女に近づこうとすると、彼女は眼をそらした。彼がそばまで行くと、彼女は冷やかに挨拶あいさをして、そのまま通り過ぎた。彼はその若い娘の心の中に、強い冷酷な軽蔑けいべつの念があるのを感じた。彼女がやはり自分を愛

していて、それをうち明けたがってることを、彼は感じなかった。彼女はしかしその愛を、罪でもあるようにみずからとがめていた。クリストフを不良で墮落してると信じ、ますます自分と縁遠いものであると信じていた。かくて二人はたがいに永久に取失った。そしてそれは、どちらにとつても、かえつていいことだろう。彼女は善良ではあつたが、彼を理解するには十分の生活力がなかつた。彼は愛情と尊重とをほしがつてはいたが、喜びも苦しみも空気もない閉じこもつた凡^{ほん}庸^{よう}な生活では、息がつけなかつたろう。で二人は苦しむことになるわけだつた——たがいに苦しませるのを苦しむことになるわけだつた。それで結局、二人を隔てた不運は、往々あるように——常にあるように、強壯で永続

する者にとっては、幸運であつた。

しかし当座の間、それは二人にとっては大きな悲しみであり、不幸であつた。ことにクリストフにとってそうだつた。最も多く知力をそなえた者から知力を奪い去り、最も善良な者から善良さを奪い去るかの観がある、その仮借なき徳操、その狭小な心は、彼を苛いらだ立たせ、彼を傷つけ、反発心によつて彼をより放恣ほうしな生活に投げ入れたのである。

クリストフはアーダとともに近郊の酒場をぶらついてるうちに、数人の面白い若者と——浮浪者らと、知り合いになつていた。彼らのやり口の呑気のんきさと自由さとは、彼にはさほど不快ではなかつた。その一人のフリーデマンというのは、彼と同じく音楽家で、

オルガニストであつて、三十ばかりの年配、才知もあり、自分の職務にも堪能たんのうだつた。しかし救うべからざる怠惰者なまけもので、その凡庸な域を脱するため努力をするよりもむしろ、飢え死にか渴かわき死にかする方を好むほどだつた。そして齷齪あくせくと生活して人々の悪口を言いながら、自分の懶惰らんだを慰めていた。その多少重々しい皮肉な冗談は、人を笑わせずにはおかなかつた。彼は仲間の人々よりずっと放胆で、地位ある人々をけなすのを——さすがに目配せや略語をもつておずおずとはあつたが——はばからなかつた。音楽の方面では、世の定説に少しも従わず、当代の偉人がほしいままにしてる名声を、狡猾こうかつに罵倒ばとうすることもできた。女も彼からさらに容赦されなかつた。ある女ぎらいな僧侶の古い

言葉で、クリストフがだれよりもよくその辛辣さを味わい得た一句を、彼は好んで冗談にもち出していた。

——女は霊の死滅なり。

クリストフは今や憤懣ふんまんのうちにあつて、フリーデマンと話をすると幾分の気晴しを見出した。彼はフリーデマンを批判し、その卑俗な嘲弄ちようろうの精神を、いつも長く喜ぶことはできなかつた。たえざる嘲笑と否定との調子は、やがては人を苛立たせるものとなり、無力を表白するものであつた。しかしそれはまた、凡俗な輩やからの自己満足的な愚昧ぐまいさをもつて、心を和らげてくれるものでもあつた。クリストフは心の底ではこの友を軽蔑けいべつしながら、もはや彼なしですますことができなかつた。フリーデマンの仲間でき

らに下らない曖昧な落伍者どもといつしよに、二人がいつも相並んで食卓についてるのが見られた。連中は賭博をし、駄弁を弄し、幾晩もぶつとおしに酒を飲んだ。クリストフは豚料理と煙草のむかむかする匂いの中で、突然我に返ることがあつた。そして昏迷した眼であたりの人々を見回した。もはや彼らには見覚えがなかつた。彼は心を痛めながら考えた。

「俺が今いるのはどこなのか？ この連中は何者なのか？ 俺は此奴らとなんの用があるのか？」

彼らの話や笑声をきくと、彼は胸糞が悪くなった。しかしその連中と別れるだけの力がなかつた。家に帰って、自分の欲望や悔恨と差向いになるのが恐かつた。彼は駄目になりつつあつた。

駄目になりつつあることをみずから知っていた。彼は捜し求めた——彼は見た、残忍な明めいりよう瞭りょうさをもつて、フリーデマンのうちに墮落しきつた将来の自分の面影を。そしてその脅威から覚醒させられるどころではなく、かえつてうち倒されてしまったほど、ひどい落胆の過程をたどっていた。

彼はもし破滅し得たら、破滅したであろう。しかし幸いにも、他の同種類の人々と同じく、一つの反発力を、破滅にたいして他人のもたない一つの避難所を、もっていた。第一には力があつた。知力よりもさらに明敏な、意志よりもさらに強い、死ぬことを肯かえんじない生きんとする本能があつた。また次には、芸術家の不思議な好奇心を、真に創造力をそなえた者が皆有している熱烈な没

我性を、彼はみずから知らずしてもつていた。いかに愛し、苦しみ、おのれの情熱にまったく身を投げ出しても、やはり彼はそれらのことをじつと見ていた。それらのことは彼のうちにあつたが、彼自身ではなかつた。無数の小さな魂が、彼のうちで暗々裏に、不可知なしかも確かな定まつた一点の方へ、引き寄せられていた。空中で一つの神秘的な淵ふちから吸い寄せられてる星せいしん辰の世界にも似ていた。そういう無意識的な二重の不断の状態は、日常生活が眠りに入つて、スフィックスの眼が、「存在」の多様な面めんぼう貌ぼうが、睡眠の深淵しんえんから浮かび上つてくる眩げんめい迷の瞬間に、よく現われてきた。クリストフは一年ばかり前から、ことにひどく幻夢につきまどわれた。その中で彼は、自分が同時に異つた数多あまたの存在で、

往々幾世界と幾世紀とで隔てられた遠い数多の存在であることを、いかんともできない幻によつて、一瞬間のうちにはつきり感ずるのであつた。覚醒の状態になつても、その不安な幻惑がまだ残つていて、しかもその原因がなんであつたかは覚えていなかつた。

それはあたかも、一つの固定觀念からくる疲れのようなものであつて、觀念が消え失せてもその痕跡こんせきは残つており、しかもそれがなんであつたかはわからない。しかるに、彼の魂が日々の網の目の中で苦しげにもがいてる一方には、注意深い晴朗なも一つの魂が彼のうちで、それらの絶望的な努力を傍観していた。彼の眼にはそれが見えなかつた。しかしそれは彼の上に、おのれの隠れた光の反照を投げかけていた。その魂は貪慾どんよくであつて、現在の

男や女や大地や情熱や思想などを、しかも苦々しい凡庸ほんような卑賤ひせんなものまでも、喜んで感じ許容し観察し理解したがっていた。――それだけのことで、それらのものにその光明を多少伝うるに足り、クリストフを虚無から救い出すに足りた。その魂は彼に、自分とはまったくの孤独ではないと感じさせた。そしてこのすべてであることを好みすべてを知ることを好む第二の魂が、あらゆる破壊的な情熱にたいして城壁を築いてくれた。

この魂は、水の上に彼の頭を維持させるには足りたが、独力で水から脱することを彼に得さしはしなかった。彼はまだ、自分を制御し精神を統一することは、なかなかできなかつた。いかなる仕事もできなかつた。やがて多産的になるべき精神的危機を、彼

は通っていた。——未来の全生涯はすでにそこに芽めぐんでいた——
しかしその内心の豊富さは、当座の間、狂きやうもう妄もうな行いとなつて
しか現われなかつた。そしてかかる過剰な充実の直接の結果は、
最も貧弱な空粗のそれと異ならなかつた。クリストフは自分の生
活力におぼらされていた。彼のあらゆる力は恐るべき圧力を受け
て、あまりに急激に全部同時に生成していた。ただ意志だけがそ
れほど急激には生長していなかつた。そして意志はそれらの怪物
の群に脅かされていた。性格はきしり揺らいでいた。他人の眼に
は、その地震は、その内部の大漲ちやういつつ溢いつつは、少しも見えなかつた。
クリストフ自身にも、意欲し創造し生存するの力がないことだけ
しか、見えなかつた。欲念、本能的衝動、思想などが、あたかも

火山地帯から硫黄いおうの煙が噴出ふきだすように、相次いで飛び出してきた。そして彼はみずから尋ねた。

「こんどは何が出てくるだろうか？ 俺はどうなるだろうか？ いつもこうだろうか、あるいはすっかりおしまいになるだろうか？ 俺は取るに足らない者だろうか、いつまでたっても？」

そしてここに、遺伝的な本能が、先人らの悪徳が、現われ出て来た。

彼は飲酒にふけた。

彼はいつも、酒の匂いをさせ、笑い興じ、ぐったりして、家にもどってきた。

憐れあわにもルイザは、彼の様子をながめ、溜息ためいきをつき、なんとも言わず、そして祈りをした。

ところがある晩、彼は酒場から出て、町はずれの街道で、数歩前こりのところに、例の梱こりを背負つてるゴットフリートおじ叔父のおかしな影を見つけた。数か月来、この小男は土地へ帰つて来たことがなかった。いつもその不在が次第に長くなっていた。でクリストフはたいへん喜んで彼を呼びかけた。重荷の下に前かがみになつてるゴットフリートは、ふり返つた。そして大袈裟げさな身振りをやつてるクリストフの姿を見、ある標石の上にすわつて、待ち受けた。クリストフは元気な顔つきをし、飛びはねながら近寄つていった。そしてたいへんなつかしい様子を示して叔父の手をうち振

った。ゴットフリートは長い間彼を見つめて、それから言った。

「今晚は、メルキオルさん。」

クリストフは叔父が間違えたのだと思つた。そして笑いだした。「かわいそうにもうろく耄碌したんだな、」と彼は考えた、「記憶おぼえがないんだな。」

ゴットフリートは実際、老いぼれしな萎び縮みいじけた様子をしていた。かすかな短い小さな息をしていた。クリストフはやたらにしゃべりつづけた。ゴットフリートはこり梱をまた肩にかつぎ、黙つて歩きだした。身振りをし大声にしゃべりたててるクリストフと、咳せきをしながら黙つてるゴットフリートとは、相並んで帰りかけた。そしてクリストフに呼びかけられると、ゴットフリートは彼をや

はりメルキオルと呼んだ。こんどはクリストフは尋ねてみた。

「ああ、どうして僕をメルキオルというんです？　僕はクリストフというんですよ。よく知ってるじゃないですか。僕の名を忘れたんですか？」

ゴットフリートは、立止りもせず、彼の方に眼をあげ、彼をながめ、頭を振り、そして冷やかに言った。

「いやメルキオルさんだ。よく見覚えがある。」

クリストフは駭然がいぜんとして立止った。ゴットフリートはとぼとぼ歩きつづけていた。クリストフは答え返しもせず、そのあとについていった。彼は酔いもさめてしまった。ある奏楽コーヒー店の戸のそばを通りかかると、入口のガス燈と寂しい舗石との映

つてるその曇った板ガラスのところへやって行つた。彼はメルキオルの面影を認めた。心転倒して家に歸つた。

彼はみずから尋ね、みずから魂を探りながら、その夜を過した。彼は今や了解した。そうだ、自分のうちに芽を出してゐる本能や悪徳を認めた。彼はそれが恐ろしかった。メルキオルの死体の傍らかたわで通夜つやをしたこと、種々誓いをたてたこと、などを考えた。そしてその後の自分の生活を調べてみた。ことごとく誓いにそむいていた。一年この方、何をしてきたのであつたか？ 自分の神のために、自分の芸術のために、自分の魂のために、何をしてきたのであつたか？ 自分の永遠のために、何をしてきたのであつたか？ 失われ濫費され汚けがされぬ日は、一日もなかつた。一つの作

品もなく、一つの思想もなく、一つの持続した努力もなかった。たがいに破壊し合う欲念の混乱。風、埃ほこり、虚無……。望んでもなんの甲斐かいがあつたらう？ 望んだことは何一つなしていなかった。望んだことの反対をばかりなしていた。なりたくなかつたものになつてしまった、というのが彼の生活の総勘定であつた。

彼は少しも寝なかつた。朝の六時ごろ（まだ暗かつた）、ゴツトフリートが出発の支度したくをする音が聞こえた。——ゴツトフリートはそれ以上足を留めようと思つていながつた。町を通るついでに、いつものとおり、妹と甥おいとを抱擁しにやつて来たのであつた。でも翌朝はまた出かけると、前もつて言つておいた。

クリストフは降りて行つた。苦悶の一夜のために蒼ざあおめて落ち

くぼんだ彼の顔を、ゴットフリートは見た。彼はクリストフにやさしく微笑ほほえんでやり、ちよつといつしよに來ないかと尋ねた。未明に二人はいつしよに出かけた。何も語る必要はなかつた。たがいには了解していた。墓地のそばを通ると、ゴットフリートは言った。

「はいろいろよ、ね。」

彼はこの地へ來るとかならず、ジャン・ミシエルとメルキオルとを訪れていた。クリストフはもう一年も墓參をしたことがなかつた。ゴットフリートはメルキオルの墓の前にひざまずいた、そして言った。

「このお二人がよく眠るように、そして私たちを悩ますことのない

いように、お祈りをしよう。」

彼の考えはいつも、不思議な迷信と明るい分別とが交り合っていた。クリストフは時としてそれに驚かされることがあった。しかしこんどは、その考えをよく了解した。二人は墓地を出るまで、それ以上何にも言わなかった。

きしる鉄門をまたしめてから、二人は壁に沿って、雪の滴りしたたが落ちてる墓地の糸杉いとすぎの下の小道をたどり、眼覚めかけてる寒そうな畑中を歩いて行った。クリストフは泣きだした。

「ああ、叔父さんおじ、」と彼は言った、「僕は苦しい！」

彼の恋の経験については、ゴットフリートを困らすだろうという妙な懸念から、あえて語り得なかった。そして、自分の恥ずか

しいこと、凡庸なこと、卑劣なこと、誓いを破ったこと、などを話した。

「叔父さん、どうしたらいいでしょう？ 僕は望んだ、たたかつた。そして一年たつても、やはり前と同じ所にいる。いや同じ所にもいない！ 退歩してしまった。僕はなんの役にもたたない、なんの役にもたたないんです。生活を駄目だめにしてしまつたんです、誓いにそむいたんです！……」

二人は町を見晴す丘に上りかけていた。ゴットフリートはやさしく言った。

「そんなことはこんどきりじゃないよ。人は望むとおりのことができるものではない。望む、また生きる、それは別々だ。くよく

よするもんじやない。肝腎かんじんなことは、ねえ、望んだり生きたりするのに飽きないことだ。その他のことは私たちの知ったことじやない。」

クリストフは絶望的にくり返した。

「僕は誓いに背いたんです！」

「聞こえるかい？……」とゴツトフリートは言った。

(田舎いなかで鶏とりが鳴いていた。)

「あの鶏とりも皆、誓いに背いただけかのためにも歌ってるんだ。私たちのめいめいのために、毎朝歌ってくれる。」

「もう僕のために、」とクリストフは切なげに言った、「鶏も歌ってくれない日が来るでしょう……明日のない日が。そして僕の

生活はどうなってることでしよう？」

「いつだって明日はあるよ。」とゴットフリートは言った。

「でも、望んだってなんの役にもたたないんなら、どうしたらいいでしよう？」

「用心をするがいい、そして祈るがいい。」

「僕はもう信じていません。」

ゴットフリートは微笑ほほえんだ。

「信じていないとしたら、生きていられないはずだ。だれでも信じてるものだ。祈るがいいよ。」

「何を祈るんです？」

真赤まっかな冷たい地平線に出かかっている太陽を、ゴットフリートは

彼にさし示した。

「日の出にたいして、信心深くなければいけない。一年後のことを、十年後のことを、考えてはいけない。今日こんにちのことを考えるんだよ。理屈を捨ててしまいがいい。理屈はみんな、いいかね、たとい道德の理屈でも、よくないものだ、馬鹿げたものだ、害になるものだ。生活に無理をしてはいけない。今日こんにちに生きるのだ。その日その日にたいして信心深くしてるのだ。その日その日を愛し、尊敬し、ことにそれを凋ませず、花を咲かすのを邪魔しないことだ。今日きょうのようにどんよりした陰気な一日でも、それを愛するのだ。気をもんではいけない。ごらんよ、今は冬だ。何もかも眠っている。がよい土地は、また眼を覚ますだろう。よい土地で

ありさえすればいい、よい土地のように辛抱強くありさえすればいい。信心深くしてるんだよ。待つんだよ。お前が善良なら、万事がうまくいくだろう。もしお前が善良でないなら、弱いなら、成功していかないなら、それでも、やはりそのまま満足していかないといけない。もちろんそれ以上できないからだ。それに、なぜそれ以上を望むんだい？ なぜできもしないことをあくせくするんだい？ できることをしなればいけない……我が為し得る程度を。」

「それじゃあまりつまらない。」とクリストフは顔をしかめながら言った。

ゴットフリートは親しげに笑った。

「それでもだれよりも以上のことをなすわけだ。お前は傲慢だ。ごうまん英雄になりたがってる。それだから馬鹿なまねしかやれないんだ……。英雄！……私はそれがどんなものだからよく知らない。しかしだね、私が想像すると、英雄というのは、自分にできることをする人だ。ところが他の者はそういうふうにはやらない。」

「ああ！」とクリストフは溜息をついた、「そんなら生きてても何になるでしょう？　生きてても無駄です。『欲するは能うことなり！』……と言ってる人たちもあります。」

ゴットフリートはまた静かに笑った。

「そうかい？……だがそれは大きな嘘つきだよ。でなけりや、たいした望みをもつてない人たちだ……。」

二人は丘の頂きに着いていた。やさしく抱擁し合った。小さな行商人は、疲れた足取りで去っていった。クリストフはその遠ざかってゆく姿をながめながら、じつと考えに沈んだ。彼は叔父おじの言葉をみずからくり返した。

「我が為し得る程度を。」

そして彼は微笑ほほえみながら考えた。

「そうだ……それでもやはり……十分だ。」

彼は町の方へ帰りかけた。堅くなった雪が、靴の下で音をたてた。冬の鋭い朔風さくふうが、丘の上に、いじけた樹木の裸枝を震わしていた。その風は、彼の頬を赤くなし、彼の皮膚を刺し、彼の血を鞭むちうった。下の方には、人家の赤い屋根が、まぶしい寒い日の

光に笑っていた。空気は強く酷きびしかった。凍った大地は、辛辣しんらつな歓喜を感じてるがようだった。クリストフの心も大地と同じだった。彼は考えていた。

「俺も眼を覚ますだろう。」

彼の眼にはまだ涙があった。彼は手の甲でそれをぬぐった。そして霧の帷とぼりの中にはいつてゆく太陽を、微笑みながらなめた。雪を含んだ重い雲が、強風に吹きたてられて、町の上を通っていた。彼はその雲に向って軽侮の身振りをした。氷のような風が吹いていた……。

「吹け、吹け！……俺をどうにでもしろ！ 俺を吹き送れ！……俺は行先をよく知ってるのだ。」

青空文庫情報

底本：「ジャン・クリストフ（一）」岩波文庫、岩波書店

1986（昭和61）年6月16日改版第1刷発行

入力…tatsuki

校正：伊藤時也

2008年1月27日作成

2009年8月1日修正

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.aozora.gr.jp/>)

で作られました。入力、校正、制作にあたった

のは、ボランテイアの皆さんです。

ジャン・クリストフ

JEAN CHRISTOPHE

2020年 7月13日 初版

奥 付

発行 青空文庫

著者 第三巻 青年

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>

※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。

<http://tokimi.sylphid.jp/>